

第一編

国分の自然・人口

第1章 自然と風土

第一章 自然と風土

第一節 位置と面積

昭和二十九年（一九五四）東襲山・清水・国分・東国分・敷根の五か町村が合併し、翌三十年二月一日には人口三万六〇〇〇人の国分市が誕生した。

国分市は鹿児島県のほぼ中央部に位置し、県都鹿児島市まで約三〇㌔、鹿児島空港まで一〇㌔の距離にある。市の北部から東部にかけて標高六〇㌔から五〇〇㌔の山地や山地がとり巻き、普通上場^{うわば}といわれる地域が市の面積の七〇％を占めている。南部と西部は広々とした平地が広がり、国分平野を形成している。北は始良郡霧島町、東は始良郡福山町と曾於郡財部町、南東は福山町に接し、西は天降川を挟んで始良郡隼人町、南西は鹿児島湾に面している。



29年4月1日 国分町・東襲山村・清水村合併
同年5月10日 敷根村・東国分村もこれと合併
人口 35,988人 7,886戸
122,51km² 資料：『国分市統計書』

表1-1 国分市の位置と面積

位 置	方位	経 緯 度	地 名
本市の位置	極東	東経 130° 54' 00"	川内 本戸
	極西	東経 130° 44' 24"	野口 西高城
	南端	北緯 31° 40' 12"	上之段 堂田
	北端	北緯 31° 47' 24"	重久 札の窪
シビックセンター 所在地		東経 130° 45' 56"	
		北緯 31° 44' 14"	
最長距離	東西		15.33km
	南北		13.78km
海拔	最高	鹿谷岳	570.5m
	上場	木原台地	270m
		春山台地	220m
	平地	市役所	6m
	最低	海岸	0m
本市の面積			122.51km ²

(注) 『国分市統計書』市関係課の調査による。

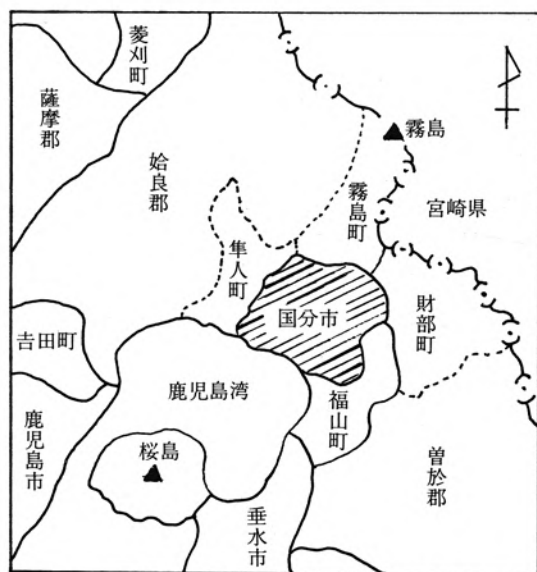


図1-1 国分市の位置

表 1-2 土地利用の推移（面積）

（単位：ha, %）

年度	区分	総数	耕地			山林	宅地	その他
			田	畑	計			
昭和30年	実数	12,139	1,450	1,228	2,678	6,686	—	2,775
	比率	100.0	12.0	10.0	22.0	55.0		23.0
40年	実数	12,139	1,360	1,030	2,390	7,230	389	2,130
	比率	100.0	11.2	8.5	19.7	59.6	3.2	17.5
50年	実数	12,139	1,532	1,009	2,541	7,120	541	1,937
	比率	100.0	12.6	8.3	20.9	58.6	4.5	16.0
60年	実数	12,139	1,458	1,189	2,647	7,258	946	1,288
	比率	100.0	12.0	9.8	21.8	59.8	7.8	10.6
平成5年	実数	12,250	1,460	969	2,429	7,270	1,164	1,387
	比率	100.0	11.9	7.9	19.8	59.4	9.5	11.3
	対30年	100.9	100.9	78.9	91.0	90.7		

（注）『国分市統計書』による。昭和30年のその他は宅地を含む。

平成2年より総面積111ha増加、地積調査の結果による。

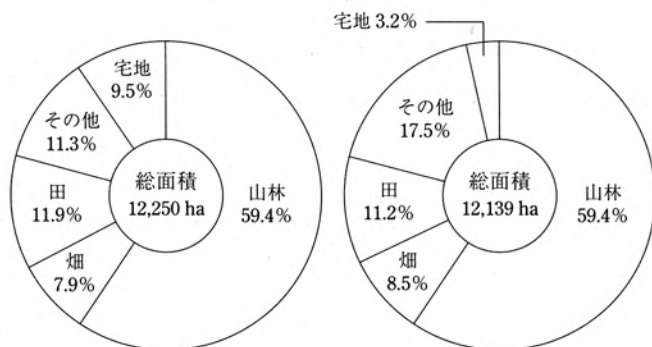


図 1-2 地目別割合（左：平成5年度，右：昭和40年度）

表1-3 地域別地目別面積一覧（平成5年）

（単位：ha、％）

地 域		耕 地				林 地	宅地・他	総 計
		計	田	畑	樹園地			
県 総計	実数	102,569	35,868	55,664	11,057	588,127	225,962	916,658
	比率	11.2	3.9	6.1	1.2	64.1	24.6	100
市 合計 (14市)	実数	21,994	8,931	10,161	2,852	145,229	71,968	239,141
	比率	9.1	3.7	4.2	1.2	60.7	30.1	100
鹿児島市	実数	1,281	484	626	170	13,502	14,259	28,942
	比率	4.4	1.7	2.1	0.6	46.6	49.2	100
国分市	実数	1,235	892	264	79	7,604	3,412	12,251
	比率	10.0	7.3	2.1	0.6	62.0	27.9	100

（『鹿児島県統計年鑑』より）

また北に遠く霧島の山々（高千穂峰・新燃岳・韓国岳）を仰ぎ、南に錦江湾を隔てて桜島を望む風光明媚な位置にある。さらに大隅半島・薩摩半島の交点に位置し、古代から戦略上や文化交流の要地として、数々の歴史を有する土地でもある。

表1-2は土地利用の推移を地目別に示したものである。

表1-2や図1-2で注目されるのは、宅地が昭和四十年度の三八九％（三・二％）から、平成五年度には一一六四％（九・五％）と、大幅な増加がみられることである。宅地増加の主な理由としては、企業誘致に伴い、昭和四十年に約三万一〇〇〇人であった人口が、平成二年には約四万六〇〇〇人となり、平成八年現在では五万人を超え、約一・六倍となったことによる人口増加により住宅建設が進み、現在も宅地は増加しつつある。

表1-3で注目されるのは、水田の構成比率が県全体または県内一四市のそれに比べて、格段に大きいことである。江戸時代における当地域の新田開発、干拓・用水路の開削等が大いに進み、肥沃な水田地帯に変ぼうを遂げたことによるものと思われる。

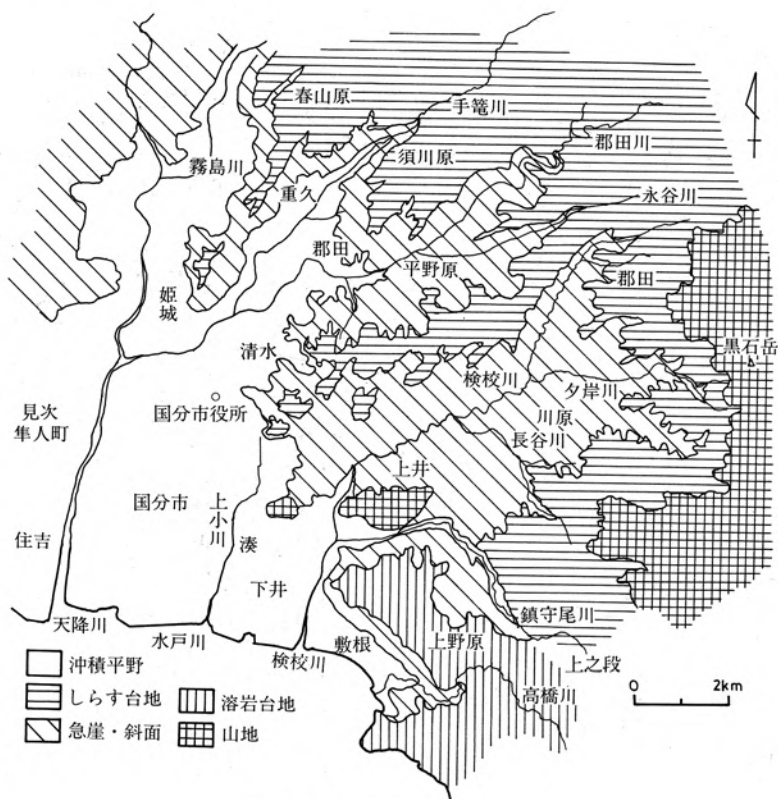


図1-3 国分市の地形区分

第二節 地形

一 地形の概要

国分市の地形は大きく分けて、始良カルデラのカルデラ壁とその外側に広がる台地、およびカルデラ内部にある沖積平野からできている(図1-3)。

始良カルデラは鹿児島湾の奥部にあり、東西二四歳、南北二三歳のほぼ円形をしたカルデラである。

始良カルデラの外輪山は国分市街地の背後に広がる台地に相当する。標高が最も低いのはカルデラ壁の近くで約二〇〇mあり、そこから外側(北側)に向かって少しずつ高さを増し、霧島山系の裾野に連なっている。国分市の台地は主に「シラス」と呼ばれる火砕流堆積物からつくられ、台地周辺は河川によって侵

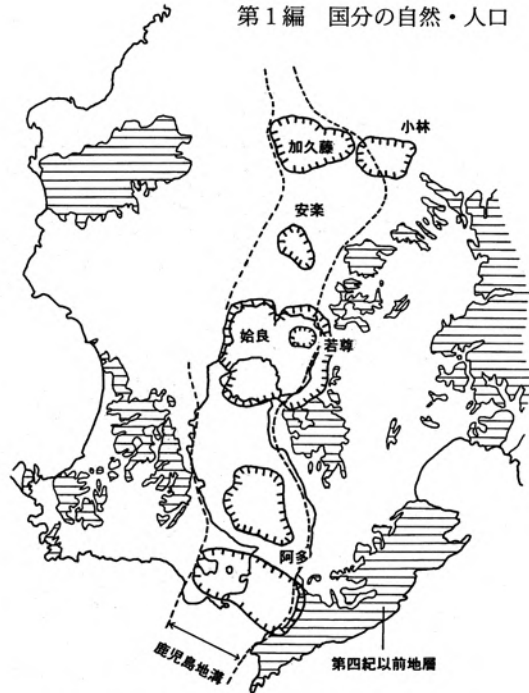


図1-4 鹿児島地溝の位置とカルデラ
〔注1を改変〕

中央部を流れる小さな須戸川がある。この三本の川の主流はいずれもほぼ南北に流れている。

二 カルデラ

鹿児島湾はおおよそ南北に細長く連なっているが、これは「鹿児島地溝」と呼ばれる陥没地帯に海水が入ってきたものである。

鹿児島地溝は図1-4にあるように、霧島火山群の北側の加久藤盆地から始まり、鹿児島湾入口で終わっている。この地溝は中央部で約一〇〇〇メートルにわたって階段状に土地が落ち込んできたもので、陥没はおおよそ三〇〇万年前に始まったとされている。

食され切り立った崖となっているが、台地の内部はほとんど高低差がなく平坦となっている。

国分市・隼人町付近は県内の他地域にくらべ平野が発達し、その面積は約一五〇〇ヘクタールに達し、鹿児島湾沿岸では最大の広さをもっている。

平野の中を流れる川は隼人町との境にある天降川（新川）、国分市東部にある検校川の二つが主で、その他に

この地溝の中では火山活動が繰り返し起こっており、これまでに膨大な量のテフラ（軽石や火山灰・火砕流堆積物など）が噴出している。地溝内には北から加久藤カルデラ・安楽カルデラ・始良カルデラ、それに阿多カルデラなど多くのカルデラがある。

このなかで始良カルデラは国分市の南側にある巨大カルデラで、かつてはここからシラスが噴出したとされている。

第1章 自然と風土

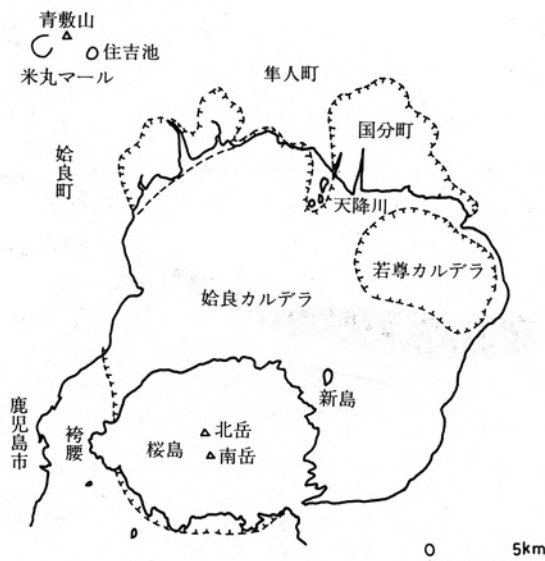


図1-5 始良カルデラ〔注2より〕

いた。始良カルデラは鹿児島湾奥部にある東西二四歳、南北二三歳のほぼ円形をしたカルデラである(図1-5)。国分市付近はカルデラの北東壁に相当するが、西壁・東壁に比べカルデラ壁ははつきりしない。

ところで、最近では始良カルデラはいくつかの小カルデラ(プロトカルデラ)が集まったものと考えられるようになり、始良カルデラ全体がシラスの噴出口ではな

く、その中の国分市南部海中にある若尊カルデラが噴出源と推定されている(図1-5)。若尊カルデラは長径八歳のほぼだ円形をした小カルデラで、カルデラ壁は垂直に切り立っており、内部は平坦で最深部の深さは約二〇〇メートルとなっている。

安楽カルデラは新川溪谷沿いのカルデラであるが、重力異常から推定されたカルデラであり、地形的にははっきりしていない。

三台地

国分平野から北側には平坦な台地が広がっているが、これらの台地はシラスからつくられたシラス台地、安山岩からつくられた溶岩台地の二つに区分できる。シラスは火砕流堆積物であり、シラス台地は大きくは火砕流台地に相当する。

シラス台地は基盤の四万十累層群の上に堆積した古い火砕流堆積物、始良層と呼ばれる砂礫層・凝灰岩層、それにシラスからつくられている。台地の先端部分ではシラスが一〇〇メートル程度と厚いが、基部では急激に薄くなり四万十累層群が顔を出すようになる。

万十累層群の高度が、北側ほど高くなっているために起こる現象である。

台地の間を小河川が流れているため台地は分断され、おおよそ北東から南西の方向へ細長く伸びている。台地の周囲は急角度で切り立っており、植生は貧弱で洪水の

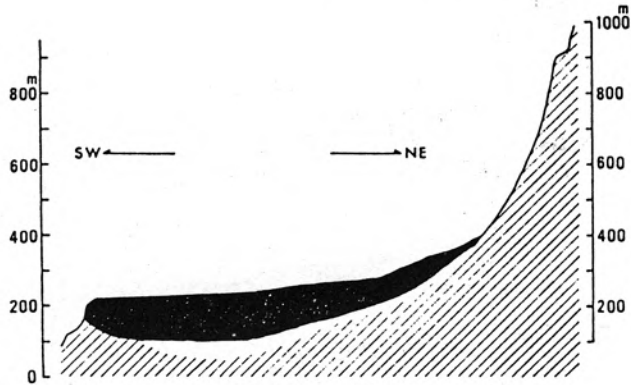


図1-6 シラス台地の断面〔注3より〕

台地の内部は凹凸が少なく平坦で、畑として利用されている。台地の高さを見ると、通常の火砕流台地と違って、カルデラ縁が約二〇〇mと最も低く、そこから北側へ離れるに従って高くなっていく（図1-6）。

これは基盤の四

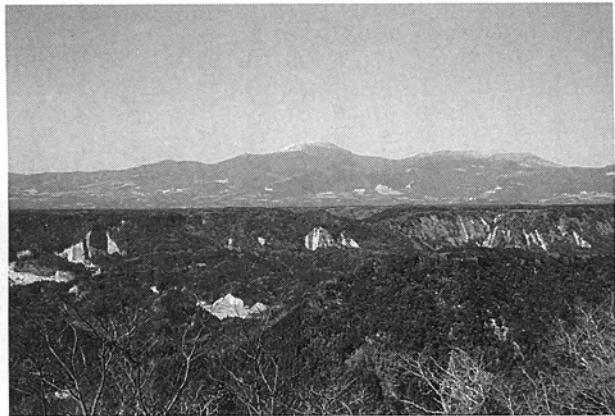


写真1-1 シラス台地遠望（上野原より）

直に切り立った地形をしており、「メサ」と呼ばれる地形になっている。どの台地もほぼ同じような高さを保っており、遠方から見ると一つながりの台地に見える（写真1-1）。

台地の内部には河川は全く見られず、かつては飲料・

たびに表土が流出し大きな災害を引き起こしている。

台地は春山原・須川原・木原原・白蔵原など、一般に「原（バイ・ハイ）」と呼ばれている。台地を遠方から見ると、上面が平坦で両端が垂

農業用水に苦勞したが、近年は水道などが整備され畑地として有効利用できるようになった。

四 平野と河川

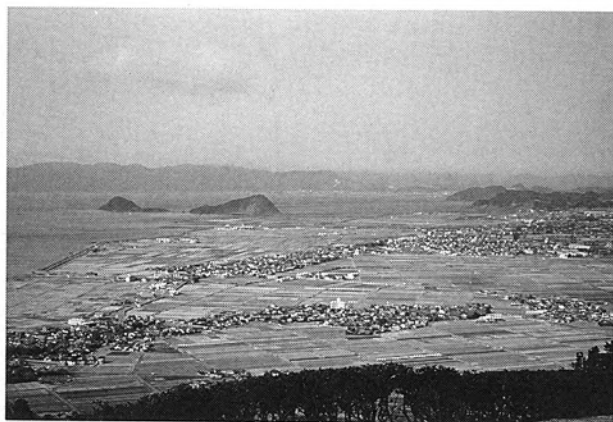


写真 1-2 国分市展望（上野原より）

国分市内の平野は三角州性の沖積平野で、

天降川や校川が始良カルデラのカルデラ壁を削ってつくったものである。なかでも天降川が重要な働きをしており、隼人町西光寺付近を頂点とし、南に開いた扇の形に開いてい

る（写真1-2）。

『旧郷土誌』によると天降川は、第一九代島津藩主光久の時代（一六六六年）に現在の位置に河道を付け替えられ、新しい川という意味で新川と名づけられている。

それ以前は国分市大津より南東に流れ、大津川となつて府中と野口の間を過ぎ、手籠川をあわせて広瀬川となり旧東国分村に入り、松木・福島・上小川および湊と広瀬の中間を経て海に注いでいた。広瀬川と関係ある地名として、高岸・川跡・湊口・入舟・荷上げ・舟つき松・源ヶ島・広瀬川原・大鳥の池などの地名が残されている。

これらの河川の流路沿いには自然堤防と後背湿地帯が残されていたが、最近の基盤整備事業などにより消滅してしまつた。『旧郷土誌』によれば銅田南西部には、イカダを組んで田植えをするほどの湿地帯が広がっていた。

天降川の支流は国分市内を北東く南西方向へ流れており、永谷川・郡田川・手籠川の三つがある。校校川の支流は芦谷川と鎮守尾川とがあり、互いに直角な方向へ流れている。

これらの河川によりつくられた平野の地形は、自然堤防や数段の段丘に区分される。自然堤防は主に天降川

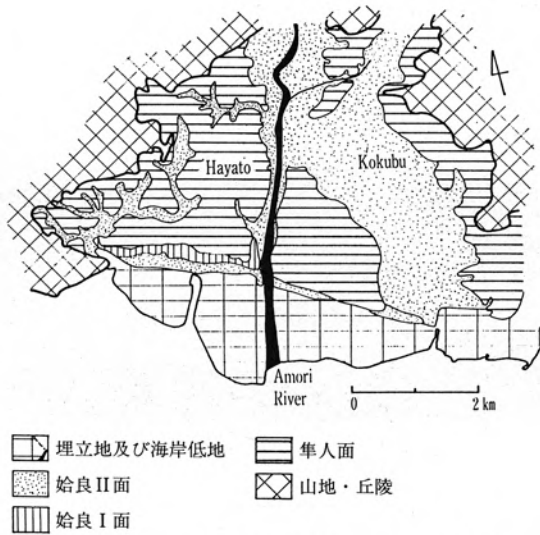


図 1-7 国分・隼人地方の段丘〔注 4 より〕

の兩岸に沿って細長く分布するが、その他にも旧自然堤防と推定される地形が、野口東から福島・上小川を経て新地・湊付近まで断続しながら続いている。

段丘地形は主に福島から広瀬一带に分布しており、ここでは標高八〇一二メートル程度の台地状となっている。この付近一帯の地形を調査した森脇広らは、国分市内の段丘を高位面に相当する隼人面、低位面に相当する始良Ⅱ面

の二つに区分している（図 1-7）。隼人面は完新世の海進によって形成された面で、東側は六メートル程度で低く西部ほど高くなっている。

第三節 地 質

一 地質の概要

国分市は始良カルデラのカルデラ壁とその外輪山、およびカルデラ原に相当し、地質は複雑で変化に富んでいる（図 1-8）。

国分市の地質は大きく、①基盤をつくる中生代の四万十累層群、②第四紀の堆積岩類、③第四紀の安山岩類、④カルデラからの噴出物、⑤沖積層の五つに区分できる（表 1-4）。

四万十累層群は中生代白亜紀～新生代古第三紀ころの海底に堆積した地層で、関東山地から中部日本・紀伊半島・四国・九州を通り奄美諸島まで分布している。主に砂岩、泥岩が押しつぶされてできた頁岩、それに砂岩・頁岩の互層からなり、それらが互いに重なりあつて地層

第1章 自然と風土

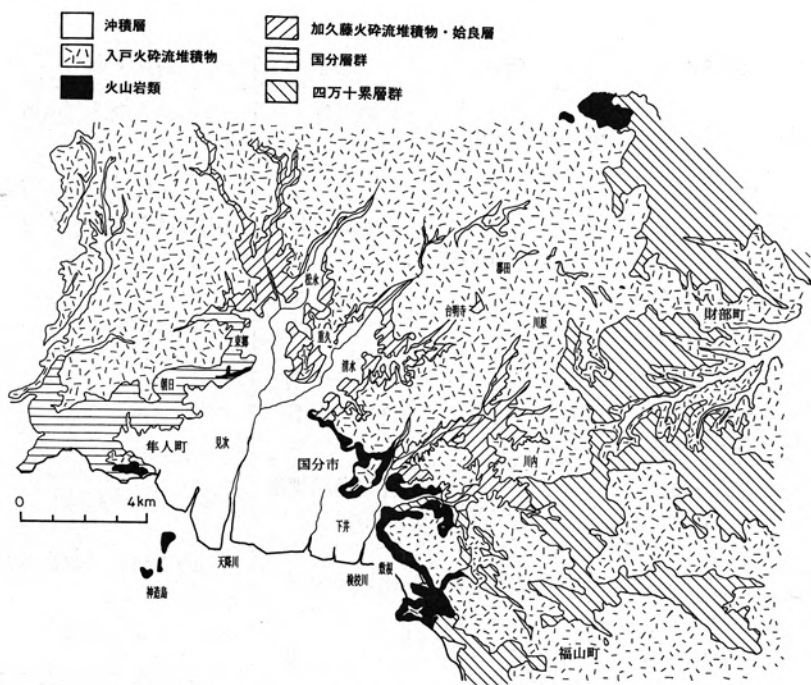


図1-8 国分市の地質概略図〔注13を改変〕

をつくっている。

国分市内では四万十累層群は北部・東部の山地や台地の縁辺部にあり、白亜紀の砂岩や頁岩および砂岩頁岩互層、それに玄武岩質の塩基性岩類からできている。地表に出ている部分は強い風化作用を受けており、特に頁岩は細かく割れ小規模な土砂崩れなどを起こしやすい。第四紀の堆積岩類はシラス台地の裾野に分布し、未固結～弱固結の砂岩・凝灰岩・礫岩などからなり、普通は水平またはゆるい傾斜で堆積している。これらの地層はかつて国分層群と呼ばれていたが、国分地方の詳しい地質調査を行った荒牧重雄は、これらの第四紀堆積岩類が加久藤火砕流堆積物に覆われることから、従来から知られていた始良層に対比し、これらの地層を始良層1～4に区分している。

その後の調査により国分層群と呼ばれる第四紀堆積岩類は、鹿児島湾奥北西部に広く分布していることが分かってきた。最近では国分層群は下部の加治木層と上部の国分層の二つに区分されている。

表1-4 国分市の地質層序

地層名	時代	分布	対比・備考
沖積層／新时期テフラ	1万年前～現在	沖積平野・台地	アカホヤ火山灰（広域分布）など
入戸火砕流堆積物 亀割坂角礫	25,000年前	南九州全域 鹿児島湾北部	AT火山灰は全国に分布 噴出源は若尊カルデラ （始良カルデラ内）
妻屋火砕流堆積物 大隅降下軽石		鹿児島湾北部 南九州全域	
始良層4／大塚降下軽石／深港降下軽石／毛梨野マール堆積物		台地～山地	
岩戸火砕流堆積物 岩戸降下軽石	約5万年前	鹿児島湾奥部 台地沿い	始良カルデラ起源
始良層3／ 福山降下軽石	約7万年前	南九州東部	福山降下軽石は始良カルデラ起源
重久火砕流堆積物	約10万年前	南九州全域	阿多カルデラ起源 阿多火砕流・蒲生火砕流
始良層2／ 鳥浜火砕流堆積物	約15万年前	南九州全域	噴出源は鹿児島湾口部
敷根安山岩		台地	
始良層1			砂礫層、シルト層
加久藤火砕流堆積物	約30万年前	南九州全域	上下2層に区分、萩ノ元火砕流・下門火砕流
梅ヶ谷安山岩／（国分層群）／見帰凝灰岩	更新世中期ころ （約100万年前）	台地・鹿児島湾北西岸	国分層群は国分地域には分布しない
四十万累層群	中生代白亜紀	北～東部台地・山地	国分地域の基盤岩類

第四紀の安山岩類は孤立した丘陵や台地をつくっており、分布は断片的で限られている。いずれも柱状節理のはっきりした輝石安山岩類で、上野原台地や城山では垂直な崖をつくっている。

カルデラからの噴出物は国分市のほとんどを占めており、台地の主要な構成物となっている。第四紀更新世（こうしんせい）中ころの噴出物である加久藤火砕流堆積物から、シラスと呼ばれる火砕流堆積物まで数多くの火砕流堆積物があり、さらにそれらに関係する降下軽石層や、間に挟まる始良層などがある。ほとんどの火砕流堆積物は高熱のため基質をつくる火山ガラスが溶け、溶結凝灰岩（ようけつぎょういがん）と呼ばれる岩石に変化している。

シラス台地の上ではこれらの噴出物を覆って、桜島火山や鬼界カルデラ起源の噴出物が薄く堆積している。

沖積層は国分平野をつくる堆積物で、宅地や田畑の下に隠れてほとんど見ることはできないが、河川の兩岸や微高地などの断面にわずかに露出している。また、建物などの建設に伴うボーリングのコアでも観察することができる。沖積層は未固結のルーズな砂層、および礫層・シルト層からなり、これらが水平に堆積したり交差して

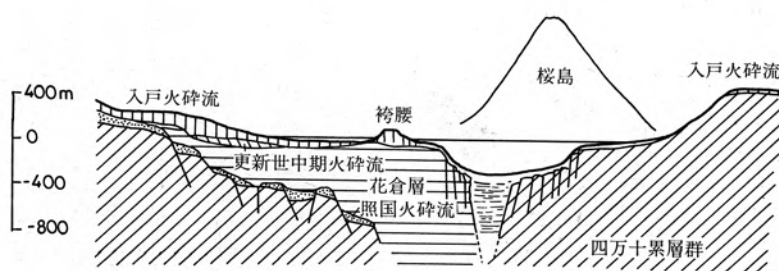


図1-9 地溝断面図〔注5より〕

堆積している。ほとんどの地点で円磨された軽石を含んでおり、侵食により削られたシラス台地の堆積物が堆積したものである。

二 地質構造

国分市は鹿児島湾の奥部にあり、地質構造的には「鹿児島地溝」と呼ばれる陥没地形（図1-4）の内部にあたっている。

国分地方の地質を詳しく調べた太田良平らは、国分層群が海底に堆積した地層であることから、第四紀更新世のころには鹿児島湾ができたが、続いて、第三紀末の火山活動に伴う激しい地塊化運動により国分から霧島

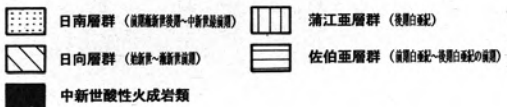
方面にかけての地溝ができたと考えた。

その後、露木利貞はこの地溝を「鹿児島地溝」と名づけ、鹿児島湾入口から加久藤盆地まで、南北方向に平行に延びる正断層によってつくられたと考えた。

鹿児島湾周辺で行われた多くのボーリングにより、断層運動の始まった時期は約三〇〇万年前の新第三紀終わりころであることが分かっている。これは谷山付近で陸上に顔を出している照国火砕流堆積物が、鹿児島湾側では地下の深い位置に現れ、それが基盤の四十万十累層群とともに正断層により切られていることから推定された(図1-9)。

このように、鹿児島湾は南北に走る階段状の正断層によって陥没してできた地溝であり、その中で大規模な噴火が繰り返され、始良カルデラや阿多カルデラなどのカルデラが形成されている。

国分市ではこの地溝の東端が上野原台地付近に現れており、この線より東側には四十万十累層群が堆積するがその西側には見られず、国分層群や若い火砕流堆積物などによって埋められて



薩摩層群(白亜紀)

(一) 四十万十累層群

三 地質各論

いる。国分平野内部で行われたボーリングはそれほど多くないが、それらによるといづれも四十万十累層群には達しておらず、鹿児島市などの例から数百メートル以上陥没していると思われる。

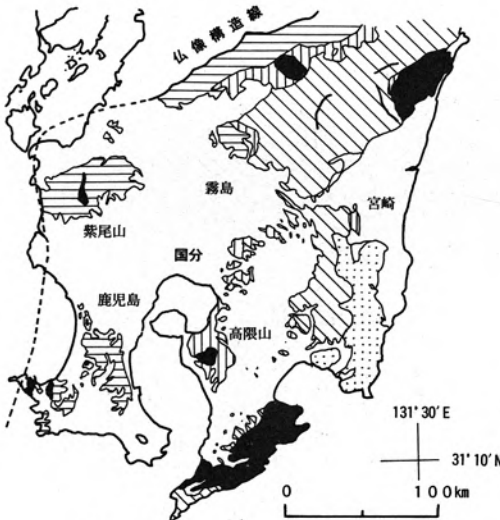


図1-10 南九州の四十万十累層群の分布
(注6より)

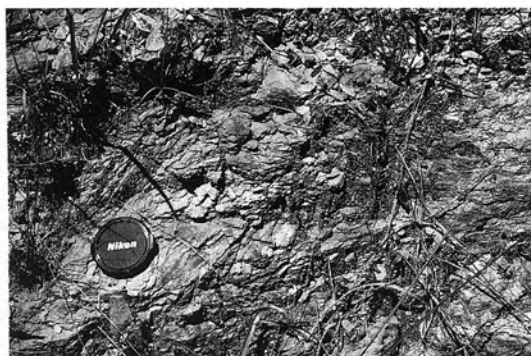


写真1-3 四万十累層群 (口輪野)



写真1-4 四万十累層群の崖崩れ (黒石)

鹿児島県内には四万十累層群とよばれる砂岩・頁岩および砂岩頁岩の互層が広く分布している(図1-10)。県内に見られる四万十累層群は、大まかに中生代白亜紀(約一億年前)の地層と新生代古第三紀(約五〇〇〇万年前)の地層に区分されている。白亜紀の地層は県本土の広い範囲に堆積しているが、古第三紀の地層は大隅半島東部の志布志付近から佐多岬にかけて帯状に分布している。

国分市内で見られる四万十累層群は、白亜紀に堆積

した財部層と呼ばれる地層であるが、シラスなどに覆われるため分布は断片的で、わずかに北・東部の山地に現れている。

岩石は暗褐色・黒色を帯びた頁岩、黄褐色細粒砂岩がほとんどを占めており、それらの間に褐色・緑色の凝灰岩や塩基性岩類、および珪質岩や凝灰岩質砂岩・礫岩などが挟まれている。

頁岩は細かい葉理の見えるもので、それらが薄い層をつくって成層している。地表に現れている部分は激しい風化作用を受けており、細かい破片に割れてポロポロとなっている(写真1-3)。このため集中豪雨などの

ときには崩れやすく、斜面での表層型崖崩れの原因となっている(写真1-4)。

砂岩は国分市南東部の上之段付近で発達するが、黄褐色・灰黒色で塊状の岩石となっている。単層の厚さは

数十メートル程度あり、間に薄い頁岩層を挟みながら繰り返している。

塩基性岩類はあまり見られないが、淡緑色を帯びた凝灰岩および凝灰岩質頁岩を主体としている。

国分市内の四万十累層群の地質構造は複雑であるが、地層の延びる方向（走向）はおおよそ北東—南西で、傾斜は急傾斜で北西方向へ傾いている。小断層がいたるところで発達しているが、大規模な断層は見られない。

また財部層は全体としてドーム・ベースン構造（もりあがりへとへこみがくりかえす構造）、または短軸の背斜向斜を繰り返していることが分かっているが、黒石から田代にかけての一带にはやや規模の大きな背斜構造がある。

国分市における四万十累層群の堆積物の特徴から、これらの地層は中生代白亜紀の海溝付近に堆積した砂や泥が固まったもので、海底での地すべりにより砂や泥が乱雑に混じった乱泥流が発生し、それが混濁流となつて斜面を流れ下り、最後に沈むときに砂と泥にふるい分けられたものである。

(二) 国分層群

国分層群の 鹿児島湾の奥部の広い範囲には、泥岩・シルト岩・砂岩などからつくられた第四紀の堆積岩類が分布し、「国分層群」と呼ばれているが、前に述べたように実際にはこの層は国分市内には分布していない。しかし、国分層群は国分市の地史を考える上で重要な地層であり、地層命名のいきさつや国分層群の特徴などを簡単に述べることにする。

一九四〇年代末に伊田一善らは、国分市敷根地域の天然ガス調査を行ったが、それにより国分周辺に第四紀の堆積岩類が分布することが分かり、「国分層群」と命名した。その後、一九五〇年代に国分地方を調査した沢村孝之助や太田良平も国分層群に注目し、太田は地層の間に不整合があるため下部層・中部層・上部層に区分した。

ところが一九六〇年代に国分地方の地質を詳しく調べた荒牧重雄は、国分市内に分布する第四紀の堆積岩類は加久藤火砕流堆積物より上位にあり、これらは伊田らの国分層群には含まれないことを明らかにした。一九七〇年代になると、露木利貞らは地層が最もよく発達する隼人町の堆積岩類を「国分層」とし、さらに長谷義隆は国分層を間に挟まる不整合を境にして二つに分け、下部の

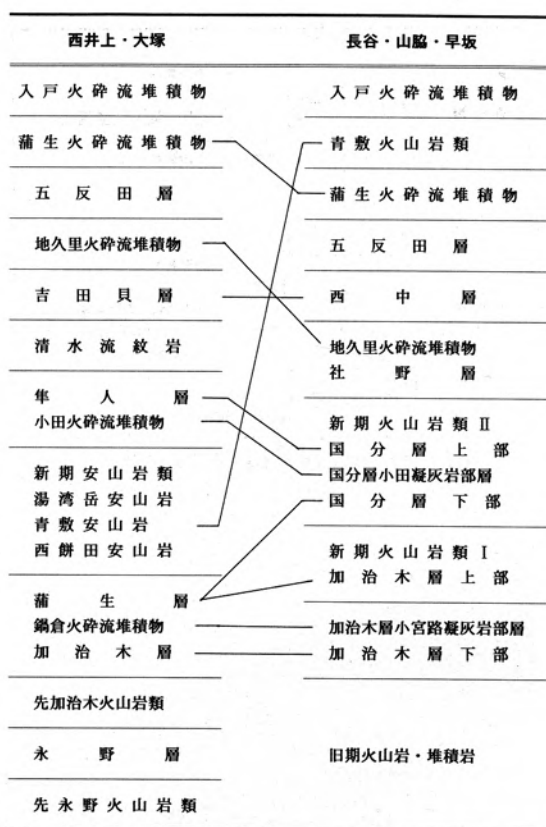


図1-11 国分層の区分〔注12より〕

加治木層と上部の国分層に区分した(図1-11)。一方、一九八〇年代になると西井上剛・大塚裕之は、永野層や加治木安山岩類を不整合に覆い、清水流紋岩や吉田貝化石層などに覆われる第四紀の堆積岩や安山岩類を「国分層群」として再定義した。そして国分層群は、加治木層・鍋倉火砕流堆積物・蒲生層・小田火砕流堆積物・隼人層からなり、各層の間は不整合であるとした。

長谷義隆はこれらの見解をまとめ、鹿児島湾北西部に分布する第四紀の堆積岩類は、下位の加治木層と上位の国分層に区分されるとした。また加治木層を下部、小宮路凝灰岩部層、上部の三層に区分し、同じく国分層を下部、小田凝灰岩部層、上部の三層に区分した。

国分層群の国分層群は前述のように大きく二層に区分されているが、下部の加治木層には海棲の貝化石が多く含まれ、地層は内湾性の浅い海に堆積したことが分かる。また、ほとんどの地層が凝灰岩質であることから、周辺では火山活動が盛んであったことも分かる。さらに、この地層の上位には火砕流堆積物が堆積するので、カルデラをつくるような激しい火山活動もあり、海が埋め立てられるようなこともあったと思われる。

加治木層の上部からはほとんど貝化石は出なくなり、また地層はデルタ性の堆積物となることから、海は

より浅くなっていたことが分かる。
 このようにして鹿児島湾の奥部はいったん陸化したが、次の国分層の堆積時期になると再び海に変化し、内湾性の貝やウニなどの棲む浅い海となった。この時期にも火山活動は盛んで、中規模の火砕流噴火を発生させるようなこともあった(図1-12)。

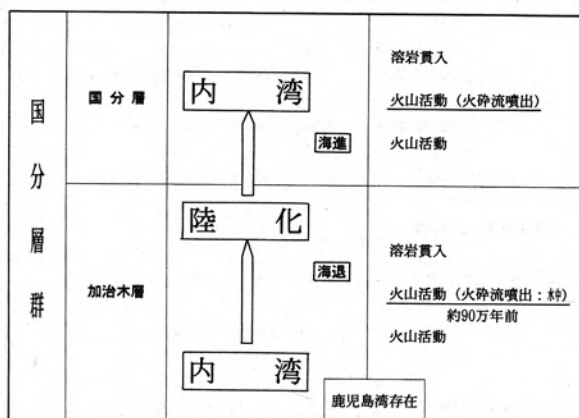


図1-12 国分層の堆積環境の変化
 [注12より]

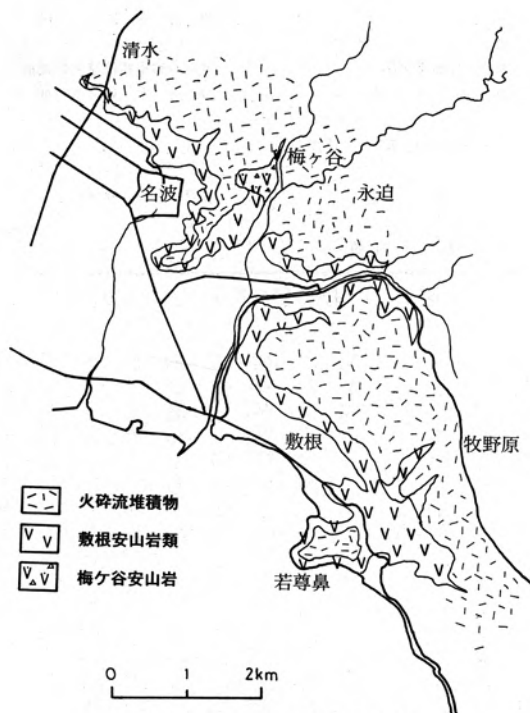


図1-13 安山岩類の分布

国分層群の堆積時期は第四紀更新世のところで、加治木層の中部にある小宮路凝灰岩部層（鍋倉火砕流）のフィッシュントラック（FT）年代は〇・九±〇・一七Ma（Ma＝一〇〇万年）である。
 この時代にはすでに鹿児島湾はできており、国分市の西側から始良町にかけての一带は、南から海が侵入して

きて浅い海となっていた。そしてその周辺部分では火山活動が活発で、地層のもとになる火山灰や軽石を大量に降らせていた。

(三) 第四紀の安山岩類

国分市内の火山噴出物は、台地の基底に分布する安山岩類と火砕流堆積物の二つに区分され、安山岩類は時代の違う梅ヶ谷安山岩と敷根安山岩の二つがある(図1-13)。

梅ヶ谷安山岩

梅ヶ谷集落の東側および北側の狭い範囲には、風化がはげしく板状節理の発達した安山岩が分布している。場所によっては流理構造(溶岩流の流れたようす)がはつきりしており、全体に灰色を帯び、斜長石や輝石の斑晶が目立っている。顕微鏡下では著しい累帯構造(成分の違いでできた縞模様)をもつ斜長石・シソ輝石・フツウ輝石・磁鉄鉱が観察される。また、石基の部分はやや粗粒で、短柱状の斜長石やシソ輝石などの結晶が見られる。

梅ヶ谷安山岩類は加久藤火砕流堆積物に覆われているが、分布範囲が狭く他の地層との関係は

はつきりしておらず、噴出源や噴出年代については不明な点が多い。しかし、隼人町や加治木町内では国分層群に貫入した多数の安山岩類があり、岩相の類似や風化の程度から梅ヶ谷安山岩もこれらと同時期に噴出した可能性が大きい。

敷根安山岩

敷根安山岩の分布は福山町との境界の若尊の鼻付近から、上野原台地・上井・城



写真1-5 上野原台地をつくる安山岩



写真1-6 敷根安山岩の利用(上野原遺跡)

山を経て国分小学校付近までで、各地で柱状節理の発達した急な崖をつくっている。敷根安山岩が最もよく発達するのは上野原の台地で、ここでは沖積平野からほぼ垂直に急な崖が続いている（写真1-5）。外見的には一枚の溶岩流のように見えるが、間に火山角礫岩や凝灰角礫岩を挟んでおり、多くの溶岩流の集合体となっている。台地の南西崖でははっきりした柱状節理が見られる。また、板状節理のはっきりした溶岩流もあり、厚さ数センチで長さ数十センチ程度の大きさに割れやすく、上野原台地上にある縄文時代早期の大規模な遺跡では、炉をつくる材料として盛んに利用されている（写真1-6）。

図1-14は名波から梅ヶ谷に抜ける道路沿いで観察される敷根安山岩の様子で、厚い凝灰角礫岩・火山角礫岩と安山岩の互層がある。安山岩は薄いもので二・三センチ、厚いものでは一〇センチになり、間に挟まる凝灰角礫岩などにより四枚に区分できる。ここでの安山岩の走向・傾斜はN三〇度E、E二五度である。

新鮮な部分では青灰色・灰黒色をしているが、風化すると灰白色を帯びるようになる。また、場所によっては

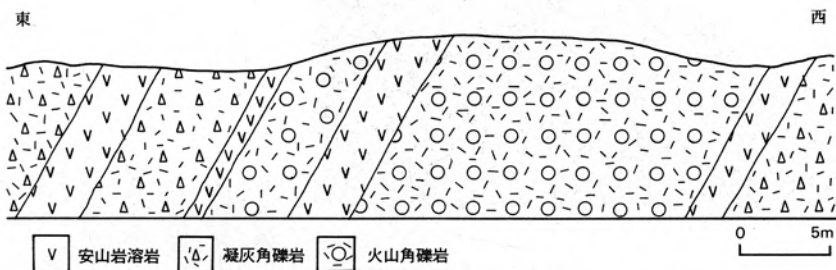


図1-14 敷根安山岩の露頭図

安山岩質の径二センチ程度の捕獲岩を多く含んでいる。安山岩を顕微鏡で見ると、①斜長石・カンラン石・シソ輝石・フツウ輝石、②斜長石・フツウ輝石・シソ輝石、③斜長石・カクセン石・シソ輝石の組み合わせのものがああり、噴出時期によって少しずつ変化している。

凝灰角礫岩・火山角礫岩は火山灰中に安山岩塊が点在するもので、岩塊の大きさは層準により数センチから数十センチまで変化している。また、基質の火山灰は風化しており、全体に赤黄色・赤

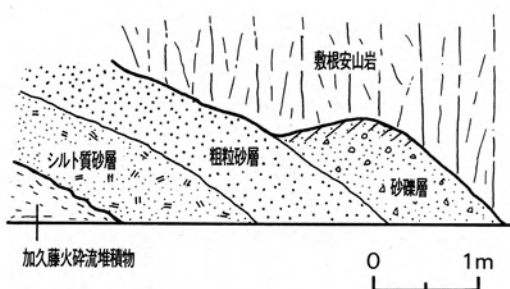


図1-15 敷根安山岩下位の始良層

敷根安山岩の直下には、河川起源の厚さ数メートルの砂礫層がある(図1-15)ことから、安山岩が陸上に噴出したことは間違いない。噴出源についてはよく分からないが、安山岩の分布から始良カルデラ付近であったと推定されている。

名波と梅ヶ谷の間では、敷根安山岩の上部は岩戸火砕流堆積物によって覆われているが、二つの間には厚さ十数メートルの未固結の礫岩や凝灰岩・軽石質礫岩層が堆積している。また、凝灰岩の中には植物化石も入っている。このようなことから敷根安山岩の堆積後は、水のある環境に移ったことが分かり、小規模な湖や河川などができたとと思われる。

(四) 先始良カルデラ火山噴出物

見帰凝灰岩

見帰地域の国道十号線沿いのごく狭い範囲には凝灰岩類が堆積していて、見帰凝

灰岩と呼ばれている。この堆積物は下部の火砕流堆積物を覆い、加久藤火砕流堆積物によって覆われている。火^{まめいし}山豆石を多く含む火山灰や降下軽石層からできているが、分布が断片的で噴出源や時代、規模などはよく分かっていない。

加久藤火砕流 〈分布と対比〉 国分市内で最も古い火堆積物 碎流堆積物は、宮崎県南西部の加久藤

カルデラ(加久藤盆地)に起源をもつ加久藤火砕流堆積物である。加久藤火砕流堆積物は岩相(岩石の顔つき)や含まれる鉱物の違いにより、下部と上部の二つに区分されている。下部は見帰付近に少し分布するだけであるが、上部は広い範囲に分布している。しかし、上部も谷を埋めるように分布しているので、その後の火砕流堆積物に覆われ、川沿いの狭い範囲に断続的に見られるだけである。国分市内では図1-16にあるように、東部の山地を中心に検校川・郡田川流域に分布している。

下部加久藤火砕流堆積物は、北部の人吉盆地から南部

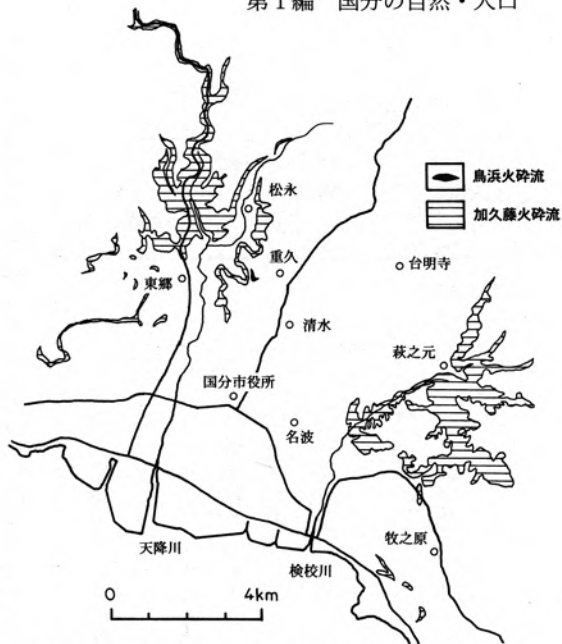


図1-16 加久藤・鳥浜両火砕流堆積物の分布

の鹿児島市周辺まで広く分布し、特に鹿児島市下門付近では厚く、しかも強く溶結していて下門火砕流堆積物と呼ばれている。

上部加久藤火砕流堆積物も同じように広く分布している、鹿児島市内では犬迫火砕流堆積物、始良地方では地久里火砕流堆積物、国分地方では萩ノ元火砕流堆積物、隼人地方では新川火砕流堆積物と呼ばれている。

加久藤火砕流堆積物の噴出年代ははっきりしないが、¹⁴C年代法では五万年より古く、FT（フイツション・トラック）年代では六三、七二、三〇〇ka（ka＝一〇〇〇年）などの測定値があり、層序（地層の重なり）のほうからは、南関東の地層との対比により約三〇万年前という年代が与えられている。

〈下部加久藤火砕流堆積物〉 下部は見帰付近だけに分布しているが、主に頁岩からできた四十累層群の谷の凹凸を埋めるように堆積している。溶結の程度からさらに上部・下部に分けられ、下部は非弱溶結の塊状の堆積物で、上部は灰色を帯びた強溶結部をもち、全体に粗大な柱状節理がはっきりしていて、建築材料などの石材に利用されていた。

溶結した部分を顕微鏡で観察すると基質の部分はガラス質で、その間に石英とカクセン石の結晶が特徴的に含まれている。

〈上部加久藤火砕流堆積物〉 上部加久藤火砕流堆積物と下部加久藤火砕流堆積物の野外における特徴は似ており、両方とも粗大な柱状節理がはっきりし、灰色く灰黄色の溶結凝灰岩となっている。新鮮な岩石の表面はなめ



写真1-7 加久藤火砕流堆積物
(魚踊)

らかでツルツルしているが、風化すると特徴のあるガサガサした表面となる(写真1-7)。国分市内の山地や谷部分で見られる急な崖を持つ小さな高まりは、ほとんど上部加久藤火砕流堆積物からつくられている。

上部加久藤火砕流堆積物は国分市内の広い範囲に堆積し、分布する高さは東部の山地では標高四〇〇m付近までであるが、検校川流域では五〇m以下の高さにあることから、堆積する高度にはかなりの高低差がある。

見帰以外の山地では、四万十累層群の侵食面を不整合に覆って堆積し、低地の梅ヶ谷付近では梅ヶ谷安山岩を不整合に覆って堆積している。

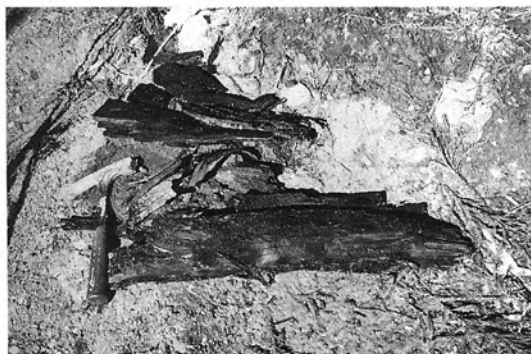


写真1-8 泥炭層中の木の化石(旧亀割坂)

黒塚橋く永迫間での観察によると、下位の数メートルは白色の粘土化した軟らかい凝灰岩であるが、上位の一〇m程度は硬く溶結して非溶結部はなく、その上に阿多(重久)火砕流堆積物が直接堆積している。しかし、ほとんどの地域では溶結部の上に、砂礫層や凝灰岩層が薄く堆積している。特に旧亀割坂では溶結部のすぐ上に礫層が堆積するが、その中には泥炭質の層があり樹木の化石が含まれている(写真1-8)。

上部加久藤火砕流堆積物の鉱物組成は下部加久藤火砕流堆積物とはかなり違っており、斜長石やシソ輝石・フツウ輝石からできていて、石英は含まれずカクセン石もまれにしか入っていない。

鳥浜火砕流 鳥浜火砕流堆積物 鳥浜火砕流堆積物

は、大隅半島・薩摩半島



写真 1-9 鳥浜火砕流堆積物と始良層（剣之宇都）

の南部に厚く堆積する火砕流堆積物であるが、国分市内にもわずかに分布している（図1-16）。隼人町との境界にある剣之宇都の露頭では厚さが五メートル以上あり、こぶし大以上の軽石が混じった火砕流堆積物で溶結しておらず、平行で細かい縞模様が目立っている。鉱物組成は斜長石やカクセン石・石英で、ややカクセン石が多い特徴がある。ここではその上位に、巨礫く大礫の円礫を含む始良層の礫層が不整合で堆積している（写真1-9）。

鳥浜火砕流堆積物は鹿児島湾入口の海底から噴出したもので、加久藤火砕流堆積物と阿多火砕流堆積物の間に挟まれていること、それにF T年代や層序から約二三〇

二五万年前の噴出物と推定されている。

阿多（重久） 〈分布と対比〉 阿多火砕流堆積物は火砕流堆積物 児島湾の入口にある阿多カルデラから噴出したとされるもので、国分市内では北部と南東部に厚く堆積している。

国分地方を調査した沢村孝之助は、重久付近に分布する黒色く黒茶色の弱溶結凝灰岩を重久火砕流と呼んだ。その後、この付近を調査した荒牧重雄は、この溶結凝灰岩が県内の広い範囲に分布する阿多火砕流堆積物と同じものであることを明らかにした（図1-17）。

国分市内では下位にある始良層の平坦な地形面を覆って堆積し、分布高度は五〇メートル前後から二〇〇メートル前後までで、あまり高いところには見られない。主な分布地域は北部の剣之宇都・重久・郡田・清水、および南東部の見埴・神子落付近である。とくに重久付近では道路沿いや手籠川沿いによく露出している。

阿多火砕流堆積物は場所によって色調や岩相の変化が激しく、大隅半島南部や薩摩半島中部では灰黒色く灰色の溶結凝灰岩であるが、鹿屋市付近や枕崎市付近では赤紫色の溶結凝灰岩となり、始良地方では黒茶色の溶結凝



写真1-10 阿多火砕流堆積物(岩戸)

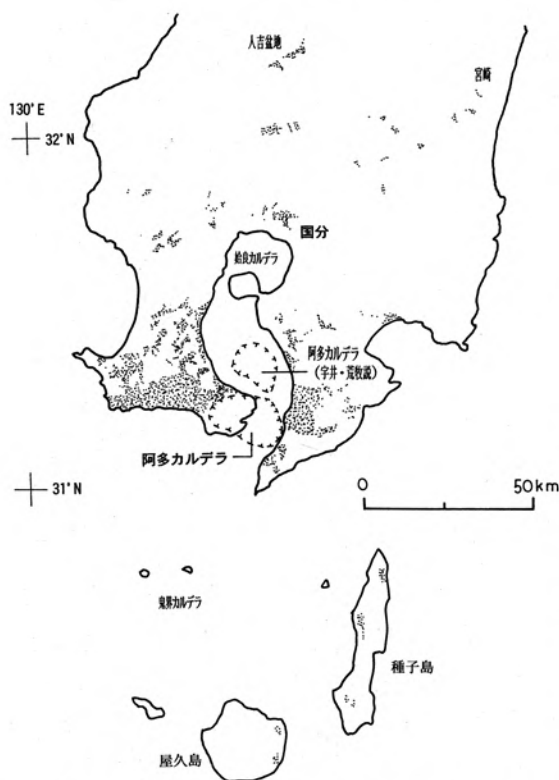


図1-17 阿多カルデラ・火砕流堆積物の分布
〔注7より〕

灰岩となっている。始良地方では柱状節理がよく発達し、蒲生町(かもろ)吉田町にかけてはとくに広く分布しており、蒲生火砕流堆積物と呼ばれている。また、県外の人吉盆地にも数メートルの厚さで堆積する。

〈特徴〉 重久付近では黒茶色を帯びた弱中溶結凝灰岩(写真1-10)が分布し、粗大な柱状節理のはっきりした岩石となっている。この付近では平野をつくる河川

の堆積物に覆われ、下限は見るできない。

剣之字都では始良層の礫層を覆って堆積している(写真1-9)が、最下部には乳白色を帯びた厚さ五〇センチの火山灰層があり、その上にほとんど軽石を含まず溶結もしていない、細粒火山灰質の火砕流堆積物が厚さ約三メートルで堆積し、それが徐々に黒茶色の弱溶結凝灰岩に変化している。この付近一帯では全体の厚さは最大で約三〇メートル

阿多噴火サイクル

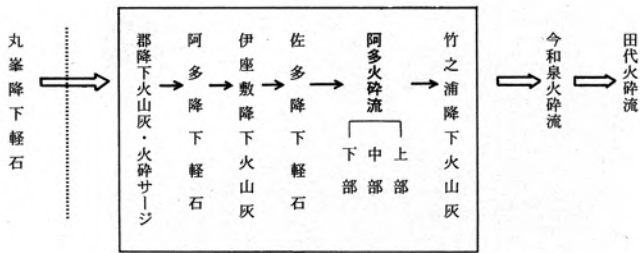


図1-18 阿多火砕流噴火の経過〔注8より作成〕

になっている。

顕微鏡による観察では細粒の火山ガラスが多く含まれるが、火山ガラスは黒色く黒茶色を帯びている。火山ガラスの間には斜長石やシソ輝石・フツウ輝石が点在し、まれにカクセン石や石英が入っている。これらのカクセン石や石英は、流れてくる途中で混入した捕獲結晶と考えられる。

溶結の程度が低いため、流理構造ははっきりしていない。軽石や岩片はそれほど大きくなく、軽石のほとんどはこぶし大以下である。

〈噴出年代と噴火の経過〉 阿多火砕流堆積物の噴出年代については、炭化木片の¹⁴C年代測定値から三万〜五

万年程度とされていたが、最近の精密な測定ではいずれも範囲外になり、他地域の層序や海底堆積物中の有孔虫の研究から、少なくとも一〇万〜一万年ほど前になると推定されている。

前に述べたように阿多火砕流堆積物の噴出源は、一般的には鹿児島湾入口の山川沖にある阿多カルデラとされている（図1-17）。

しかし、阿多火砕流堆積物の流れた方向から、地形的な阿多カルデラより北部にある指宿市知林ヶ島沖の海底付近から噴出したという考えもある。

大隅半島南部を詳しく調査した長岡信治によると、阿多火砕流の噴火の順序は図1-18のようである。これら一連の噴火の最後に破局的な大噴火が発生し、阿多火砕流堆積物が県本土、種子島・屋久島地方、人吉地方および宮崎平野付近にまで堆積した。阿多火砕流堆積物は溶結度の違いなどにより、下部・中部・上部の三層に分けられているが、このうち国分市内まで来ているものは最も大規模な噴火による上部層である。一連の噴火による火砕流堆積物の体積は、二〇〇立方メートル以上と推定されている。この大噴火でできた噴煙柱から降ってきた火山灰

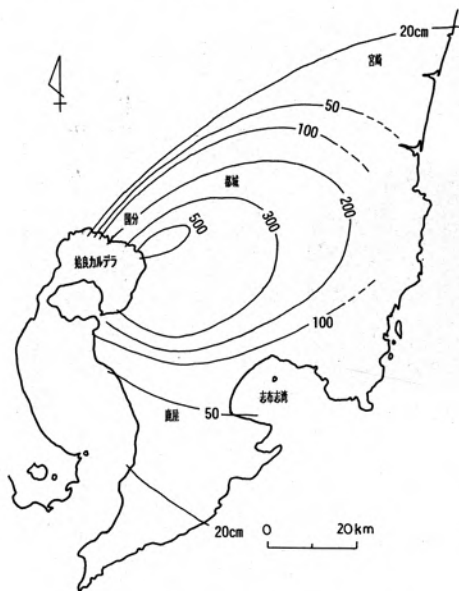


図1-19 福山降下軽石の分布
(注8より)



写真1-11 福山降下軽石 (旧亀割板)

は、遠く南関東にまで降り積もっている。

(五) 始良カルデラ火山噴出物

福山降下 岩戸火砕流堆積物の下位に見られる軽石層
軽石 で、国分市内の広い範囲に分布している。

以前は岩戸火砕流の噴火のすぐ前に噴出したものと考えられ、岩戸降下軽石堆積物と呼ばれたこともあった。

その後、国分地方の詳しい調査を行った長岡信治により、二つの間に約九万年前に噴出した鬼界—黒葛原火山灰(K-Tz火山灰)が挟まることから、福山降下軽石は単独に噴出したことが分かった。

福山降下軽石は旧亀割板の中腹でよく観察できるが、そこでは握りこぶし大以下の軽石がぎっしり詰まった層をつくっている(写真1-11)。軽石はよくふるい分けられ級化構造がはっきりしていて、下部の軽石は大きく上部は小さくなっている。岩片はほとんどなく、あっても小さなものである。

福山降下軽石には黒緑色のカクセン石が特徴的に含まれており、全体として薄いウグイス色を帯び、国分市内に分布する他の噴出物と区別しやすい。

福山降下軽石の噴出源は始良カルデラと推定されている。

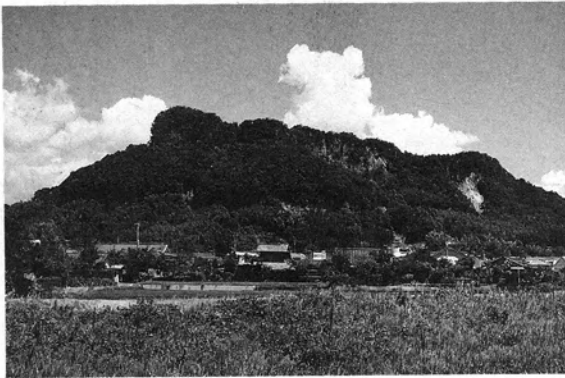


写真1-12 姫城の遠望（向花より）

て（図1-19）、噴出源に近い旧亀割坂付近では最大八
ににもなるが、南にいくに従い薄くなり大根占町付近で
は二〇センチ程度となる。分布主軸は北東方向で、宮崎平野
でも五〇センチ程度の厚さがある。

岩戸火砕流 〈分布と対比〉 国分市岩戸から隼人町姫
堆積物 城にかけては垂直な崖が発達し、孤立し

た山体やメサ状
の地形をつくっ
ているが、この
崖の大部分は岩
戸火砕流堆積物
からできている

（写真1-12）。

岩戸火砕流堆
積物は岩戸付近

でよく発達して
いるが、それ以
外にも城山付近

・永谷川流域・

芦谷川流域・検

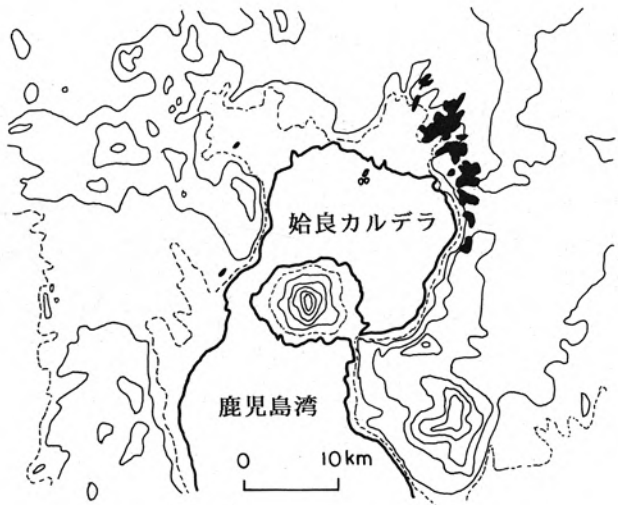


図1-20 岩戸火砕流堆積物の分布〔注8より〕

校川流域・鎮守尾川流域などの広い範囲に分布している
（図1-20）。国分市外ではあまり発達せず、南東部
南部にあたる福山町の海岸沿いにわずかに分布してい
る。

〈特徴〉 岩戸付近では阿多火砕流堆積物の上に厚さ約

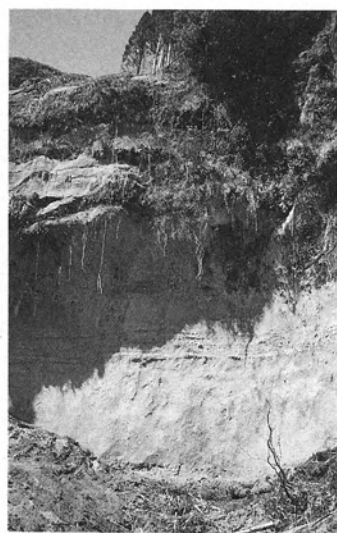


写真 1-13 岩戸火砕流堆積物
(岩戸)

三〇センチの黒色腐植土があり、その上に岩戸火砕流堆積物が厚く堆積している。最下部には厚さ一メートル程度の降下軽石とベース・サージ堆積物（細かく成層した構造をもつ堆積物）があり、その上に溶結していない灰白色の火砕流堆積物、弱く溶結した火砕流堆積物が連続的に堆積している（写真1-13）。

最下部の降下軽石層は岩戸降下軽石層と呼ばれ、国分市から北東の方向に広く分布し、宮崎平野でも数十センチの厚さがあり第三オレンジと呼ばれている。降下軽石の体積は三〇五立方メートルと見積もられている。

火砕流堆積物は最大一〇〇メートルの厚さがあり、姫城から

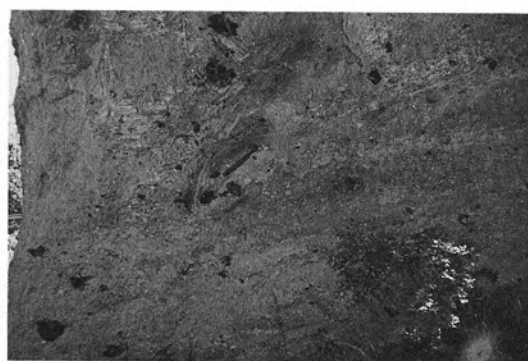


写真 1-14 岩戸火砕流堆積物中のスコリア（岩戸）

岩戸にかけては二段のはっきりした崖が見られる。間に軽石や火山灰層が挟まれており、少なくとも四枚の火砕流堆積物に区分できる。最下部は斜交葉理（しやこうようり）のはっきりしたベース・サージ堆積物で、中部は成層構造をもつ何枚かの火砕流堆積物の集まりとなり、弱溶結して全体によく締まっており、各地で粗大な柱状節理をつくっている。上部は非溶結で白色の火砕流堆積物となっている。

火砕流堆積物の中には白色の軽石、灰色と白色の縞状の軽石・黒茶色のスコリア（コックス状の軽石）が入っている（写真1-14）が、場所によっては軽石が多かったり、逆にスコリアが多かったりすることがある。これらの軽

石・スコリアの大きさは最大で五〇センチ程度であるが、普通は人頭大以下である。

基質の部分は粗粒の結晶からなり、顕微鏡で観察するとシソ輝石とフツウ輝石が多いが、場所によっては石英がやや多いこともある。

岩戸火砕流堆積物はその後の噴出物に覆われ、分布は本来の分布より狭くなっているが、現在の分布から体積は五〜一〇立方メートルと見積もられている。

〈噴出年代と噴火の経過〉 岩戸火砕流の絶対

年代は測定されておらず、正確な時代は不明である。しかし、国分市内では福山降下軽石と大塚降下軽石の間であり、宮崎県側では霧島火山起源のイワオコシと呼ばれる火山噴出物の下位にあり、さらに新田原Ⅲ面を覆っていることから、約五万年前の噴出物とされている。

岩戸火砕流の噴出源は始良カルデラの北縁にあり、プリニアン噴火により軽石を噴出することから始まり、軽石は東側から東北東方向に厚く堆積した。その後は火砕流噴火に移っていったが、その間に大きなプリニアン噴火を数回繰り返した。火砕流堆積物の中には多量のスコ

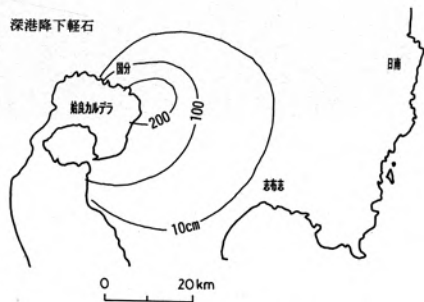
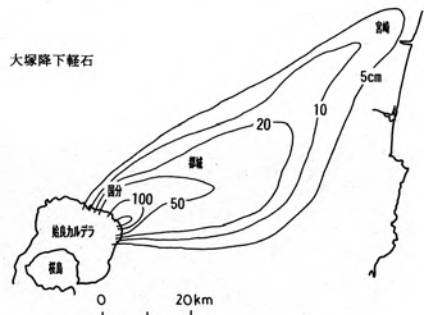


図1-21 大塚降下軽石と深港降下軽石の分布〔注8より〕

リアが入っており、地下で塩基性と酸性の二種類のマグマの混合が起こって噴火した可能性が大きい。

大塚降下 一回きりの噴火による噴出物で、始良4層

軽石 と呼ばれる河川性の堆積物の間に挟まっている。上之段付近では約二メートルの厚さがあり、下の粒径が小さく上が大きい逆級化構造をもっている。軽石は白色でガラス質が強い。

軽石の粒径や厚さの変化からの噴出源は始良カルデラの北東部分と推定され（図1-21）、分布や粒径から求めた体積は約〇・五立方メートルである。

深港降下 深港降下軽石も一回きりの噴火による噴

軽石 出物である。薄木付近では全体の厚さは二

メートル程度であるが、二〇枚以上の薄い軽石層からなり、噴火に盛衰があつたことが分かる。

軽石はやや黄色を帯び、ガラス質のものは少ない。軽石は最下部では最大粒径九〇センチに達するものもある。また、毛梨野付近では最下部に厚さ三〇センチの火山豆石層が堆積している。このことから最初に水蒸気マグマ爆発が起こり、その後ブリニアン噴火に移っていったと思われる。

深港降下軽石の分布は円形をしているが、これは多数の軽石層が噴出し、分布が重なったためと考えられる。噴出源は軽石の粒径や厚さの変化から、大塚降下軽石と同じく始良カルデラ北東部分と推定される(図1-21)。軽石の分布から求めた体積は約一立方メートルである。

毛梨野マール 城山公園北側の玄亀庵付近は両側が切り立った崖で、内部がやや円形をした

盆地状の地形となっている。ここにはかつて小規模な火山があつたと推定されており、毛梨野マール(一回の噴火でできた火口)と呼ばれている(図1-22)。

毛梨野マールからの噴出物は、下位から順に、①岩片や軽石片、粗粒の火山灰の混じった降下堆積物層、②白色の降下軽石層、③多量の黒耀石破片を含み淘汰の悪い爆裂噴出物層、④ラミナの明瞭なベース・サージ堆積物層の四層に区分されている(写真1-15)。このうち④の堆積物は、遠方では火山豆石を多く含むガラス質の火山灰に変化する。

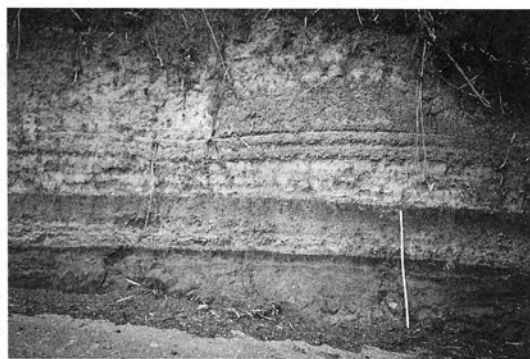


写真1-15 毛梨野サージ堆積物(毛梨野)

このような特徴から毛梨野マールでは、マグマと水とが接触し水蒸気マグマ爆発が発生したと推定される。毛梨野噴出物の体積は約〇・一立方メートルである。

入戸火砕流 堆積物（シラス）
 分布と対比 県本土の広い範囲
 が堆積しており、その特徴から「シラス」と呼ばれてい
 る（図1-23）。

シラスは古くから注目され研究されてきたが、一九四
 ○年代に行われた松本唯一の研究により、鹿児島湾の奥
 にある始良カルデラの噴出物であるとされた。その後、
 この地域を調査した沢田孝之助や太田良平によってくわ

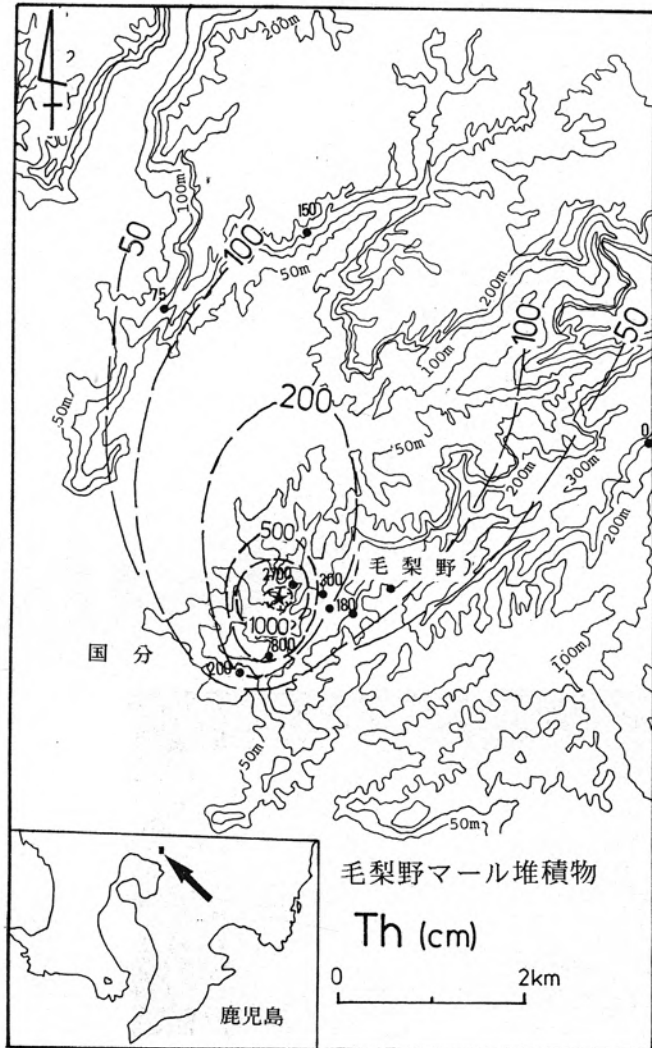


図1-22 毛梨野マール噴出物の分布（注8より）

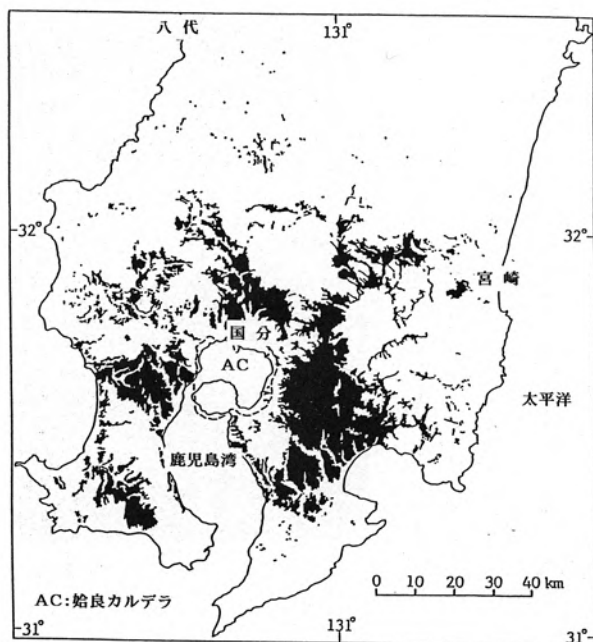


図1-23 シラス（入戸火砕流堆積物）〔注9より〕

しい分布や特徴が示され、さらに荒牧重雄や長岡信治により噴火の経過が明らかにされた。

国分市内では「シラス台地」と呼ばれる台地をつくる
ことが多く（写真1-1）、厚さは一〇〇メートル以上に達す
こともある。最もよく発達するのは、重久の止上から
牧神に至る道路沿いである。太田良平はこの道路途中に

ある入戸の地名をとって、シラスを「入戸火砕流堆積物」と名づけ、これが学術用語として使われている。入戸火砕流堆積物は県本土の、主に川沿いの低地や盆地を埋めるように堆積し、各地で平坦なシラス台地をつくっている。

県外では北部の熊本県人吉盆地や水俣市周辺、北東部の宮崎県都城盆地や宮崎平野まで分布している。また、霧島山系のおおなみの池斜面にも堆積している。現在のところ種子島・屋久島、それに甌島・長島では見つからない。

ところで県内では白色の堆積物を一般にシラスと呼ぶことが多く、時代や噴出源の違う火砕流堆積物をシラスと呼んだり、はなはだしい場合には花崗岩の風化したマサ土をシラスと呼んでいる地域もあり、シラスという言葉葉には問題も含んでいる。

〈特徴〉 入戸火砕流堆積物は白色（灰白色を帯び、ほとんど溶結していない火砕流堆積物である（写真1-16）。

国分市内およびその周辺では、下位から溶結していない火砕流堆積物、弱く溶結した火砕流堆積物、溶結して

いない火砕流堆積物の順に堆積している。溶結していない部分は全体に灰白色を帯びており、最大で一メートルに達するような軽石や岩片を含むこともあるが、全体としては人頭大以下の軽石、鶏卵大以下の岩片が点在する塊状の堆積物である。基質の大部分は透明なバブル・ウォール型火山ガラスからできており、軽石は繊維状のよく発泡したものである。国分市内をはじめ県内の広い範囲で、溶結していない入戸火砕流堆積物にはパイプ構造と呼ばれる火山ガスの抜けた跡があり、場合によっては火山豆石などが入っていることもある（写真1-17）。溶結していない部分の厚さは下部で約二メートル、上部は場所に



写真1-16 入戸火砕流堆積物（上之段）

よっては五メートル以上に達することもある。溶結した部分は粗い結晶や岩片・軽石の目立つ黒茶色



写真1-18 入戸火砕流堆積物の柱状節理（入戸）

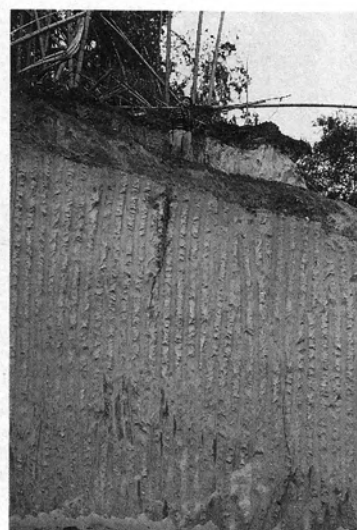


写真1-17 入戸火砕流堆積物中のパイプ構造（伊集院町）

をした岩石となっており、重久付近では粗大な柱状節理がはつきりしている（写真1-18）。ユータキシテック構造（軽石がレンズ状におしつぶされている）もはつきりしており、軽石は引き伸ばされレンズ状になっている。軽石や岩片が大きい点を除けば、外見だけでは阿多火砕流堆積物と区別しにくい。

入戸火砕流堆積物の体積は約二〇〇立方メートルと推定されており、日本における過去最大級の火砕流堆積物の一つである。

〈噴出年代〉 入戸火砕流堆積物の噴出年代については、これまでに多くの¹⁴C年代が測定されていて、それに基づいて一九八〇年代半ばころまでには、入戸火砕流堆積物の噴出年代は約二・二万年前という値が定着していた。しかし、一九九〇年代に入ると近畿地方や東北地方で、泥炭中に挟まれるAT火山灰の¹⁴C年代が次々と測定されるようになり、それらは二・四万〜二・五万年前を示していた。このようなことから今では入戸火砕流堆積物の噴出は、約二・五万年前であったと考えられるようになってきた。

〈噴火の経過〉 入戸火砕流の噴火の経過は詳しく研究

され、図1-24のような順序であることが分かった。

・大隅降下軽石 約二・五万年前に始良カルデラ内で起こった一連の噴火は、まず大規模なプリニー式噴火から始まり、大隅降下軽石と呼ばれる大量の軽石が噴出した。この軽石層は国分市東部では一メートル程度の厚さであるが（写真1-19）、垂水市などでは一〇メートル程度になり



写真1-19 大隅降下軽石（妻屋）

（図1-25）、場所によっては火砕流堆積物に変化している。軽石は白色の角張ったもので、大きさは場所により変化するが、国分市内では鶏卵大以下のものが多く、全体的に下部が細粒で上部が粗粒の逆級化構造が見られ

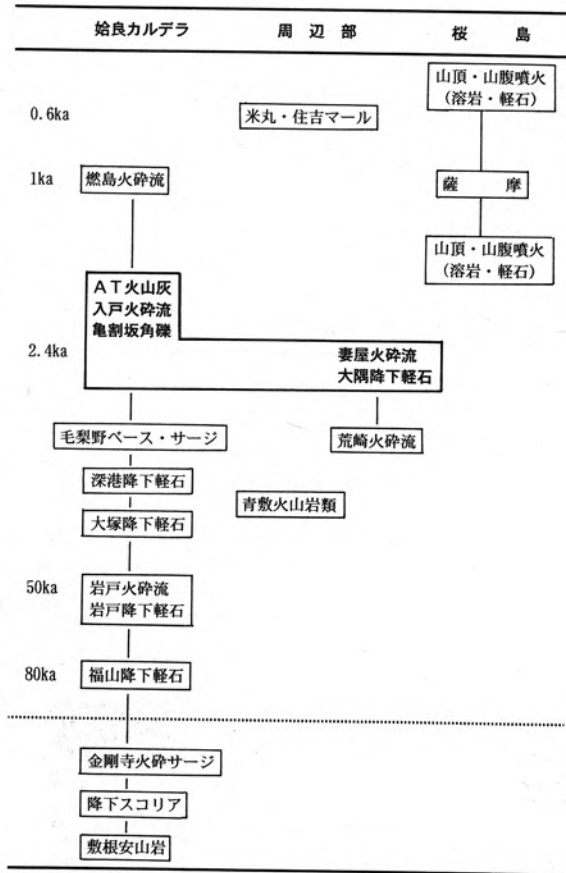


図 1-24 始良カルデラの火山活動
〔注 8 より作成〕

気マグマ爆発が起こり、妻屋火砕流の噴火があった。噴出源は大隅降下軽石と同じ場所と推定されている。このときの噴出物は国分市の妻屋付近で最もよく堆積し、妻屋火砕流堆積物と呼ばれているが、始良カルデラの縁に沿った場所ではどこでも分布している(図 1-26)。入戸火砕流堆積物に比べ細粒で、全体に薄いピンク色を帯びている特徴がある。

妻屋から春山原に登る道路途中では厚さが約一メートルで、直径一センチ程度の黄白色軽石がぎっしりと詰まっている。大隅降下軽石の噴出源は現在の桜島付近で、分布と厚さから体積は約一〇〇立方メートルと推定されているが、これは世界における過去最大級の軽石噴火の一つである。

国分市内ではほとんどの場所に堆積しているが、どの地点でも下部にははっきりした縞模様が見られ、ベース・サージ堆積物となっている(写真 1-20)。また、親指大以下の火山豆石をたくさん含んでいる。このような特徴から、マグマと水が接触して噴火が起こったことが分かる。始良地方では数枚のフローユニット(火砕流の単層)があり、噴火は数回繰り返したと考えられる。妻屋火砕流堆

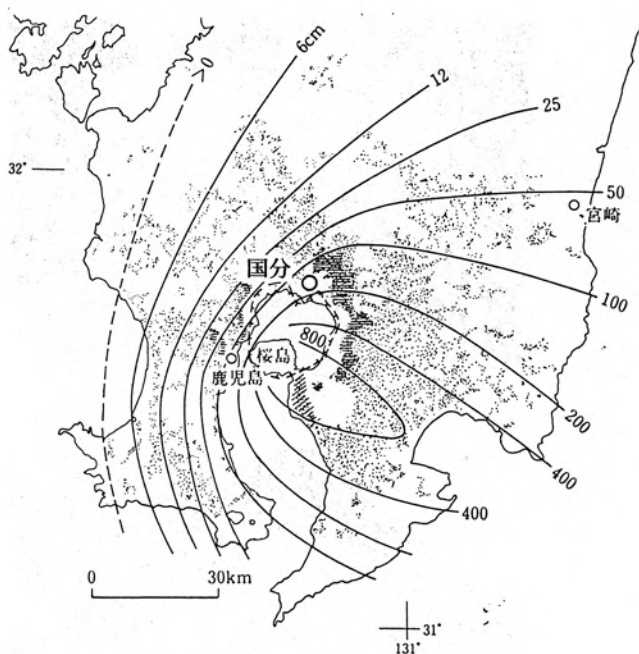


図1-25 大隅降下軽石の分布〔注5より〕

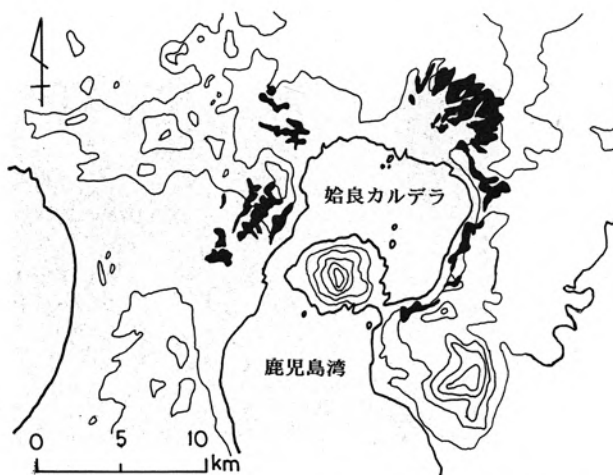


図1-26 妻屋火砕流堆積物の分布〔注8より〕

積物の体積は、約一三立方メートルと見積もられている。

- ・ 入戸火砕流堆積物 妻屋火砕流の噴火後しばらくして破局的な大噴火が発生し、入戸火砕流堆積物が噴出している。妻屋火砕流堆積物の表面に弱い侵食跡があるも

の、はつきりした風化面や腐植土の堆積は見られず、妻屋火砕流堆積物の噴出から入戸火砕流堆積物の噴出までの時間は短く、長くて数か月程度と推定されている。

最近の研究によると、南九州の全域を覆い尽くす膨大

な量の火砕流堆積物を噴出し終わるまで、わずか一日程度の時間であったとされている。

入戸火砕流の噴火は地下深くでマグマが泡立ち、基盤の岩石を破壊しながら噴出することから始まった。この噴火による噴出物は亀割坂角礫層（写真1-21）と呼ばれ、カルデラ縁から鹿児島湾中央部付近まで広く堆積している。全体に角張った安山岩片や四万十累層群の岩

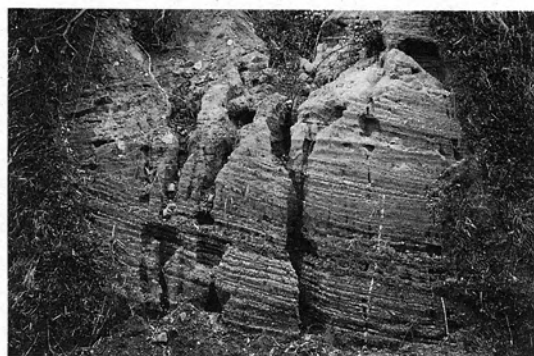


写真1-20 妻屋火砕流堆積物（上野原）



写真1-21 亀割坂角礫層（上之段）

片、凝灰岩片などが入っているが、ごくまれに花崗閃緑岩片なども入っている。

これらの岩片とともに軽石・火山灰が一体になって上空へ噴出し、おそらく鹿児島湾の奥部全体を覆うような巨大な噴煙柱がつくられ、その噴煙柱が崩れて大規模な火砕流が発生し入戸火砕流堆積物となった。岩片の一部は空中高く噴出し、シャワーのように降り注いで堆積し

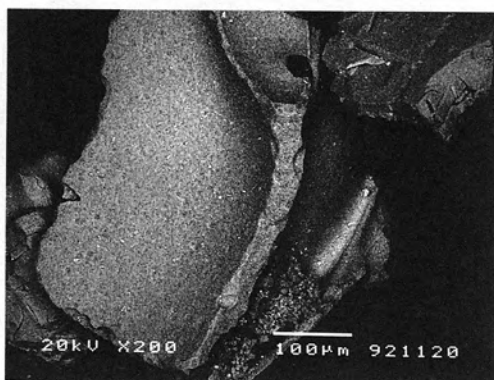


写真1-22 AT火山灰の電顕写真

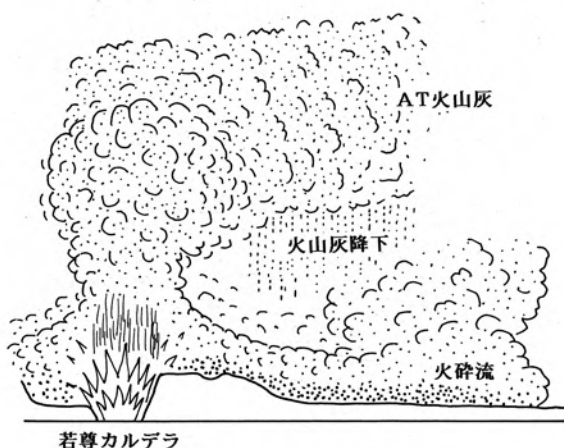


図1-27 ATの噴火様式〔注8より〕

た。岩片の大きさは亀割坂付近で二層以上あり、鹿児島市周辺でも数十センチに達している。

発生した火砕流は高速で山野を駆け抜け、主に谷部分を埋めるように堆積したが、場所によっては一〇〇〇メートル以上の山を越えて流れ堆積した。南九州の約四〇〇〇平方メートルの広さが、入戸火砕流堆積物により埋め尽くされて

しまった。

最近の研究によると入戸火砕流堆積物をもたらしたマグマは、二酸化ケイ素の量が七四％の流紋岩質で、温度は七七〇～七八〇℃、圧力は一六〇〇～一九〇〇気圧であつたと推定されている。

・AT火山灰 入戸火砕流堆積物をつくった噴煙柱の高さは、数十キロ上空の成層圏に達するまでになったと推定されている。噴煙柱は上空で横方向へ広がり、板状をした薄い火山ガラスを主体としたバブル・ウォール型の火山灰を降らせた(図1-27、写真1-22)。この火山灰は初め関東地方の丹沢山地で注目されたが、その後の町田洋・新井房夫の調査で、この火山灰が入戸火砕流堆積物に伴うことが分かり、始良―丹沢火山灰(始良Tn火山灰、一般にAT火山灰という)と呼ばれるようになった。

AT火山灰は始良カルデラを中心に同心円を描くように分布していて(図1-28)、日本付近に卓越している偏西風の影響を受けた、通常の噴出物の分布とは大きく違っている。

県内では種子島や屋久島で明瞭に堆積しているが、そ



図1-28 AT火山灰の分布〔注7より〕

れ以外の地域では入戸火砕流堆積物があるだけでAT火山灰は見られない。種子島や屋久島では厚さ二〇センチ程度で、黄橙色の火山ガラス質火山灰となっている。

宮崎平野では一メートル程度の厚さがあり、数枚の層に分かれている（写真1-23）。ほとんどの場所で火山豆石が入っており、火山灰の降下時に雨が降っていたと思われる。遠方の四国でも数十センチの厚さがあり、中部地方では約一〇センチの厚さになる。現在確認されている最も遠



写真1-23 AT火山灰（宮崎平野）

方は、北部では青森県、南部では沖縄諸島近海の海底である。陸上で確認される最も南部は、奄美諸島の沖永良部島である。

AT火山灰は後期旧石器時代を示す最もよい堆積物であり、しかも各地によく残っていることから、遺跡の発掘などでは時代を決める物差しとして盛んに利用されている。

県内では入戸火砕流堆積物が厚く、その下からナイフ形石器などの遺物を発掘することは困難であるが、遠方の種子島ではAT火山灰のさらに下から、旧石器時代の礫群が見つかっている（写真1-24）。また、枕崎市では



写真1-24 AT火山灰（南種子町）

場所によっては入戸火砕流堆積物の厚さは一〇二メートルもなく、その真下から旧石器時代の礫群が見つかっている。県北部の出水市上場遺跡でも薄く、その下からはナイフ形石器が見つかっている。

県外の多くの遺跡では、AT火山灰の上下からさまざまなタイプのナイフ形石器が見つかっており、最近ではAT火山灰の上下で石器に違いがあることなどが分かっている。

・始良カルデラ

の形成 始良カルデラは鹿児島湾の奥部にあり、東西約二四歳、南北約二三歳、のほぼ円形をしたカルデラである（図1-5）。図にあるように、東側と西側は海拔二〇〇〜四〇〇メートルのカルデラ

壁に取り囲まれているが、北側は国分平野が広がり低く平坦で、南部は海となり、そこには桜島が位置している。典型的なカルデラとは少し違っている。

前に述べたように、従来は入戸火砕流の噴出後に鹿児島湾の奥部が陥没し、それが現在みられる始良カルデラになったと考えられていた。しかし、最近では始良カルデラ北東部にある若尊カルデラと呼ばれる水深二〇〇メートルの小規模な凹地が、入戸火砕流堆積物の噴出源とされている。

これまで述べてきたように、国分地方には多くの火砕流堆積物が見られるが、これらは現在の始良カルデラ付近から噴出したと考えられている。鹿児島湾は約三〇〇万年前から断層運動が起こり、それにより地溝状に落ち込んできたことが分かっており、入戸火砕流堆積物の噴出以前にすでに始良カルデラは存在していたといえる。

・入戸火砕流噴火の与えた影響 入戸火砕流堆積物の噴出した時期は、更新世最後のウルム氷河期の最盛期で、旧石器時代の末期にあたり、噴火がこのころの自然と文化にどのような影響を与えたかについては、さまざま

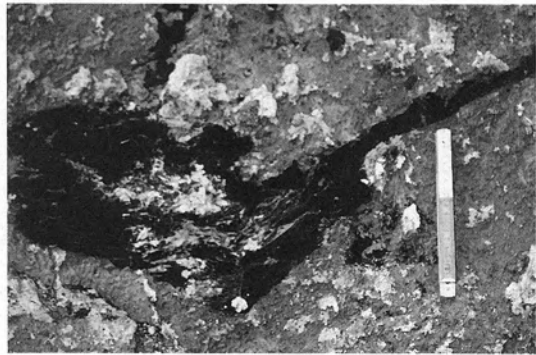


写真 1-25 入戸火砕流堆積物中の炭化木片 (菱刈町)

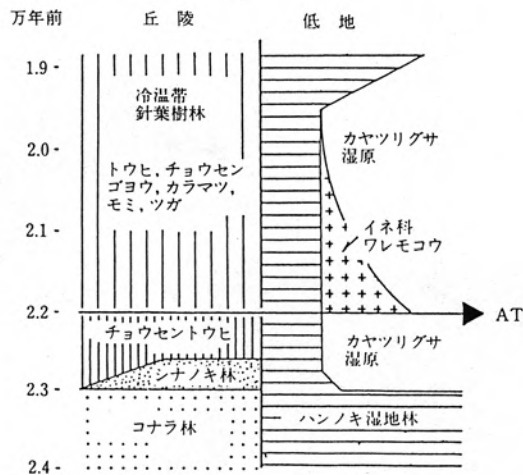


図 1-29 AT前後の植生変化 (注10より)

まな角度から研究されている。

南九州の各地では大隅降下軽石の直下に、樹木が押し潰された状態で横たわっているのが見られる。また、妻屋火砕流堆積物や入戸火砕流堆積物の中にはところどころで炭化木片が入っていて (写真 1-25)、当時の植生は壊滅的な打撃を受けたと推定される。しかし、南九州では花粉分析などが行われておらず、植物の変化などは

与えた影響についてもよく分らない点が多いが、それまで日本全体に一樣な旧石器文化が広がっていたのに対し、噴火後は地域的なまとまりをもった小文化圏に分かれていくのは、噴火の影響を受けたためではないかと推定されている。

(六) 始良層

国分地方に堆積する火砕流堆積物の間には、軟らかい

分かっていない。

関東地方や近畿地方で行われた花粉分析による研究で、当時は針葉樹林が広く山野を覆っていたことが分かっている。この状態で AT 火山灰が降り積もり、水界生物の変動と湿地林と荒地植生の繁茂が起こった。とくに近畿地方では湿地林と荒地植生の繁茂がはげしく、関東地方では針葉樹林化の促進が起こっている (図 1-29)。噴火が文化に

火山灰や砂・礫が数メートル、数十メートルの厚さで堆積しているが、これらは下から順に始良層1、2、3、4に区分されている。

始良層は河川の堆積物や湖の堆積物からできており、それぞれの火砕流堆積物の侵食期間にできた、小さな川や湖に堆積したものである。

始良層1は加久藤火砕流堆積物を覆うもので、その後の火山噴出物などに覆われ、分布はそれほど広くない。

始良層2は敷根安山岩の上にあり、阿多火砕流堆積物に覆われるが、始良層の中では最も厚く分布が広い。国分市重久や姫城付近では、軟らかい火山灰・軽石質火山灰・泥・砂・礫がほぼ平行に堆積している。

この付近での厚さは約二〇^{センチ}で、全体に砂礫が互いに切り合った斜交葉理と呼ばれる堆積構造がはっきりしており、強い水の流れがあるところで堆積したと思われるものが多い。姫城では小^さ中粒の礫が多く、間に薄い^あ垂炭層が挟まっていることもあり、重久では凝灰岩質のシルトや泥が、厚さ約一〇^{センチ}程度で十数メートルほど互層している。場所によっては、水中での地滑りにより地層が曲げられたり折れたりした、スランプ構造と呼ばれる

堆積構造が発達していることもある。

始良層3は岩戸火砕流堆積物に覆われるもので、国分市運動公園付近によく分布している。主に軟らかい小礫や火山灰・砂からできており、どの層も水平に堆積している。名波と梅ヶ谷との間付近では岩戸火砕流堆積物の下に、スコリアと砂の細かい互層^{ごそう}が厚さ三^{センチ}ほど堆積しており、火砕流堆積物の噴出直前までこの付近は湖であ

ったと思われる。

また、福山降下軽石は始良3層の間に挟まれている。

始良層4は岩戸

火砕流堆積物の侵食面を埋めるように堆積している。侵食作用でできた小さな湖に堆積した軽石質シルト・砂・礫など(写真1-26)で、これ



写真1-26 始良層(止上)

らの層の現れる高さはおよそ一〇〇^ミ前後である。最も厚いところでは約三〇^ミあり、一般的にはどの堆積物も水平であるが、場所によっては斜交葉理やスランプ構造が見られる。

国分市東部の敷根付近では天然ガスの噴出が知られており、『旧郷土誌』によれば明治四十年ころから、堀切武二という人が米を原料とした水アメを製造するのに利用していた。太平洋戦争前後はガソリンの代用品として、自動車五〇台ぐらいに供給していた。その後はガソリンやプロパンガスの普及で利用されなくなり、昭和四十年代初めて、利用家庭は堀切武幸家以外は四家族とになっていた。噴出量は約一〇〇〇立方^ミ、井戸の数は約三〇で深さは四〇〜五〇^ミ程度である。

敷根付近は四十万十累層群と第四紀層との境界にあたり、地溝状の地形のところへ河川が運んできた植物などが急速に埋没し、それが腐朽^{ふさゆう}してメタンガス等を噴出しているものと推定されている。以前は天然ガスを含む地層は国分層群と呼ばれていたが、最近では始良層の1か2にあたるとされている。

(七) 新期火山噴出物

表1-5 新期火山噴出物

テフラ名	年代	主軸方向	特徴	噴出源	分布・備考
大正軽石	1914 (大正3年)	東	新鮮な 白色軽石	桜島	国分市内では 散在、P1
P7軽石	約5,000年	北東	黄白色軽石	桜島	国分市内では ブロック状堆積
アカホヤ 火山灰	ca. 6,300y.B.P.	楕円形	最下部に 火山豆石層	鬼界カルデ ラ	全国に分布 (K-Ah)
P11軽石	約7,000年	北東	黒色腐植土 中に点在	桜島	大隅半島 北東部に分布
薩摩	約11,000年	円形	黄橙色軽石	桜島	南九州全域に 分布、P14
岩本火山灰	約15,000年	?	ローム状 堆積物	未詳	南九州全域に 分布
P16軽石	約22,000年	楕円形	赤橙色軽石	桜島	P17と接近 して堆積
P17軽石	約22,000年	楕円形	赤橙色軽石	桜島	桜島最初期 噴出物



写真 1-27 新期火山噴出物（上野原遺跡）

国分市内の台地や山地では、入戸火砕流堆積物の上位に、時代や噴出源の違う何枚かの火山噴出物が堆積している（表1-5、写真1-27）が、それらをまとめて新期火山噴出物と呼ぶことにする。

P十七輕石

P十七軽石 桜島は約二万二〇〇〇年前に誕生して以来、少なくとも一七回の大規模な噴火をしており、それに伴って多量の軽石や火山灰・溶岩を噴出している。

その中で、最も初期のころの噴火による軽石はP十七軽石と呼ばれ、桜島からほぼ真東の方向に堆積している(図1-30)。上野原台地では赤橙色を帯びた風

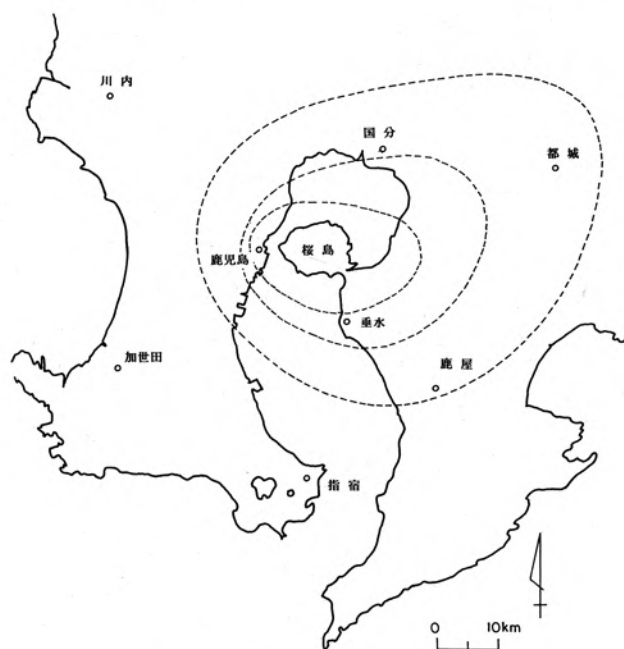


図 1-30 P17軽石の分布

化の激しい軽石となっていて、その間に同じく風化の激しい灰黒色の岩片が点在している。ここでは軽石の厚さは二〇センチ程度、大きさは小豆大であるが、桜島に近づくほど厚くなり、輝北町上場付近では五〇センチ程度となる。

上野原台地では不鮮明な黒茶色腐植土を挟んでその上

に、赤橙色をした軽石の層（P十六）が二〇センチ程度の厚さで堆積している。

これらの軽石層には炭化木片などが含まれておらず、直接測られた¹⁴C年代値はないが、上下に堆積する土壌の年代から約二万二〇〇〇年前のものと推定されている。この軽石層の上には一般にチョコ層と俗称される、薄い茶灰色を帯びた厚さ一〇センチ程度のローム層がある。この中にはカクセン石が多量に入った火山灰が挟まれている。このカクセン石を含む火山灰の起源はよく分かっていないが、火山ガラスや鉱物が細粒であることなどから、遠方に起源があると考えられている。

薩摩

ローム層の上にある黒色腐植土の中に軽石が点在している（写真1・27）が、この軽石は桜島起源の降下軽石で薩摩と呼ばれている。これについては多くの¹⁴C年代が測定されているが、いずれも約一万一〇〇〇年前を示しており、ちょうど縄文時代草創期に相当する。このためこの時代を決める物差しとして非常に重要視されている。国分市内では黒色腐植土中に軽

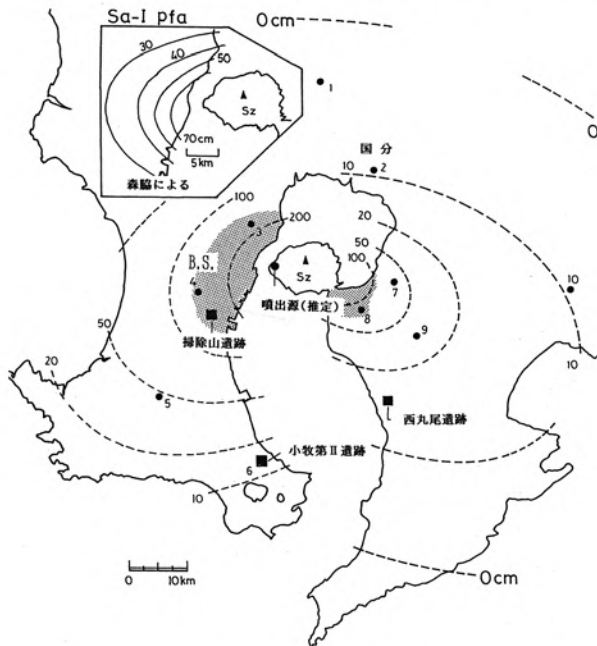


図1-31 薩摩の分布

石が点在するだけであるが、福山町内や輝北町内では二〜三センチ大の降下軽石を含む層と細粒の火山灰層が数十センチの厚さで堆積している。対岸の鹿児島市周辺ではベース・サージ堆積物を伴い、降下軽石と火砕流堆積物の互層となっている。この噴火は現在の桜島袴腰付近の



写真1-28 アカホヤとP11軽石（上野原遺跡）

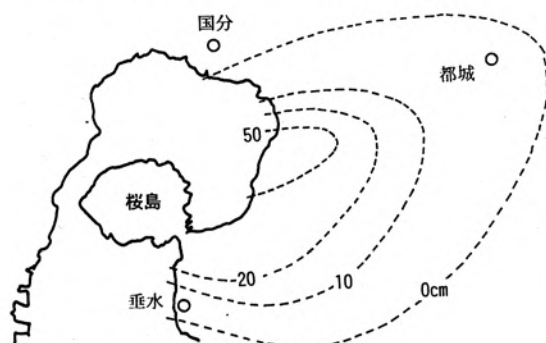


図1-32 P11軽石の分布

浅海で起こったと推定され、県内の広い範囲に堆積している（図1-31）。

薩摩の上には黒色腐植土が厚く堆積しているが、この時代には火山活動が比較的静かだったと考えられ、縄文時代早期の文化が台地や山地を中心に発達している。

P十一軽石
薩摩の軽石が点在する黒色腐植土の上には、親指大程度で黄色を帯びた軽石が

点々と堆積している（写真1-27・28）。この軽石層は国分市内から南側へ行くほど厚くなり、桜島周辺で最も厚いことから桜島起源の軽石と考えられる（図1-32）。この軽石は縄文時代早期末ころに噴出していることから、桜島のP十一軽石に相当する。

国分市の東部地域ではこの軽石層の真下に、厚さ一〜二センチで暗灰色をした粗粒の火山灰が堆積しているが、これは同じころ蒲生町の米丸（かものまる）マールから噴出したものである。

アカホヤ
P十一軽石の真上には暗色を帯びた薄い土壌があり、さらにその上位に特徴的な赤橙色を帯びた火山灰が堆積していて、その色調から「アカホヤ」と呼ばれている。国分市内ではどこでも厚さ三〇センチ程度であり、下位の層に対し平行に堆積している（写真1-28）。

最下部には、径二〜五ミリで円形をした火山豆石が薄く堆積し、それに続いてガラス質火山灰が堆積する。下部ほど粗粒で上部になるにつれ徐々に細粒になる。

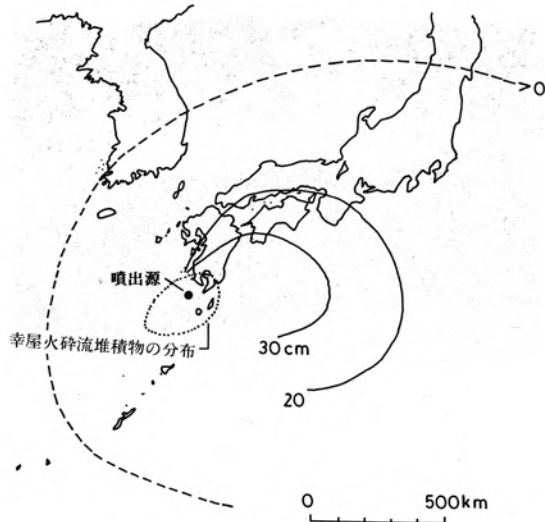


図1-33 アカホヤの分布〔注7より〕

この火山灰を顕微鏡で観察すると、ガラスの破片状をしたバブル・ウォール型の火山ガラスが主で、有色鉱物としてシソ輝石・フツウ輝石などが含まれている。

アカホヤと呼ばれる火山噴出物は、県本土・熊毛諸島の広い地域に堆積していて、薩摩半島の南方海上約五〇歳にある鬼界カルデラから、約六三〇〇年前に噴出したことが分かっている。大隅半島と薩摩半島の南部地域で

は、下部に大豆大以下の軽石の詰まった降下軽石層（幸屋降下軽石）があり、中部にはこぶし大〜鶏卵大の軽石を含む火砕流堆積物層（幸屋火砕流堆積物）が、上部には火山豆石を含むガラス質の火山灰層（アカホヤ火山灰）が堆積している。

この火砕流堆積物は海を渡って一〇〇歳以上の距離を流れてきたもので、厚さはどこでも二〇〜五〇程度しかなく、きわめて薄く広がり堆積した火砕流堆積物として知られている。火砕流堆積物の到達した範囲は大隅半島側では桜島付近まで、薩摩半島側では鹿児島市付近までである（図1-33）。

国分市内に堆積するものはアカホヤ火山灰だけであるが、これは幸屋火砕流の噴火に伴ってできた巨大な噴煙柱から降ってきた火山灰で、北陸地方や関東地方・奄美地方まで広く堆積している（図1-33）。アカホヤ火山灰は縄文時代の早期末に噴出し、全国各地の考古発掘では時代を決める物差しとして重要視されている。

P七軽石

アカホヤ火山灰の上には黒色腐植土が堆積するが、その中には黄白色を帯びた小指〜親指大の軽石が点在している。国分市南東部から福山町

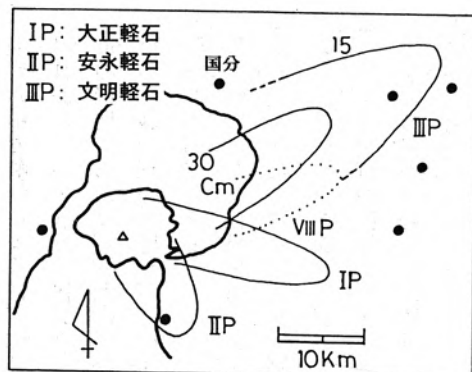


図1-34 文明・安永・大正軽石の分布
(注11より)

・輝北町にかけては、軽石の粒径は最大二センチ、平均一センチ程度でわりあい淘汰がよく、含まれる岩片は最大で〇・五センチ程度となっている。全体に細かい砂状の岩片や結晶粒が多く、それらがゴマ塩状に入っている。

輝北町などでは下位のアカホヤをえぐるように軽石が堆積しているの、アカホヤとの間にはやや長い休止期があったことが分かる。軽石層の真上からは曾畑式土器が出土することから、噴火は約五〇〇〇年前の縄文時代

前期ころに起

こつたと推定

される。この

軽石は肉眼的

特徴や鉱物組

成などから、

桜島起源のP

七降下軽石に

対比されてい

る。

大正軽石

P七軽石の上には一般に黒ボクと呼ばれる、真黒色を帯びたフカフカの腐植土が堆積しているが、この中には新鮮な白色を帯びた大豆大の軽石が堆積している。凹地や溝などではレンズ状になり、数センチの厚さで堆積している。

この軽石は地表に最も近い軽石であること、新鮮であること、桜島の大正噴火(一九一四年)の際、この付近では数センチの厚さで軽石が堆積したことが知られていることなどから、これは大正の軽石にあたる。

軽石は桜島からおよそ真東の方向に噴出し、桜島内では最大で二メートル程度の厚さになっている。当時堆積した軽石層はその後の流水の作用で流されたり、いわゆるボラ抜きが行われたりして、現在ではよほど注意しないと見ることができない(図1-34)。

(Ⅷ) 沖積層

国分市街地には沖積平野が発達しているが、そこには主に軽石・礫・砂が堆積していて、まだ軟らかく固結していない。これらの地層は入戸火砕流堆積物の堆積した後、それが天降川や検校川による侵食作用で運ばれ、川の両岸に堆積したり海に堆積したものである。

地形の項で触れたように、国分平野の地形は隼人面と始良Ⅱ面の二つの段丘に区分されている。隼人面は広瀬付近の台地にあたり、約七〇〇〇年前の縄文海進により堆積した砂や礫の地層が、その後の海退と隆起運動により陸化したものである。

隼人面にあたる福島付近でのボーリングによると、少なくとも深さ四〇メートルまでは沖積層が堆積していて、それらの大部分はシラス起源の軽石を含む砂質土となっている。また、大野原団地でのボーリングでも、深さ一五メートル付近から貝殻を含むシルト質砂が堆積していて、縄文海進時期の堆積物と考えられる。向花でのボーリングでも、深さ四〇メートルまでは礫・軽石混じりの砂層であるが、深さ二〇メートル付近には暗灰色の粘質土があり、ここは縄文海進以前は陸地であつたと推定される。始良Ⅱ面は縄文海進後に起こつた、河川の堆積作用による地層からつくられている。始良Ⅱ面にあたる夕日丘団地でのボーリングでは、地下一三メートル下に厚さ数メートルの巨礫層があり、それより上が河川が運んできた沖積層、その下は縄文海進による堆積物と推定される。川内団地でのボーリングでも、礫混じりシルトやシルト質砂、シルト

が交互に堆積し、深さ四〇メートル以上になっている。ここでは深さ二〇メートル付近に黒灰色をしたシルト層があるが、これより上は沖積世の地層で河川の氾濫による堆積物、下が海に堆積した地層と推定される。清水の国分中学校や第3重久団地でも、河川の氾濫による堆積物の厚さは一五メートル程度ある。

海に近い検校川河口の検校橋団地のボーリングでは、深さ七〜八メートル付近に木片や腐植土を混入する層があり、縄文時代早期ころは検校川の後背湿地になっていたと考えられる。これより上は一般的に木片や腐食物が多く、長い間そのような地形的環境にあつたことが分かる。その下には貝殻を含む中粒砂・シルト砂・粗粒砂が堆積しており、ウルム氷河期終了後の海進による海の堆積物である。

第四節 気象

一 概説

日本列島の気候は地域的变化が著しく、また四季の変

第1章 自然と風土

表 1-6 鹿児島県の天気ごよみ

月別	降水量	平均気温	日最高気温の平均	日最低気温の平均	平均相対湿度	平均雲量	日照時間	日照率	最多風向	平均風速
	mm	℃	℃	℃	%	%	時間	%		m/sec
1	95.2	7.0	12.2	2.4	73	6.0	145.6	46	北西	2.4
2	106.4	8.2	13.3	3.4	71	6.3	140.5	45	北西	2.6
3	146.9	11.2	16.5	6.1	70	6.2	174.9	47	北西	2.8
4	256.0	16.1	21.1	11.4	74	6.9	162.2		北西	2.7
5	274.7	19.8	24.4	15.5	76	7.4	165.4	39	北西	2.6
6	474.7	23.0	27.0	19.6	81	8.2	138.3	33	北西	2.5
7	322.6	27.2	31.3	23.9	80	7.0	206.6	48	西北西	2.6
8	208.6	27.7	32.2	24.1	78	6.0	231.1		北西	2.6
9	210.6	24.9	29.5	21.0	77	6.1	187.0	50	北西	2.5
10	108.0	19.6	25.0	14.8	72	5.3	192.5	55	北西	2.5
11	91.5	14.3	20.1	9.3	73	5.0	172.3	55	北西	2.4
12	79.5	9.2	14.8	4.2	74	5.3	157.3	50	北西	2.3

(注) この「ごよみ」は鹿児島地方気象台が明治16年(1883)1月1日から昭和57年(1982)12月31日までの100年間に観測した毎月の平均値である(倉島厚『かごしまお天気物語』より)。

化がはつきりしているのも大きな特徴である。本州・四国・九州のほとんどは温暖湿潤気候に属し(北海道は湿潤大陸性気候)、夏に降水量の多い太平洋岸気候と、冬に降水量の多い日本海岸気候に大別できる。

さらに日本は世界でも自然災害の多い国の一つで、六・七月の梅雨期には時として集中豪雨による大水害をもたらす。また七月下旬から十月中旬にかけては、毎年のように台風が襲来し、大きなつめ跡を残す。一方冬の豪雪や冷害・霜害などの被害も国民生活に大きな影響を与えている。

各地の気候の特徴を作り出す要因のうち最も基本的なものは緯度であるが、鹿児島は、南は与論島の北緯二七度から北は県境の三二度までの約六〇〇歳、東西は約一八〇歳の広い地域に位置し、南日本気候帯の南海気候区に属して温暖多雨である。

上に、鹿児島地方気象台が明治十六年(一八八三)からの一〇〇年間の観測値によって作成

表1-7 月平均気温 (平成2年)

(単位: °C)

観測点	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	平均
国分	5.9	11.0	11.9	15.9	20.0	25.1	28.5	28.6	26.2	18.1	14.9	8.0	17.8
牧之原	4.9	9.2	10.7	12.9	16.9	21.6	25.3	25.4	22.9	17.6	13.8	7.2	15.7
鹿児島	8.1	12.6	13.1	15.7	19.7	24.5	28.8	29.0	26.5	20.7	16.5	9.8	18.8

表1-8 月間降水量

(単位: mm)

観測点	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	集計
国分	113	204	89	100	366	405	91	151	516	131	83	29	2278
牧之原	139	231	158	213	318	458	228	280	541	231	91	31	2919
鹿児島	149	221	176	253	316	395	159	161	464	161	79	49	2583

した「鹿児島県の天気ごよみ」の各月の平均値をあげる。
場所によって観測値に差異はあるものの、この表から県
内の気象状況をうかがい知ることができる。

二 気温・降水量

高地(上場)と **重要な気候因子の一つである海拔高
低地(下場)** は、水平方向に比べて気温の変化に
大きな影響を及ぼす。

国分市の地形は、大きく高地(上場)と低地(下場)
に区別される。以下上場・下場の語を使用する。

下場の平均標高は一五メートルで、上場の春山台地(標高二
二〇メートル)、木原台地(標高二七〇メートル)、川原集落(標高一
八〇メートル)、上之段・上野原台地(標高二五〇メートル)との標
高差は約二〇〇メートルもある。

上に国分・牧之原・鹿児島市の、月別平均気温、月別
降水量の比較表を提示する。牧之原の気象観測点(福山
町役場牧之原支所内)は標高四〇〇メートルの位置にあるの
で、上場の気象数値は国分と牧之原の観測値の中間値あ
たりと考えてよいだろう(国分の観測値は市統計資料に
よる)。

表1-9 国分市の気温・降水量の概況

年 月	気 温 (°C)			降 水 量 (mm)		
	最 高	最 低	平 均	総 量	最大日量	日 数
昭和45年	35.5	-6.6	17.2	2,511	133	—
50	35.2	—	—	1,744	137	48
55	33.0	-5.0	15.7	3,073	233	—
60	30.0	-1.5	17.3	2,328	135	140
平成2年	31.0	-1.6	17.8	2,277	115	122
平成2年1月	15.2	-1.6	5.9	113.0	56	8
2	17.5	5.0	11.0	203.5	46	15
3	17.6	6.0	11.9	88.5	28	9
4	22.0	11.0	15.9	100.4	58	9
5	23.5	17.0	20.0	366.0	83	12
6	30.0	19.2	25.1	405.5	115	11
7	30.0	24.2	28.5	90.5	12	7
8	31.0	26.2	28.6	151.0	30	13
9	29.8	21.8	26.2	516.5	85	15
10	24.0	13.0	18.1	130.5	84	5
11	20.0	8.3	14.9	82.5	37	7
12	16.0	3.0	8.0	29.0	90	11

(資料) 『国分市統計資料』

平成七年にMBC（南日本放送株式会社）が、国分市広瀬に独自の気象観測計（アメダス国分）を設置し、十一月七日より気象予報などの提供を開始している。

これにより、今後さらに的確な気象情報が得られるようになるものと大きな期待が寄せられている。

気温と降水量

国分市の気象概況は上表によって示される。気温は最高摂氏三五度、最低摂氏マイナス六度、平均摂氏一六度〜一八度で、降水量は梅雨期の雨量、台風の来襲等によって年差はあるが、多雨である。時に集中豪雨の被害を被ることもあるが、国分市は気象的には恵まれた地域である（表1-9「国分市の気温・降水量の概況」）。

次に、農業に関係の深い霜（早霜・終霜）について、下場地区と上場地区を比較検討する。

この表によって国分地区・牧之原地区の降雪・降雪を比較検討してみると、その初日・終日ともに大差ないことが分かる。すなわち上場も

表1-10 降霜・降雪・積雪

観測所 項目 年	国 分 地 区						牧 之 原 地 区					
	降 霜		降 雪		積 雪		降 霜		降 雪		積 雪	
	初日	終日	初日	終日	初日	終日	初日	終日	初日	終日	初日	終日
年 月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日	月 日
昭和41											12, 17	1, 23
42	11, 22	3, 25			—	—	11, 22	3, 25			—	—
43	12, 04	3, 17			1, 15	2, 22	12, 04	3, 17			12, 16	2, 23
44	11, 16	3, 18			—	—	11, 13	3, 24			12, 16	1, 02
45	12, 09	3, 23			—	—	11, 06	3, 24			—	—
46	10, 31	3, 25			1, 05	1, 06	10, 31	3, 25			1, 05	2, 04
47	11, 30	1, 23	2, 28	2, 29	3, 01	3, 01	12, 02	1, 19	1, 27	3, 04	—	—
48	—	—	—	—	—	—	12, 02	3, 03	2, 24	2, 25	—	—
49	12, 13	3, 13	12, 22	12, 30	12, 22	12, 23	12, 14	—	1, 28	2, 08	—	—
50	11, 17	2, 24	2, 20	2, 21	2, 21	2, 23	—	—	1, 11	2, 22	1, 19	2, 23
平 均	11, 25	3, 10	(2, 03)	(2, 06)	2, 25	2, 02	11, 23	3, 11	(2, 01)	(2, 22)	12, 27	2, 03

(資料) 昭和41年～昭和50年, 10年間農業気象10年報 農林省より

国分地区農業気象観測所, 牧之原局地農業気象観測所

表1-11 気 象

明治 31年 ヨリ 大正 2年 ニ至 ル 16年 間 平 均	気圧	温度	湿度	最高 温度	最低 温度	快晴 (日)	晴 (日)	曇 (日)	雨 (日)	雪 (日)	降水量
1月	762.4	9.4	67.6	12.8	1.5	9.2	8.4	4.9	8.2	0.1	100.9
2月	762.3	9.4	66.2	12.9	1.5	7.4	7.2	5.2	7.7	0.6	80.8
3月	760.9	13.1	67.9	16.7	5.5	6.4	7.7	5.9	10.9	0.1	161.5
4月	759.3	18.2	70.0	21.5	10.3	7.1	6.7	5.6	10.6	0	234.9
5月	757.1	21.4	70.7	24.7	13.9	5.6	8.6	6.3	10.5	0	212.8
6月	753.6	24.3	77.5	27.2	18.3	2.6	7.1	6.0	14.2	0	430.0
7月	752.7	28.0	77.0	30.6	22.0	4.2	8.7	5.5	12.6	0	337.5
8月	752.1	29.5	75.6	32.1	22.1	5.6	12.9	3.6	8.8	0	194.7
9月	753.9	27.0	74.5	29.9	18.7	6.2	10.3	5.1	8.3	0	198.8
10月	757.3	21.6	71.8	25.1	12.3	9.4	9.2	5.6	6.7	0	99.9
11月	760.3	16.5	67.7	19.9	7.6	9.6	9.2	6.4	4.7	0	68.3
12月	762.0	11.3	68.3	15.0	3.2	9.8	8.4	6.4	6.3	0.1	81.4

『東国分村同窓会報』第1号, (大正3年9月)

表1-12 気温及び霜雪の時季

年度	最高温度	最低温度	初霜月日	終霜月日	初雪月日	終雪月日
38年	93	44	11月5日	翌年2月28日	2月6日	3月3日

清水村の気象統計表(明治38年)

下場も、初霜・終霜の日・初雪・終雪の日はほとんどかわらないのであるが、問題は霜や雪の、量や強さによって農作物に多大の被害を与えることである。近年これらの損失を防ぐためビニールハウス等による霜害・雪害防御対策が講じられている。

次に参考までに明治三十一年（一八九八）から大正二年（一九一三）までの東国分村の気象統計表と（表1-11）、明治三十八年の清水村の気象統計表を示す（表1-12）。

第五節 自然災害

一 自然災害の背景

災害は場所によって起こりやすいところと起こりにくいところがある。これを支配するのが、地形や地質、土地利用、森林（植生）などの要因である。これらの要因をまとめて素因という。一方、雨や地震のように災害の発生を直接促す要因を誘因という。災害は一般に、素因と誘因の両方が関与して発生する。こうした視点から国

分市の自然災害の背景をあげると、以下のようである。

素 因

北東方には霧島火山、南方には始良カルデラ・桜島火山が位置し、国分市の地形・地質は溶岩や火砕流堆積物など火山噴出物に強く支配されている。これらの噴出物はこの地域を幾重にも覆い、台地を形づくっている。約二万二〇〇〇年前に始良火山の大噴火（これによって始良カルデラが形成された）に伴って噴出したシラスもこの台地の主要な構成要素で、この重なりの上位を占めている。この台地を深く刻んで天降川や検校川などの大小の河川や谷がほぼ南北方向に発達している。河川や谷に沿う斜面は長く急峻であり、山がけ崩れや土石流による災害が起こりやすい条件をもっている。

国分平野は河川が削り取った土砂が運ばれてきた堆積平野であり、もともと水害が起こりやすいところである。霧島と桜島の両活火山は、大規模な噴火が発生すれば国分市に直接間接に火山災害をもたらすことのできる地理的位置にある。国分市とその周辺域は最近市街地の拡大に伴う流域の開発が進んでおり、土地利用の変化も将来の自然災害の発生に影響するであろう。災害が起こ

らないように適切な土地開発と土地利用が望まれる。

誘 因

梅雨から秋の台風発生時期には、国分市も毎年たびたび豪雨に見舞われる。特に天降川の水源となる霧島山系は雨雲が停滞しやすく、屋久島とともに本県でも雨の多いところである。

国分市では山がけ崩れや土石流の発生を促すような地震が発生したとの記録はないが、周辺では吉松町で昭和四十三年（一九六八）に山がけ崩れを促すような地震が発生している。周辺で起きた地震の例としてもう一つ、大正三年（一九一四）の桜島大噴火に伴う火山性地震がある。これによって鹿児島市とその周辺部では地震災害が発生している⁽¹⁴⁾。

二 自然災害史概要

自然災害には、台風災害、豪雨災害、火山災害、地震災害などいろいろな種類がある。これらの災害のうち、発生頻度の高い台風災害、豪雨災害および火山災害についてこれまでの災害を振り返る。

台風災害

本県は直接間接、毎年台風の影響を受ける。本県に顕著な被害（死者五名、全壊五

〇棟、床上浸水一〇〇棟以上のいずれかの被害を受けたもの）をもたらした台風は、明治十六年（一八八三）から平成五年（一九九三）まで一〇一回を数える⁽¹⁵⁾。終戦直後は昭和二十年（一九四五）の枕崎台風・阿久根台風をはじめ、昭和二十四年（一九四九）のデラ台風・ジュディス台風、昭和二十六年（一九五一）のルース台風など大型の台風が相次いで来襲し、本県に大きな被害をもたらした。平成三年（一九九一）の台風19号をはじめ、最近再び大型の強い台風が頻発しているが、海岸の防災施設が整ったことや風に対する住家の耐力が高まったことで、風害は他の自然災害に比較し相対的に減少している。

これまでの台風のうち、国分市に最も大きな被害をもたらした台風は昭和二十六年（一九五一）十月十四日のルース台風である。この台風は八日朝グアム島南東海上において発生、西北西方向に進みながら発達しルソン島東北方で北東へ転向後、南西諸島の西に沿って北上、十四日午後七時ごろ串木野市付近に上陸した。その後九州を速い速度で斜断して周防灘に抜け、山口県防府付近に再上陸した。この台風で本県は暴風雨に見舞われ、各地

第1章 自然と風土

表 1-13 ルース台風による国分の被害

(単位：千円)

		清	水	国	分	東	国	分	敷	根	東その山
死者									3		
軽傷者		3		7		6			28		
重傷者				1		2			2		
家畜死亡				21		2			57		2
床上浸水	住家					50			386		
床下浸水						150			552		
半壊		321	650		800		1,027		45		
全壊		153	114		300		203		28		
流失					20		272				
半壊	非住家	327	473		800		1,026		37		
全壊		171	153		904		136		35		
流失					33		153				
学校その他破壊箇所		21		15		12			13		
堤防決壊〃						9			10		
橋梁破壊〃						4			5		
道路破壊〃		3		3		15			5		
水稻減収率		65		90		80			80		
陸稻〃		80		90		80			90		
粟〃		80		50					100		95
甘しょ〃		45		100		70			40		60
そま〃		90		100					100		100
そさい〃		60		100		100			100		80
損害総額		11,161		30,167		46,021			65,972		2,253

『国分郷土誌』昭和四十八年による

で高潮・高波による海水の浸入・港湾施設の破損、船舶の沈没・流失・破損など大きな被害を受けた。台風上陸が大潮の満潮時と重なったことで異常な高潮となり、特に鹿児島市や枕崎市、串木野市では甚大な被害が発生した。国分市でも、広瀬・下井・敷根で海岸堤防が破壊し、また家屋の倒壊・流失や農作物の被害も相次いだ（表1・13）。

昭和三十九年（一九六四）九月二十九日の台風22号も大きな影響を及ぼした。この台風の最大瞬間風速は屋久島で秒速六三¹⁴、鹿児島で五〇¹⁵を記録している。この台風による国分市の被害は家屋倒壊（住家）一二八戸、家屋倒壊（非住家）三五六戸、家屋半壊二一四〇戸にのぼった。幸い人命の犠牲は出なかった。

豪雨災害

河川の氾濫^{はんらん}による水害と、山がけ崩れ・地滑り・土石流による土砂災害をまとめて豪雨災害といい、主に梅雨期と台風期に発生する。記録に残る規模の大きな豪雨災害として、昭和四十四年（一九六九）六月二十九～三十日、昭和五十一年（一九七六）六月二十二～二十六日及び平成五年（一九九三）八月一～二日の梅雨前線豪雨による三つの災害があげられる。

そのほか、終戦後から今日までに起きた規模の小さいものでは、昭和二十九年（一九五四）七月八～九日の梅雨前線による災害や同年九月十二～十四日（台風12号に伴う豪雨）の災害、昭和三十八年（一九六三）八月二十一～二十二日（台風13号に伴う豪雨）の災害がある。

平成五年夏の豪雨災害は別途まとめるので、ここでは昭和四十四年と同五十一年の豪雨災害について記述する。

昭和四十四年六月二十九日の午前七時五〇分から降り出した梅雨末期の雨は、同日の深夜十二時までに累積一四¹⁶ミ、三十日二一時までに累積四一四¹⁷ミに達した。三十日六時から七時までの一時間の雨量は四〇¹⁸ミ、また六月二十八日から七月八日までの総雨量は八〇〇¹⁹ミ以上を記録している。この豪雨で山がけ崩れ・土石流が発生する一方、検校川・高橋川・郡田川が氾濫した。これによつて、川原立川と敷根で死者三人、重軽傷者五人の人的被害が出たほか、家屋の全半壊・流出・浸水や農作物の被害など多くの物的損害を被った（表1・14）¹⁹。この災害で国分市に災害救助法が適用された。

昭和五十一年六月二十二日午後から二十六日未明にか

第1章 自然と風土

表1-14 昭和44年6月～7月豪
雨災害による被害総括表

災害区分	区分	災 害 総 額
人	死亡	3人
	負傷	5人
家 屋	棟数	3488
	金額	15,681万円
農 作 物	数量	
	金額	10,559万円
林 道	箇所	48
	金額	1,814万円
耕地関係	箇所	654
	金額	31,408万円
公共土木	箇所	
	金額	14,279万円
耕地水道 関 係	箇所	108
	金額	20,570万円
そ の 他	箇所	12
	金額	654万円
合 計	金額	80,851万円

『国分郷土誌』昭和48年による。

の噴火である。文暦元年（一二三五）と永禄九年（一五六六）の噴火も比較的大規模であったとされている。そのほか、明和五年（二七六八）には硫黄山の形成、明和八年（一七七二）には小規模な火砕流を伴った噴火、文政四年（一八二二）には小規模火砕流と火山泥流を伴った噴火、そして昭和三十四年（一九五九）の噴火などがある。これらの活動が

けての国分市の雨量は総雨量で三四二ミ、最大日雨量で二〇〇ミにもなった。この豪雨で民家の裏山が崩壊し、道場口で二人が亡くなり、本戸で住家五戸が全半壊した。また河川の氾濫による災害も相次いだ。この災害による物的被害をまとめると、住家全半壊五戸、床下浸水二五〇戸、水田の冠水・流失・埋没三六三畝、道路の決壊等一〇六か所、河川の決壊等一〇か所、がけ崩れ一四か所となっている。被害総額は五億九二〇〇万円にもなった⁽²⁰⁾。なお、このときの災害は国分市を含めて、鹿児島市・大隅町・松山町・垂水市など本県の中部域に集中し、犠牲者数は全県で合わせて三二人、被害総額は二三

四億円に達した。

火山災害

国分市の北東方約二〇歳には霧島、南西方の約二〇歳には桜島の両火山が位置している。いずれも日本で有数の活火山であり、活発な活動を繰り返している。両火山の噴火は国分市にどのような影響を及ぼしてきたであろうか。

〈霧島火山〉 有史以降数多くの噴火活動が残っている。その大部分は御鉢と新燃岳で生じている。そのうち大規模な噴火は高原スコリアと御鉢溶岩を噴出させた延暦七年（七八八）の御鉢噴火、新燃岳軽石（火砕流堆積物を含む）を噴出した享保元々二年（一七二一～二二）

国分市に災害を招いたとの記録は特に残っていないが、桜島火山で大正三年（一九一四）の大噴火後生じたような泥流や洪水による災害は発生したかもしれない。

〈桜島火山〉 桜島は文明三年（二四七二）、安永八年（一七七九）、大正三年の三大噴火が有名である。いずれの噴火においても大量の火砕物（軽石や火山灰など）が放出され、大規模な溶岩流が発生した。また、火砕流も発生した。²²⁾ 天平宝字八年（七六四）の噴火と昭和二十一年（一九四六）の噴火も規模の大きい噴火であったとされている。しかし、火砕流や溶岩流が国分市を直接襲って災害を発生させたとする記録はない。国分市で災害が発生したとしても、降り積もった大量の火山灰・軽石による家屋の倒壊や農作物の被害、泥流・洪水の氾濫による家屋の流失・浸水・水田の埋没・冠水などの災害である。大正大噴火の際には、噴火の直後から数年にわたって火山灰・軽石が厚く降り積もった桜島の南東方向の地域でこうした災害が発生している。文明大噴火では火山灰・軽石は桜島の北東方向の地域に厚く降り積もったとされており、このときは国分市でも噴火の間接的な影響を受けたものと考えられる。現在桜島は火山灰を盛

んに降らせているが、これが国分市に影響するのは南風が卓越する夏場の一時期である。それも深刻な被害ではない。

三 平成五年夏災害

全体概要

平成五年（一九九三）は梅雨に入ってから台風13号来襲の九月三日までの間、本県下

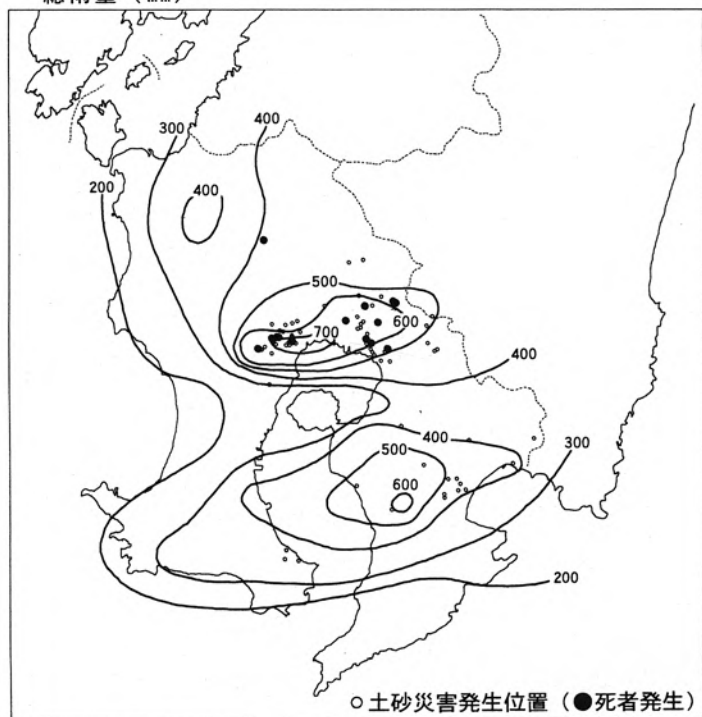


写真 1-29 市街地の浸水状況

は幾度となく豪雨に見舞われた。その間の雨量は年間の降水量をも上回る多量のものであった。これによって県内のあちこちで災害が発生し、死者一二人、不明者一人という多数の尊い人命が犠牲に

第1章 自然と風土

総雨量 (mm)



なった。本県では、豪雨・台風災害は被害が軽度なものを含めるとほぼ毎年といっていいほど発生しているが、今回ほど大きな人的被害を受けたのは戦後では昭和二十四年（一九四九）の災害以来である。

図 1-35 平成 5 年 7 月 31 日～8 月 2 日の総降雨分布図

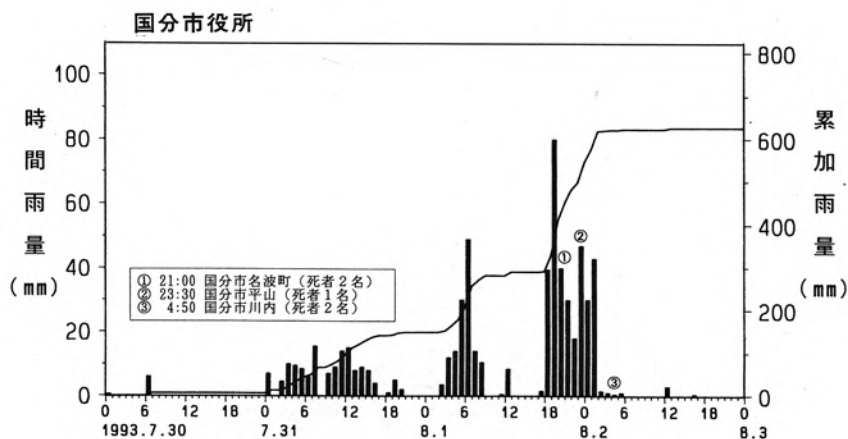


図 1-36 平成 5 年 7 月 31 日～8 月 2 日の時間雨量と累加雨量

表1-15 平成5年7月31日～8月2日豪雨による住家等の被害状況

		7/31～8/2	台風13号	計
住	全壊	(29)31棟	(3)棟	(32)34棟
	半壊	(19)20棟	(1)1棟	(20)21棟
	一部破損	(20)20棟	(1)1棟	(21)21棟
	床上浸水	(82)84棟	(15)16棟	(97)100棟
家	床下浸水	(1618)1618棟	(182)182棟	(1800)1800棟
	計	(1768)1733棟	(202)203棟	(1969)1976棟
非住家	全半壊	33棟	10棟	43棟
	計	33棟	10棟	43棟

() 書きは世帯数、非住家の一部損壊、床下浸水等は除外。

「市報こくぶ」号外(災害特集号)平成5年による。

同じ時期、国分市もたびたび豪雨に見舞われた。特に七月三十一日から八月二日にかけて降った雨は、総雨量六〇〇ミ、最大時間雨量八〇ミと記録的な豪雨となった(図1-35、1-36)。この豪雨で国分市を北から南に

向かって流れる天降川や検校川が氾濫し、市街地を中心にして低地が浸水した(写真1-29)。一方、市内の方々に山が崩れや土石流による災害が発生した。この災害は国分市始まって以来の大災害となり、七人の尊い人命が犠牲になったのははじめ、住家の損壊・浸水、道路の寸断、橋の損壊・流失、水道施設・電気・通信施設等のライフラインの寸断・農地の冠水・埋没など被害は多方面に及んだ(写真1-30・表1-15・1-16)。図1-37は各種の災害が発生した位置をまとめて一覧図にしたものであるが、災害の発生は国分市の全域に及び、おびただしい数になっていることが分かる。

なお、このときの災害は市周辺の町村にも及び、隼人町と霧島町でそれぞれ六人をはじめ、国分市周辺で合わせて二三人が犠牲になった。

この災害に対し国分市は八月一日一九時災害対策本部を設置し、災害情報の収集や消防団への連絡、危険地住民への広報活動、避難の呼びかけ(以上災害発生に備えての活動)、被災者の救出・救護、二次災害の防止、被害状況調査、救済物資の配布(以上応急対策)などの活動に当たった。また、本災害に対して八月四日災害救助

第1章 自然と風土

表1-16 平成5年7月31日～8月2日豪雨による公共施設等の被害状況

区 分		7/31 ～ 8/2		台 風 13 号		計	
		箇所数	被害額 (千円)	箇所数	被害額 (千円)	箇所数	被害額 (千円)
公共土木施設関係	河 川	40	496,370			40	496,370
	砂 防	1	3,000			1	3,000
	道 路	97	448,500	29	98,930	126	547,430
	橋 梁	6	305,500			6	305,000
	そ の 他	12	71,439	11	28,426	23	99,865
	計	156	1,324,309	40	127,356	196	1,451,665
農業関係	農 作 物 等	—	89,928	—	55,119	—	145,047
	農 地	141	650,000	20	43,000	161	693,000
	農業用施設	241	1,097,000	57	245,000	298	1,342,000
	計	382	1,836,928	77	343,119	459	2,180,047
林業関係	林 地	295	20,000	3	12,600	298	32,600
	治 山 施 設	105	1,908,300	6	25,500	111	1,933,800
	林 道	8	357,000	20	40,000	28	397,000
	林 産 施 設			2	600	2	600
	計	408	2,285,300	31	78,700	439	2,364,000
学校関係	中 学 校	2	472	2	95	4	567
	小 学 校	7	8,929	8	431	15	9,360
	市 立 高 校	1	299	1	74	2	373
	そ の 他						
	計	10	9,700	11	600	21	10,300
商工関係	店 舗	7	20,300	11	23,150	18	43,450
	商 品	38	66,650	9	12,350	47	79,000
	そ の 他 施 設	70	66,850	52	20,170	122	87,020
	計	115	153,800	72	55,670	187	209,470
衛生関係	水 道 施 設	18	20,500			18	20,500
	廃棄物処理施設	2	57,485			2	57,485
	保険医療施設						
	計	20	77,985			20	77,985
合 計		1,091	5,688,022	231	605,445	1,322	6,293,467

以上の額に、道路災害等の応急復旧費、災害救助関係経費、及び国・県管理の道路、河川、個人の損害額等を加えると、70億を超える被害額に達するものと考えられる。

「市報こくぶ」号外（災害特集号）平成5年による。



写真1-30 河川の氾濫と道路・橋の破壊状況

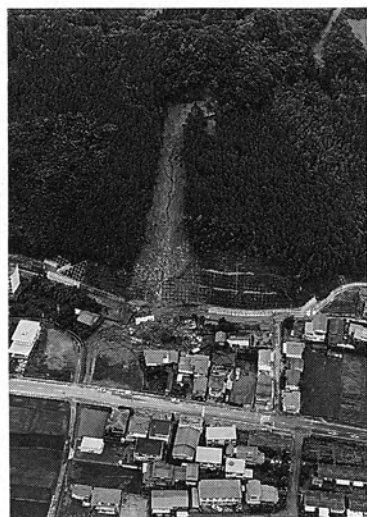


写真1-31 名波町におけるがけ崩れの発生状況

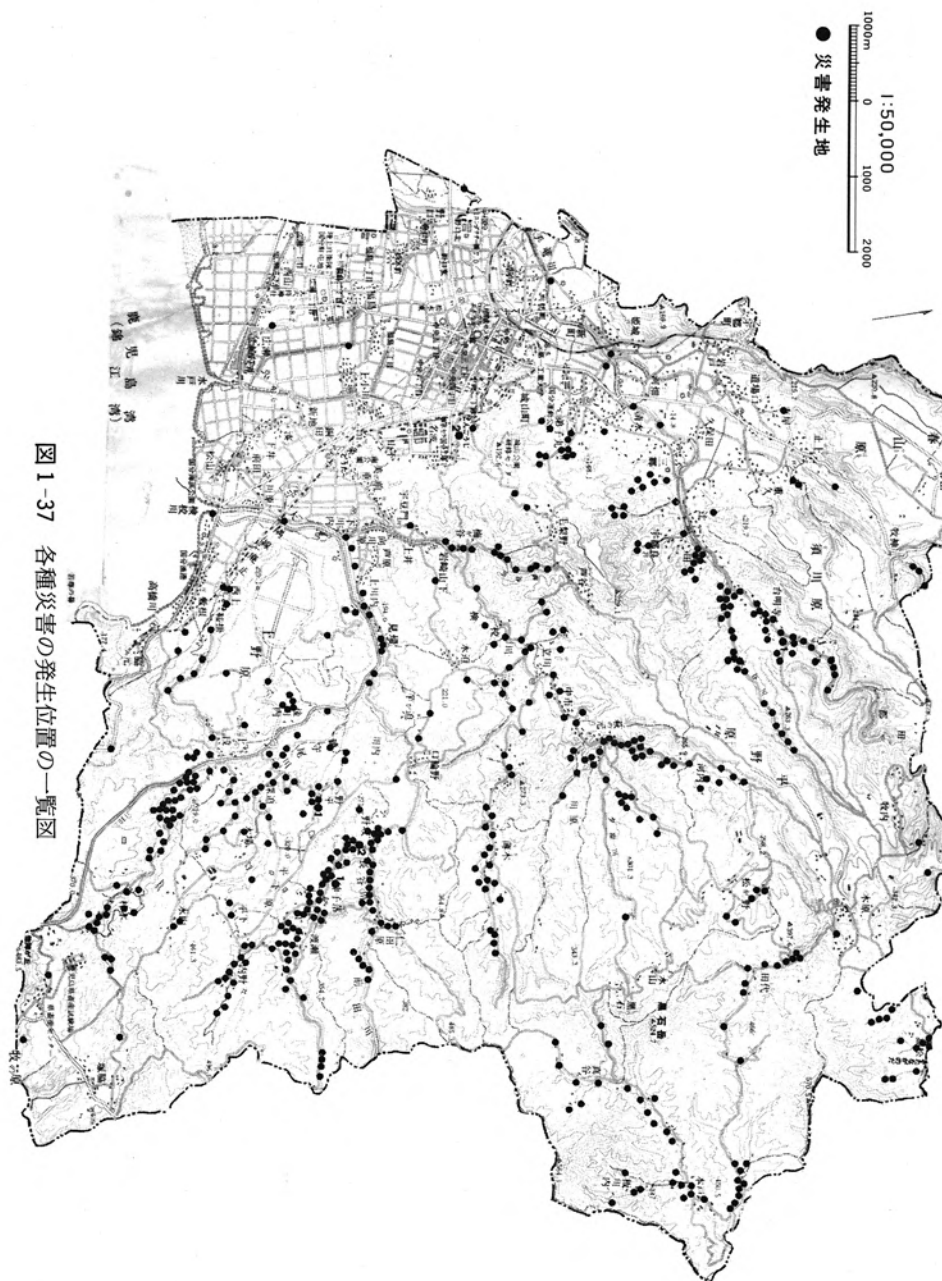
法が適用され、また十月十四日には国分市に対し財政援助を実施するための激甚災害の指定がなされた。²³⁾

この災害に比較すると規模は小さいが、国分市は九月三日の台風13号によっても被災した(表1-15・1-16)。

災害事例

山がけ崩れ・土石流によるいくつかの災害事例について、以下記載する。

名波町では、八月一日午後八時四〇分ごろ住宅裏のがけ崩れによって家が押しつぶされ(写真1-31)、二人が生き埋めになり亡くなった。斜面は鹿兒島湾に面する旧海食崖(海^{かい}岸の浸食によってできたがけ)であり、急



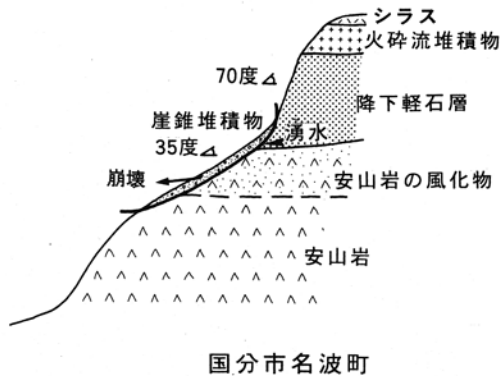


図1-38 名波町におけるがけ崩れの発生模式図と地質

斜面をなす。斜面は下位から安山岩（火山岩類）、岩戸火砕流堆積物およびシラスからなる。斜面中腹部は安山岩を崖錐堆積物が覆い、三〇度前後の傾斜をなす。斜面下腹部は安山岩から構成される（図1-38）。斜面中腹部の安山岩と火砕流堆積物の境界付近からは湧水が認められる。表層からの浸透水に、この湧水が加わって崖錐堆積物が飽和し、基盤の安山岩を境にして崩れ落ちたものである。がけ脚部が不安定になったことによって、安

山岩上部の火砕流堆積物からなる斜面もその後崩壊した。なお、安山岩からなる斜面下部は以前に急傾斜地崩壊防止工事がなされていたが、崩れたのはこの斜面の上部である。

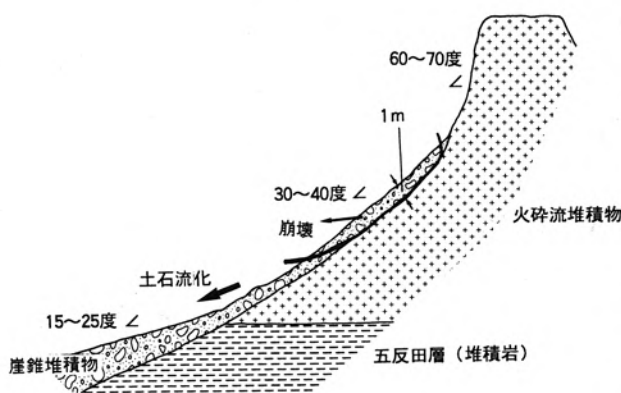
平山地区は市の東部に位置する山間地で、川沿いや谷間に小さい集落が散在している。ここではまず、八月一日午後十一時ごろ平山神子落でがけ崩れにより壊れた住家の下敷きとなり、一人が犠牲になった。同午後一時三〇分ごろ同野坂で、谷奥のがけの崩壊に源をもつ土石流が下方の民家を襲い、二人の命を奪った。野平でも同じような災害で一人が亡くなった。この地域の地質は、基盤を占める四方十層群（堆積岩）と、その上位の加久藤火砕流堆積物およびシラスから構成される。神子落のがけ崩れはシラス斜面表層の風化土が浸透水の作用で崩れ落ちたものである。野平と野坂のがけ崩れは、地下からの湧水や地表面からの浸透水の作用で崖錐斜面（斜面上方から崩れた土砂が永年かかって溜まった斜面）が崩れたものである。

姫城では八月一日午後八時ごろ発生したがけ崩れ・土石流によって、斜面の裾部に位置する集落が襲われた



写真 1-32 姫城におけるがけ崩れの発生状況

(写真 1-32)。これによって住家が被害を受けたが、住民は事前に避難して被害を逃れた。崩壊・土石流災害が発生した斜面の地質は基盤を占める国分層群（堆積層）とそれを覆う火砕流堆積物（重久、岩戸）からなる。斜面の上部は切り立ったがけになっているが、厚さ一メートル程度の崖堆積物で覆われた斜面中部は三〇〜三五四度と相対的に緩傾斜をなしている。土石流が氾濫した斜面下部は厚さ数メートルの崖堆積物に覆われ、傾斜はさらに緩やかである。がけ崩れが起きたところは斜面中部の崖堆積面である（図 1-39）。斜面表面から浸透した雨水によって、厚さ一メートル程度の崖堆積物が不安定に



国分市姫城

図 1-39 姫城におけるがけ崩れの発生模式図と地質

なり崩れたものと判断される。以上のほか山がけ崩れや土石流による災害は、台明寺・毛梨野・川内・敷根・一条などの地区においても発生した。このうち台明寺では郡田川の増水で一人が犠牲になった。それ以外のところでは犠牲者は出なかったが、住家や公共施設、農林地が大きな被害を受けた。

警戒避難による被害の軽減

自然災害を防止、軽減するためにはどうしたらいいか。何より大切なことは、いわゆるハードな防災対策

(防災工事を行い災害を防ぐ)をいっそう充実させ、豪雨や台風襲来時にも安心して住める災害に強い街をつくることである。危ないところには住まない、危険地での土地開発はしないことも大切な災害対策である。しかし、これだけでは災害は防げない。それは、災害の危険地と指定されながら防災工事がなされていないところや、危険地として指定されていないところでも災害が発生することがあるからである。また、防災工事がなされていても、ときとして防災施設の限界を超えるような規模の災害が起きることもある。こうした意味で、災害が起きてても人命は犠牲にしないための対策が必要になる。これが緊急時の警戒避難であり、その実施要項は国分市地域防災計画⁽²⁴⁾に定められている。

この計画の中で避難の指示は市長(学校にあつては教育長または学校長)によつてなされる。しかし緊急時においては、往々にしてこの情報が地域住民に伝わらないことがある。平成五年八月一〜二日の豪雨時には道路の

浸水・決壊や通信ラインの寸断により市全体がそうした状況に置かれていた。こうした事態においては地域住民自らが迫ってくる災害を警戒しつつ避難を実行せざるをえないが、今回の災害では豪雨の真ただ中で地区公民館長や消防団が中心となつて自主的に避難し、人命の犠牲という最悪の事態は免れた地区がある。その一つが姫城地区である。

この地区では前述したように、集落背後のがけが崩れ、土石流が発生、流れ出した土砂により七棟が押しつぶされた。しかし、自主防災組織による事前の避難活動が効を奏し、八月一日の災害では一人の犠牲者も出さなかった。この組織は姫城防災会と呼ばれ、同地区公民館の住民が集まつてつくる自主防災組織である。月一回の危険地の防災点検や災害知識の普及、防災情報の広報などの取り組みを行っている。これまでも台風や大雨時には警戒体制をとり、避難を行ったこともある。なお、姫城公民館は今回の災害で、防災意識の高揚と被害の軽減に多大の貢献をしたとして防災功労者内閣総理大臣表彰を受けた。

第六節 生 物

一 植 物

植物は、気候や土地のなりたちによって大きな影響を受ける。国分市の植物分布は、垂直分布からは七〇〇呎以下の低地帯区に属し、水平分布からは温帯区になる。

年平均気温が摂氏一四〜一六度で南国的な気候と豊かな雨量のためシイ・カシ・クス・ツバキなど葉が広く年中緑色をしている常緑広葉樹の森林（照葉樹林）が主体である。また、この中にクヌギ・コナラなどの落葉広葉樹が混ざっている。現在はスギ・ヒノキの人工林が多く見られる。

国分の植物を探索したり、採集しやすいように、人里の植物、帰化植物、薬用植物、野山の樹木、生け垣の植物、庭木の植物、街路樹、山の植物、水辺の植物、海浜の植物の分野に分け、主なものを記載する。また分布の数の少ない植物もあげることとする。

人里の植物

私たちが生活している身近なところ（道ばた・田や畑・あぜ道・庭など）に生育している植物の主なものを表1・17にあげる。

帰化植物

帰化植物とは植物が本来の生育地から、そのものが自生していない他の地域に移され、そこに土着して生育したものをいう。わが国の帰化植物は、明治初年以來、海外との交流が盛んになり、特にヨーロッパ・北アメリカ原産のものが多く、全国的に広がっていった。なお交通機関の発達が大きく影響しているものと思われる。

(1) 北アメリカ原産キク科のヒメムカシヨモギ・キクイモ・ハルジオン、ヨーロッパ原産のヒメジオン

(2) その他のもの 北アメリカ原産のムラサキカタバミ・オオニシキソウ・アメリカセンダングサ、中央アメリカ原産のチョウセンアサガオ・アオビユ、南アメリカ原産のマツヨイグサ、ヨーロッパ原産のタチイヌノフグリ・オランダミナミグサ・グンバイナズナ・ヒメオドリコソウ

(3) 牧草として輸入したものが野生化したもの コヌカグサ・クローバー・イヌムギ

表1-17 人里の植物

科名	和名
キク	セイヨウタンポポ・ジシバリ・オニタビラコ・ノゲシ・ノアザミ オトコヨモギ・オナモミ・タカサブロウ・ハハコグサ・チチコグサ・ヨモギ
ウスイカズラ	カラスウリ・キカラスウリ・スズメウリ ヘクソカズラ・スイカズラ
アカネ	ヤエムグラ・アカネ
オオバコ	オオバコ
キツネノマゴ	キツネノマゴ
ゴマノハグサ	オオイヌノフグリ・ウリクサ・ムラサキサギゴケ イヌホオズキ・ハダカホオズキ
ナス	トウバナ・ホトケノザ・キランソウ・アキノタムラソウ・ヒキオコシ ノチドメグサ・セリ・ミツバ・ツボクサ・チドメクサ
セリ	オオマツヨイグサ・チヨウジタデ
アカバナ	オオマツヨイグサ・チヨウジタデ
スミレ	タチツボスミレ・スミレ
オトギリソウ	オトギリソウ・ヒメオトギリソウ
ブドウ	ヤブガラシ・ノブドウ・エビヅル・ツタ
トウダイグサ	コミカンソウ・コニシキソウ・トウダイグサ・アカメガシワ
カタバミ	カタバミ・ムラサキカタバミ
フウロウソウ	ゲンノシヨウコ
マメ	クサネム・ヤブマメ・レンゲソウ・ヌスビトハギ・ヤハズソウ ネコハギ・クズ・ハギ・カラスノエンドウ・コマツナギ・メドハギ
ペンケイソウ	コモチマンネングサ
ユキノシタ	ユキノシタ
アブラナ	ナズナ・イヌガラシ・タネツケバナ・オランダガラシ ムラサキケマン・タネツケサ・キケマン
キンポウゲ	オキナグサ・ウマノアシガタ・キツネノボタン・タガラシ

ナ	デ	シ	コ	カワラナデシコ・ツメクサ・ハコベ・ウシハコベ・ミニナグサ
ス	ベ	リ	ヒ	ヒメマツバボタン・スベリヒユ
ヒ			ユ	ヒナタイノコツチ・イヌビユ
タ			デ	ツルソバ・ミゾソバ・イヌタデ・ミズヒキ・ギシギシ・ミチヤナギ
イ	ラ	ク	サ	ヤブマオ・カラムシ・イラクサ・コアカソ・アオミズ
ク			ワ	クワクサ・クワ
ラ			ン	ネジバナ
ア			サ	カナムグラ
ア	ヤ		メ	ニワゼキショウ
ヒ	ガ	ン	バ	ヒガンバナ
ユ			リ	オニユリ・ノビル・ヤブカンゾウ・ツルボ
ツ	ユ	ク	サ	ツユクサ
カ	ヤ	ツ	リ	ヒトリコ・ヒメクグ・イヌクグ・カヤツリグサ・テンツキ・ハマスゲ・クグカヤツリ・コゴメカヤツリ・
イ			ネ	アオスゲ
ヒ	カ	ゲ	ノ	コブナグサ・メヒシバ・オイシバ・スズメノヒエ・ネズミガヤ・イヌビエ・スズメノカタビラ・ニワホコ
ト	ク		サ	リ・コバンソウ・ジュズダマ・チヂミザサ・エノコログサ・チカラシバ・ススキ・チガヤ
ゼ	ン	マ	イ	ミズスギ・トウゲシバ
カ	ニ	ク	サ	スギナ・イヌトクサ
ウ	ラ	ジ	ロ	ゼンマイ
ワ	ラ	ビ		カニクサ
シ	ノ	ブ		コシダ・ウラジロ
オ	シ	ダ		イワガネソウ・タチシノブ・ワラビ・イノモトソウ
シ	ガ	シ	ラ	シノブ・タマシダ
ウ	ラ	ボ	シ	ヤブソテツ・ヘラシダ・イノデ・ホシダ・ゲジゲジシダ
イ	ワ	ヒ	ト	コモチシダ
イ	ワ	ヒ	ト	デ・ノキシノブ

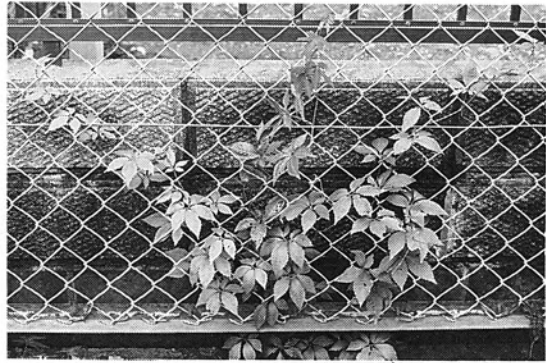


写真1-33 アマチャヅル



写真1-34 照葉樹林と人工樹林

げる。

○ドクダミ 開花期に根ごと掘りとり、水洗いして日干しにする。利尿・便通・高血圧によく、水虫には生葉を使用する。

○センブリ 開花期に根ごと抜きとり、日干しで乾燥させる。健胃剤として、食欲不振や消化不良に煎じて飲む。

○オオバコ 夏の開花期に全草をとり日干しにする。ぜんそく・百日ぜき・せき・胃腸病・頭痛・心臓病・膀胱炎に、葉や乾燥した種子を煎じて飲む。

○ゲンノシヨウコ 開花期に全草をとり陰干しにする。高血圧の予防・健胃・整腸・便通に煎じて服用する。

○クコ 若芽を山菜やクコ茶に、根・葉は煎じて飲み、高血圧・解熱・動脈硬化の予防や利尿に、実はクコ酒として飲用し、強壮・疲労回復に使用する。

○キランソウ 開花期に全草をとり日干しにする。解熱・せき・下痢止め・健胃に煎じて服用する。

○アマチャヅル 葉が茂っているとき採集し日干しにす

(4)農耕文化の移動で大陸から入ってきたもの(前史帰化植物という) スイバ・ミミナグサ・ウシハコベ・タガラシ・トウダイグサ・ホトケノザなど。

薬用植物

薬草ともいう。薬草の使用部分は、全草・根・樹皮・茎・葉・果実などで、用途に

よって選ぶ。普通は乾燥して煎じて飲むものが多いようである。昔から家庭で使用されていた薬草をいくつかあ

る。強壮・強精・利尿・消炎に茶のようにして飲む。

このほかに健胃にタンポポ・ヨモギ、便秘にイタドリ・アシタバ、せきにクワ・スギナ、ぜんそくにツユクサ、神経痛にマタタビ・ジュズダマ、糖尿病にクマザサ、タラノキ、やけどにアオキ・クリ・ユキノシタ・アロエなどと、薬草は数多くある。

野山の樹木

樹木は地上で生育し年々生長する性質を持つている。スギ・ヒノキ・マツ類・モミ類のような針葉樹のほか、ケヤキ・エノキ類の落葉する広葉樹、シイノキ・クスノキ・ツバキ・タブノキなどはいずれも大木になる。これらを高木という。大きくならないものを低木という。低木にはツツジ類・チャノキ・アオキなどがある。またつる性の植物に、クズ・フジ・エビヅル・オオイタビなどがある。国分で見られる樹木を表1・18のように分類してみた。

生け垣の植物

生け垣は庭の周囲を常に緑で覆い、生き生きとした美しさを添えてくれる。

そこで喬木（高木）が利用される。刈り込みに耐え、萌芽力が大きく、枝が密生し、生長の遅い植物が選ばれる。国分市で利用されている生け垣用植物の主なもの

は、カイヅカイブキ・ユスノキ・イヌマキ・ツツジ類・サザンカ・ホウヲウチク・マサキ・カナメモチ・サンゴジュ・ネズミモチ・カラタチ・チャノキ・モクセイなどである。

庭木の植物

庭は、憩い・眺め・遊ぶ心を生かすものが望まれる。心の安らぎと家庭のプライバシーを守るためにも、庭木はたいせつな役割をもっている。郷土で見ら

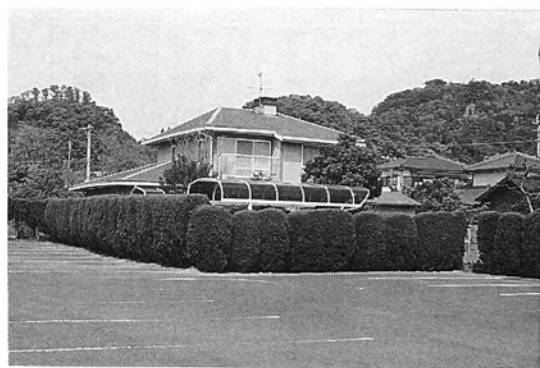


写真 1-35 人家の生け垣

れる主な庭木をあけると、春の花を樂しむものとしては、イワツツジ・モクレン・ハナスオウ・モモ類・ツツジ類・コデマリ・オオデマリ・ユキヤナギ・アセビなどで、常緑を樂しむものとしては、イヌマキ・ヤ

表 18 野山の樹木

常緑 高木		科 名	和 名
短針状の葉	マキ	イチイ	カヤ・イチイ
鱗片状の葉	スギ	スギ	ナギ・イヌマキ
雌雄異株	ヒノキ	ヒノキ	ヒノキ・アスナロ
高木	ヤマモモ	ヤマモモ	アラカシ・アカカシ・ウラジロカシ・マテバシイ・イチイガシ
〃	カシ	クスノキ	クスノキ・ヤブニツケイ・タブノキ・ホソバタブ
〃	クスノキ	ユズリハ	ユズリハ
〃	ユズリハ	モチノキ	クロガネモチ・イヌツゲ・タラヨウ・モチノキ
〃	モチノキ	カエデ	イロハカエデ・カエデ
〃	シキミ	シキミ	シキミ
小 木	ツバキ	ヤブツバキ	ヤブツバキ・サザンカ・モツコク・サカキ・ヒサカキ
高低木	ウコギ	ヤツデ	ヤツデ・カクレミノ・ミズキ
低 木	ヤブコウジ	マンリヨウ	マンリヨウ・イズセンリヨウ・ヤブコウジ
〃	ツゲ	ツゲ	ツゲ・イヌツゲ
〃	ミズキ	アオキ	アオキ
〃	モクセイ	モクセイ	モクセイ・ネズミモチ・ヒイラギ
〃	アカネ	クチナシ	クチナシ・アリドオシ
〃	スイカズラ	ガマズミ	ガマズミ・ニワトコ・ソクズ・ハクサンボク
落 葉 高木	ブナ	クリ	クリ・コナラ・クヌギ
〃	ニレ	エノキ	エノキ・ケヤキ・ムクノキ
〃	クワ	クワ	クワ・コウゾ・イヌビワ・カザノキ

第1章 自然と風土

落葉	高小木	トウダイグサ	アカメガシワ
〃	低木	グミ	ナツグミ・ツルグミ
〃	小高木	エゴノキ	エゴノキ
〃	低木	ユキノシタ	マルバウツギ・クサアジサイ・サワアジサイ
〃	小低木	クマツヅラ	ムラサキシキブ・クサギ
〃	低木	ミカン	イヌサンショウ
〃	小高木	ウルシ	ヤマハゼ・ヌルデ
〃	高木	ムクロジ	ムクロジ
〃	〃	センダン	センダン
〃	〃	イチヨウ	イチヨウ
〃	低木	ヤナギ	ヤナギ・ネコヤナギ
草木落葉または常緑あるいは落葉低木	〃	バラ	ヤマザクラ・ノイバラ・ヤマブキ・キイチゴ
草木低木	〃	ツツジ	ヤマツツジ・ミツバツツジ・アセビ
常緑または落葉低木	〃	センリョウ	センリョウ
つる性低木	〃	ニシキギ	ツリバナ・ニシキギ・マサキ・コマユミ
落葉つる性	〃	マメ	ニセアカシヤ・フジ・クズ・コマツナギ・ネムノキ
〃	〃	マタタビ	マタタビ
〃	〃	ユリ	サルトリイバラ
単子葉植物のタケ・ササ類	〃	イネ	モウソウチク・マダケ・タイミンチク・ホテイチク・メダケ・シカクダケ・オカメザサ・クマザサ
マモモ・モッコク・クロマツ・ゴヨウマツ・イヌツゲ・ツバキ・サザンカ・モクセイ・クロガネモチが、夏秋の花や果実を楽しむものとしては、クロガネモチ・ザクロ・サルスベリ・キンモクセイ・ギンモクセイなどがよく			

利用されている。

街路樹

建物が建ち並び、家の庭に樹木などが植えられない市街地は殺風景になりやすい。そこで街路に植樹して、生活に自然性と心のゆとりを与え



写真 1-36 街路樹 (唐仁町)

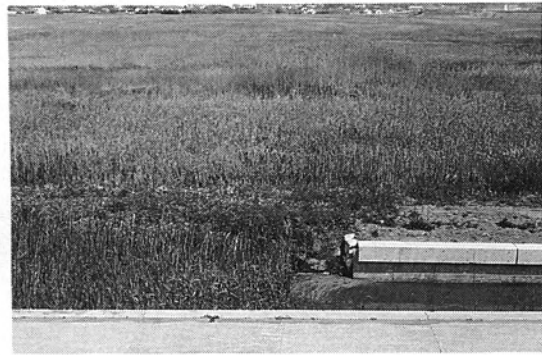


写真 1-37 アシの草原

るのが街路樹である。国分市内では市木であるクロガネモチが多く、他にホルトノキ・クスノキ・モクセイ・ヤマモモ・ツツジ類などがある。

山の植物

国分市の植物は、温帯常緑広葉樹林帯に属している。山の植物はこの照葉樹林の自然林、針葉樹林の人工林の床に生える。すなわち林床植物と原野に生える植物である。山の植物は多年草が多いと

いわれている。このことは植物遷移からみて、まず一年草や二年草が生え、次に多年草が生えるようになる。多年草は地上の部分が枯れても、地下の部分は何年も生き続けて、年々花を咲かせる。一、二年草は短命であるので、多年草と交代して山には多年草が多くなるのである。

山の植物の主なものを、表1-19に科ごとにあげた。

水辺の植物

水辺の植物の生育地として、国分市では検校川とその支流、天降川とその支流、水田、休耕田、湿地、塩田後の沼地などがある。次に水生か湿地性か浮遊性の植物であるかを考慮し、その名を記載することにする。

花が集まって咲くキク科のサワヒヨドリ、花が左右相称のキキョウ科のサワギキョウ、花冠が左右相称のゴマノハグサ科のカワヂヤ・オオアブノメ・ムラサキサギゴケ・サワトウガラシ・シソクサ、茎が四角のシソ科のシロネ・イヌゴマ、花が放射相称のサクラソウ科のクリン

表 1 19 山の植物

科 名	和 名
キ ク	ヤクシソウ・キツコウハグマ・クサヤツデ・タムラソウ・ヒメヒゴタイ・ノハラアザミ・ハンゴンソウ・フ
キ キ ヨ ウ	キ・オグルマ・カセンソウ・ヤマジノギク・ヒヨドリバナ・アザミ キキヨウ・ツルニンジン・ソバナ・ホタルブクロ
オ ミ ナ エ シ	アマチャヅル・スズメウリ・ミヤマニガウリ オミナエシ・オトコエシ
ア カ ネ	サツマイナモリ・ハシカグサ ハエドクソウ
ハ エ ド ク ソ ウ	ナンバンギセル
ハ マ ウ ツ (寄生植物)	ゴマクサ・アブノメ・クガイソウ・センナリホオズキ・マルバノホロシ・トキワハゼ ナギナタコウジユ・ホトケノザ・オドリコソウ・コシロネ・ヒメジソ・エゴマ・ヤマハッカ・ウツボグサ・
シ マ ノ ハ グ サ	アキノタムラソウ ハナイバナ・キュウリグサ・チシャノキ オオカモメヅル・スズサイコ リンドウ・フデリンドウ・センブリ・ツルリンドウ・アケボノソウ オカトラノオ
ム ラ サ キ	ギンリョウソウ・イチヤクソウ ミツバ・ノダケ・ツボクサ・チドメグサ・ヤブニンジン・ヤブジラミ・セリ・ヌマセリ
リ ン ド ウ	ミズキ・ハナйкаダ・アオキ ウド・タニタデ
サ ク ラ ソ ウ	タチツボスミレ・オカスミレ・ノジスミレ・スミレ・ツボスミレ オトギリソウ・サワオトギリソウ・ヒメオトギリソウ トウダイグサ・ヒメユズリハ・ユズリハ
イ チ ヤ ク ソ ウ	ヒメハギ マツカゼソウ
セ ミ ズ	タヌキマメ・ヤマハギ・シロツメクサ・ネコハギ・フジ・ヤブマメ ワレモコウ・ダイコンソウ・ヘビイチゴ・ナワシロイチゴ・シモツケ・キイチゴ・フユイチゴ・ノイバラ・
ス ミ コ	カヂイチゴ・クサイチゴ
オ ト ギ リ ソ ウ	
ト ウ ダ イ グ サ	
ヒ メ ハ	
バ マ	
ラ メ ン	

科名	和名
ユキノシタ ケツラフジ ツンボウ ナデシコ タデコ ラク アヤメ ユモ イグサ ツユクサ サトイモ カヤリグサ イネ ヒカゲノカズラ ゼンマイ カニンサイ ウラジロ ワラビ シノダ オシノ シガ シヤセンシダ ウラボシ	ガクウツギ・マルバウツギ ムラサキケマン・キケマン・タケニグサ ハスノハカズラ・ツツラフジ ボタンヅル・センニンソウ・キツネノボタン・オキナグサ カワラナデシコ・ウシハコベ・ハコベ イタドリ・イシミカワ・ヤナギタデ ミズ・イラクサ・ヤブマオ・ヤマミズ ナゴラン・エビネ・キンラン・シュンラン・セツコク・カキラン・コクラン・フウラン・ガンセキラン・サ イハラン・キエビネ・ナツエビネ シヤガ ヤマノイモ・ニガシユウ・オニドコロ・キクバドコロ ノギラン・ソクシンラン・ノカンゾウ・オオバキボウシ・オニユリ・ヤブラン・ナルコユリ・オモト・ホト トギス スズメノヤリ ヤブミヨウガ マムシグサ・カラスビシャク・オオハンゲ ハタガヤ・タマカヤツリ・ミズハナビ・マツバイ・サンカクイ・イトハナビ・テンツキ・ヒデリコ チヂミザサ・ヌカキビ・トキワスキ・チガヤ・オガルガヤ・カラスムギ・ヒメコバンソウ・カモジグサ ミズスギ・トウゲシバ ゼンマイ カニンサイ ウラジロ・コシダ ホウライシダ・イワガネソウ・フモトシダ・タチシノブ・ワラビ・アマクサシダ・イノモトソウ・イワガネ ゼンマイ シノブ オオカナワラビ・イヌワラビ・ヤブソテツ・ヘラシダ・オオイタチシダ・イノデ・ホシダ・ゲジゲジシダ・ ヒメワラビ コモチシダ ヒノキシダ・ホウビシダ イワヒトデ・ミツバウラボシ・マメツタ・ノキシノブ・ヒトツバ・クワハラン

ソウ・ヌマトラノオ、葉が互生のセリ科のドクセリ・ヌマゼリ・セリ・アカバナ科のチョジタデ、ミソハギ科のミソハギ・キカシクサ、葉が対生のオトギリソウ科のミズオトギリソウ、マメ科のクサネム、十字科植物でアブラナ科のオランダガラシ、葉が互生のタデ科のミゾソバ・ツルソバ・イヌタデ・サクラタデ、多年草で葉の互生するドクダミ科のハンゲシヨウ、イグサ科のイグサ・クサイ、葉幅の広いミズアオイ科のコナギ・ホテイアオイ、水面浮遊性のウキグサ科のウキグサ・アオウキグサ、サトイモ科のシヨウブ・セキシヨウ、多年草草木でアヤツリグサ科のテンツキ・タマカヤツリ・フトイ・アブラガヤ・ハリイ・マツバイ・サンカクイ・ミズカヤツリ・カワラスゲ、花序が穂をつくるイネ科のヌマガヤ・コブナグサ・クサヨシ・ヨシ・イヌビエ・チガヤ、葉が線形・円心形のトチカガミ科のクロモ・スプタ・トチカガミ、挺水性の草木オモダカ・ヘラオモダカ・ウリカワ、水生植物でヒルムシロ科のヒルムシロ・エビモ、湿地に生える多年草でガマ科のガマ・ヒメガマ、落葉性でヤナギ科のネコヤナギ・アカメヤナギ・タチヤナギなどがあげられる。

海浜の植物

海浜の植物は、砂地で塩分の多いところに生育し、塩害にも強い植物である。国分市では下井の海岸や敷根の海岸が生育地であるが、護岸工事で浜辺は少なくなっている。その少ない砂地に海浜にしかみられない植物が生育している。

○ハマエンドウ（マメ科） 多年草で四〜七月ごろ赤紫色の花をつけ、横にはうようにして伸びる。北海道では古くから若葉を食用に利用している。

○ハマウド（セリ科） は、アシタバに似ている。葉の柄に紫色の縞があり、折ると白っぽい汁が出る。食べられないので注意が必要である。

○ハマゴウ（クマツヅラ科） 砂から一びぐらい枝を伸ばし紫色の花をつける。乾燥した果実を煎じて飲むと頭痛やかぜに効く。

○ハマヒルガオ（ヒルガオ科） ヒルガオに似て葉質が厚く腎形で光沢がある。花は漏斗状で淡紅色である。

○ツルナ（ツルナ科） 三角形の葉は厚く、きらきら光っている（レンズのような細胞が日光を反射しているため）。全草を煎じて飲むと胃炎に効き、また食用にもできる。



写真1-38 ハマエンドウ



写真1-39 ツルナ

このほかにも水辺の植物や塩風に強い植物が見られる。ハマスゲ・ヨシ・イタドリ・トゲソバ・ミゾソバ。また岬の岩場には、ノイバラ・トベラ・ガズミ・ヤブニツケイ・ネズミモチ、テイカカズラ・イヌビワ・ハスノハカズラ・マルバヒサカキなどが見られる。

数少ない植物

国分市内に生育している数少ない植物で、生育地が限られている主なものを

あげる（『前国分郷土誌』を参照）。

○カツラ 国分市野上部白尾谷（標高三八〇[㍎]）県有林中の谷川辺に古木が一株あった。敷根小学校跡に株分けされたものが現在ある。

○ヤッコソウ 国分市姫城の城山（標高二二〇[㍎]）の北向きの地にある。昭和三十七年の秋、加治木高校の日置先生が採集された。シイノキの根に寄生する。

その他、ホソバワダン・シマクロキ・ハマウドは若尊^{わかたけ}鼻に、イチイガシは毛梨野^{けなしの}に、ヤマモガシ・ポロポロノキは清水、ヤマビワは重久、ヒノキバヤドリギは止上神社、フタ

リシズカは国分高校近くの山、ツクシゼリは敷根、ヒメコウガイセキシヨウ・ハマニンジン[㍎]は下井、サツマイナモリは本戸、ヒメハギ・シバハギは木原にそれぞれ生育している。

二 鳥 類

ツバメの飛来で春の訪れを知り、アカシヨウビンの声

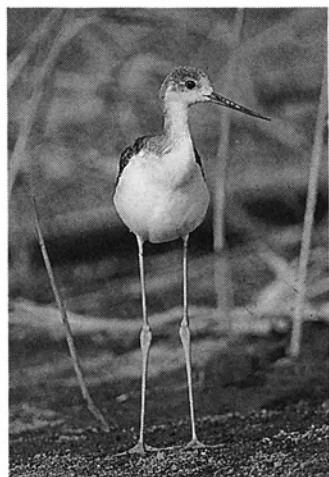


写真1-40 セイタカシギ

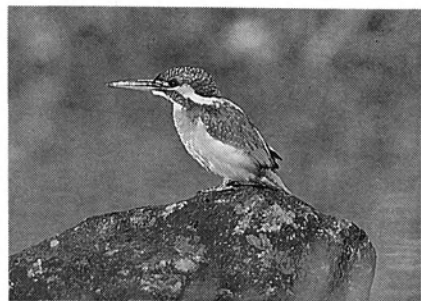


写真1-41 カワセミ。漢字で翡翠（ヒスイ）と書き、飛ぶ宝石といわれている。小魚を餌にする留鳥で、ダイビングの名手である。

を聞くと雨の季節が来る。暑い八月の終わり、青空にシギの澄みきった声で秋を感じる。冬はメジロやウグイスが花の蜜を求めて庭先にやって来る。

ここ「田園文化都市」国分は数多くの野鳥たちが棲息し、四季折々に私たちの心に安らぎと楽しみを与えられる。周辺の緑豊かな山々、清らかな水を集め田畑を潤し流れる河川、花をつけ実のなる木々が多く植えられた人家の庭、また塩田跡や湿地が残る干拓地、それぞれに生活形態を異にする野鳥たちが観察される。

野鳥の分類

野鳥は餌を求め、繁殖地を目指し移動する。その移動範囲が日本国外

に及ぶ場合を「渡り」というが、移動行動により以下のごとく分けられている。

留鳥 周年同一地域内に生息する野鳥。

夏鳥 春、南から渡って来て繁殖し、秋に帰る野鳥。

冬鳥 北の地域より越冬のため飛来し、春に帰る野鳥。

旅鳥 日本よりも北の地域で繁殖し、日本よりも南で越冬する鳥で春と秋に北上と南下の途中に日本国内に立ち寄る鳥。

迷鳥 ごくまれに観察され、通常の移動コースをはずれて飛来した鳥。

写真1-40のセイタカシギは春秋の渡りの時期に、まれに姿を見せる脚線美を誇る気品のあるかわいい鳥で、水辺の鳥の代表である。

野鳥はその種によって生息する場所が決まっています。野山を飛び回って餌を採る「山野の鳥」と、湿地や川辺を歩きながら餌を探す「水辺の

鳥」に大別できる。

国分で観察 国分で観察される主な野鳥を生息場所ご
される野鳥 とに、前記の分類に従って列記する。

〈山野の野鳥〉

○留鳥 ホオジロ・メジロ・ウグイス・カラス・カケス

・イカル・シジュウカラ・ヤマガラ

○夏鳥 アカシヨウビン・オオルリ・ヤブサメ・キビタ

キ・ホトトギス

○冬鳥 ツグミ・シロハラ・ウソ・シメ・キクイタダキ

・ジョウビタキ・ルリビタキ

○旅鳥 ニユウナイスズメ

〈住宅地・市街地の野鳥〉

○留鳥 キジバト・ドバト・カラス・スズメ・ムクドリ

・モズ・コゲラ

表1-20 国分の野鳥

カイツブリ科 カイツブリ カンムリカイツ ブリ カツオドリ科 カツオドリ ウ 科 ウミウ サギ科 ヨシゴイ ゴイサギ ササゴイ アカガラシサギ アマサギ	ヒ チュウヒ ハヤブサ科 チヨウゲンボウ キジ科 コジュケイ ヤマドリ キジ ツル科 ナベヅル クイナ科 クイナ ヒクイナ バン	アカアシシギ アオアシシギ コアオアシシギ タカブシギ キアシシギ イソシギ ソリハシシギ オグロシギ オオソリハシシ ギ ダイシャクシギ ホウロクシギ チュウシャクシ ギ	ホトトギス科 ホトトギス フクロウ科 コミミズク オオコノハズク アオバズク フクロウ ヨタカ科 ヨタカ アマツバメ科 ヒメアマツバメ アマツバメ カワセミ科 ヤマセミ	サンショウウクイ科 サンショウウクイ ヒヨドリ科 ヒヨドリ モズ科 モズ アカモズ レンジャク科 キレンジャク ヒレンジャク カワガラス科 カワガラス ミソサザイ科 ミソサザイ	ゴジュウカラ メジロ科 メジロ ホオジロ科 ホオジロ ホオアカ カシラダカ ノジコ アオジ シベリアジュリ ン オオジュリン ミヤマホオジロ アトリ科
---	---	---	---	---	--

第1章 自然と風土

チュウサギ	レンカク科	ヤマシギ	アカシヨウビン	ヒタキ科	アトリ
コサギ	レンカク	タシギ	カワセミ	ルリビタキ	カワラヒワ
クロサギ	タマシギ科	オオジシギ	キツツキ科	ジョウビタキ	マヒワ
アオサギ	タマシギ	クサシギ	アリスイ	ノビタキ	ベニマシコ
ムラサキサギ	チドリ科	セイタカシギ科	アオゲラ	イソヒヨドリ	ウソ
トキ科	コチドリ	セイタカシギ	オオアカゲラ	トラツグミ	コイカル
クロトキ	イカルチドリ	ヒレアシギ科	コゲラ	シロハラ	イカル
ガンカモ科	シロチドリ	アカエリヒレア	ヒバリ科	ツグミ	シメ
コクガン	メダイチドリ	シシギ	ヒバリ	ヤブサメ	ハタオリドリ科
オシドリ	ムナグロ	ツバメチドリ科	ツバメ科	ウグイス	ニユウナイスズ
マガモ	ダイゼン	ツバメチドリ	シヨウドウツバ	オオヨシキリ	メ
カルガモ	タゲリ	カモメ科	メ	キクイタダキ	スズメ
コガモ	シギ科	ユリカモメ	ツバメ	セツカ	ムクドリ科
ヒドリガモ	キヨウジョシギ	セグロカモメ	コシアカツバメ	キビタキ	コムクドリ
オナガガモ	トウネン	オオセグロカモ	イワツバメ	オオルリ	ムクドリ
シマアジ	ヒバリシギ	ウミネコ	セキレイ科	サンコウチョウ	カラス科
ハシビロガモ	オジロトウネン	クロハラアジサ	イ	エナガ	カケス
キンクロハジロ	ウズラシギ	シ	ツメナガセキレイ	ツリスガラ科	ミヤマガラス
ワシタカ科	ハマシギ	アジサシ	キセキレイ	ツリスガラ	ハシボソガラス
ミサゴ	オバシギ	コアジサシ	ハクセキレイ	シジュウカラ科	ハシブトガラス
トビ	ヘラシギ	ハト科	セグロセキレイ	ヒガラ	
ツミ	エリマキシギ	キジバト	ビンズイ	ヤマガラ	
ハイタカ	キリアイ	アオバト	ムネアカタヒバ	シジュウカラ	
サシバ	オオハシシギ	ドバト	タヒバリ	ゴジュウカラ科	
ハイイロチュウ	ツルシギ				計四六科一七一種

○夏鳥 ツバメ・アオバズク・アカモズ

○冬鳥 アオジ・ツグミ・シロハラ・ジョウビタキ・ハ

クセキレイ

○旅鳥 コムクドリ・アリスイ

〈水辺・干拓地の野鳥〉

○留鳥 カイツブリ・ゴイサギ・コサギ・ミサゴ・キジ

・バン・タマシギ・ヤマセミ・カワセミ・キセキ

レイ

○夏鳥 ヨシゴイ・ササゴイ・カルガモ・ヒクイナ・コ

チドリ・コアジサシ

○冬鳥 アオサギ・タゲリ・マガモ・ヒドリガモ・チュ

ウヒ・チョウゲンボウ・コミミズク

○旅鳥 アマサギ・メダイチドリ・ムナグロ・キョウ

ジョシギ・トウネン・ヘラシギ・タカブシギ・ア

オアシシギ・ツルシギ

○迷鳥 ムラサキサギ・レンカク・クロトキ

〈海上の鳥〉

カツオドリ・ユリカモメ・ウミネコ

野鳥の観察

野鳥の観察は、とにかく野外に出ることから始まる。初めは見晴らしの良い川筋

や干拓地が適当である。五〜八倍の小さな双眼鏡が使いやすく、目標に素早くピントを合わせることができる。幾度か同じ場所に出かけると、大体どこに、いつごろ、どのような鳥が現れるかに気づく（私の体験では、カワセミは毎回同じ枝に、同じ時間に止まっていた）。また、野鳥は繁殖期以外にも餌場の「なわばり」を持ち、一度姿を現すと、飛び去っても、しばらくするとまた元のところに戻って来ることが多い。

このように各人の経験により、それぞれ野鳥に出会えるチャンスを見いだすことができるはずである。野鳥の棲家が分かれば、五〇倍くらい離れていても野鳥観察用のテレスコープ（二〇〜五〇倍）を用意すると、野鳥のかわいい表情、輝く瞳、美しい羽模様、愛嬌のある動作を手取るように見ることができ、そのときから野鳥の「とりこ」になってしまう。

もっと近くで野鳥を自然の状態で観察したくなれば、やや本格的になるが、ブラインド（観察用テント）を用意するとよい。シギやチドリは一ぱぐらいのところで餌をついばみ、羽づくろいをする。観察用の窓から顔を出しても人間とは思わないようで、きょとんと見ているこ

ともある。

ところで野鳥の観察はできるだけ一人で行うことを勧めたい。同じ箇所ですう存分観察できるし、場所を好きな時に変えることができる。また、最も大きな理由は、大勢でどやどやと野鳥の棲家に踏み込むことは、野鳥たちに恐怖心を抱かせ、二度と戻って来なくなる可能性が生じるからである。

野外で今までに見たことのなかった野鳥に出会うことは、観察者にとってこのうえない喜びである。もし鳥名がはっきりしない場合は、その鳥の特徴をよく覚えておき、帰宅後できるだけ早く鳥類図鑑や、野鳥写真集を調べ鳥名を見つけると喜びが倍加し、一度でその鳥の専門家になれるだろう。

あるとき、二番のカモを見つ、姿かたちは確かにオナガガモであるが、雄の腹部の色が黄色で一羽ずつその濃淡が異なっており、不思議に思い何枚も写真を撮って帰った。調べてみるがオナガガモの腹部は白色のものだけで新種発見？ と胸をときめかせたが、それは渡り調査のためのスプレーによるマーキングと分かった。

九月の初め「スピーー、スピーー」と高く涼しい聞き慣れない小鳥のさえずりがする。声を追ってみると、すぐ近

くに紅色のスズメの半分ほどの鳥がチガヤの枯穂をくわえてヨシの茎に止まっている。「あつべニスズメだ!!」。ベニスズメは東南アジア原産で、日本では飼鳥である。籠から抜け出し自然に戻り、休耕田の草藪で営巢している。しかも日本産の野鳥では考えられない九月であり、原産地の繁殖期と合っているのであろう。ふと自分が遠い異国に一人、旅している気持ちが生じてきた。

三 昆虫（蝶・トンボ）

国分市は鹿児島県の中央部に位置し、県内の平均的な昆虫相の分布をしている。蝶六三種、トンボ二三種、セミ四種、クワガタ一種の記録がある。とりたてて特種な虫は記録されていないが、タテハチョウ科のシータテハは鹿児島県内ではほとんど見られず、珍しい部類になる。ハルニレの葉が、幼虫の食樹であるため検校川沿いに口輪野から仁田原地区にかけて生えるハルニレと分布が重なっている。シジミチョウ科のカラスシジミも同じくハルニレのつぼみを幼虫が食樹としていたので一緒に分布している。これらは北方系の蝶である。一方南方系の蝶は近年、休耕田を中心に発生を繰り返している、タテハチョウ科のタテハモドキ、迷蝶として一時的な飛来

と思われる、メスアカムラサキ、ツマベニチョウ、アオタテハモドキなどが観察されている。それにモンシロチョウ、アゲハチョウ、ベニシジミ、ツマグロヒヨウモンなど普通種が見られる。

トンボ類ではトラフトンボ、オオハラビロトンボ、ヨツボシトンボなどが南方から飛来して、一時的な発生と思われるものが観察されている。

蝶類

ギンイチモンジセセリは表は黒っぽい茶色で後翅の裏に銀色のすじ模様がある小さい蝶である。一九七〇年の四月に国道10号の南側の田んぼのあぜ道で二、三頭目撃していた。昭和五十三年（一九七八）に再調査したところ、広瀬地区から上之段（海拔二五〇^ミ）地区や府中・清水地区から春山原（海拔二二〇^ミ）、木原地区（海拔三四〇^ミ）など国分市の広範囲で見られた。田んぼのあぜ道のチガヤや春山地区では杉林（二〜三年生）の間に生えているススキで発生している。国分市内での観察から四月に第一化が発生し七月に第二化が見られる。九月下旬に見られるものが第三化であるかどうかはまだ確認できていない。

ミヤマセセリはツマキチョウと同じく春一番に現れる

蝶である。木原台地のクヌギ林で、三月ごろにスミレの花で蜜を吸ったり、枯れ葉の上でひなたぼっこをしているのが見られる。

イチモンジセセリは稲の害虫としてよく知られた蝶である。奈良田の田んぼで初夏のころ、「はまき」といわれる幼虫がいてカンヅメの缶がいっぱいになるほどつかまえたことがある。これらの幼虫はチガヤで飼育したが、田んぼが青々としているころは稲の方を好み害虫となる。この蝶も遠い距離を移動するのではないかとわれている。

クロセセリは、夏に杉林の木もれ日の中を飛び回っている。幼虫はハナミョウガの葉を食べて育つ。川原の民家の庭先で、ミョウガの葉の上に止まっているのを観察したことがある。九州特産の蝶であるが近年は山口県でも観察された記録がある。

ジャコウアゲハはツツジの咲くころに現れる。ツツジの花が大好きで、国分運動公園や城山公園でよく見られ、天降川の堤防沿いの竹藪の中のウマノスズクサに幼虫が見つかる。

ミカドアゲハはオガタマノキを食樹としている南方系

の蝶である。国分市内では数根あたりで、四〜五月のミカンの花が咲くころに蜜を吸いに来ているのが見られる。清水の住宅地でオガタモノキに六〜七月ごろ幼虫が毎年見られる。

アオスジアゲハは翅のふちは黒くて中は水色の蝶である。幼虫は、クスの葉を食べて育ち、春先はミカンなどの白い花によく群がっている。夏になるとセンダンの花に集まったり、道路の水溜まりなどで吸水しているのを見かける。

キアゲハは、セリ科の植物を食べて育つ。清水の畑でニンジン^{ニンジン}の葉に幼虫がいつぱいついていたことがあるが、人里より山手を好み、山の頂上などで縄張りをもっている。他の蝶や小鳥などが上を飛ぶと追いかけていたりする。

ナミアゲハは、黒と黄色のしま模様の翅でよく見られる蝶である。三〜十一月まで四〜五回発生して、春型は翅の黄色い模様が多くの、夏型は黒い模様が多くなる。ミカンの葉に卵を産みつけ、いろんな種類のミカンに幼虫がつき、サンショオでも見られる。

ナガサキアゲハは大型の黒い蝶である。メスは後の翅

に尾っぽがあるものとないうものがいて、普通はないものがほとんどであるが、鹿児島県と宮崎県でたまに尾っぽのあるメスが見つかる。

モンシロチョウはキャベツ畑で見られる蝶である。

キャベツにつくアオムシはモンシロチョウの幼虫で、三月から十一月まで六〜七回発生を繰り返しいつでも見られるが、夏になると数が減る。

ツマキチョウは春一番に現れて春の訪れを告げる蝶である。モンシロチョウよりひとまわり小さくて前翅の先に黄色い模様がある。飛び方も弱々しくヒラヒラとダイコンや菜の花で蜜を吸う。台明寺溪谷公園では三月末より見られる。

ツマベニチョウは前翅の先にベニ色の鮮やかな模様のある大型のシロチョウである。鹿児島県本土の指宿、山川、佐多岬を北限としている南方系の蝶であるが、国分市では秋に飛んでくるものがたまに見られる。昭和六十年（一九八六）九月二十三日清水の住宅地に植えてある植樹のギョボクへ産卵に訪れたメスを採集したことがある。翌年九月にも重久止上神社の付近を飛んでいるのを目撃した。

ムラサキシジミは蝶のままでクロキやアラカシなど常緑樹の葉の間に集団でじっとして冬を越す。暖かい日には時たま、日なたぼっこに出てくることもあるが、またもとの集団の中へ帰っていく。国分では、まだ集団越冬しているのは観察されていないが、鹿児島市や指宿では見られている。そのためか秋のころ下井海岸で南のほうへ海上を飛んでいくのが見られる。

ムラサキツバメもムラサキシジミと同じように蝶で冬を越し、同じように集団をつくり一〇〜五〇頭くらいかたまっている。幼虫はアラカシの新芽を食べて育つ。

トラフシジミは、表は青色で裏にしま模様のある蝶で、三月下旬からツマキチョウと一緒に、レンゲやダイコンの花の蜜を吸っている。台明寺溪谷公園や川内地区の野坂などの山手近くで見られる。

カラスシジミは鹿児島県下では大隅半島で記録されていたほか、昭和四十九年（一九七四）に鹿児島市内で見つかっている。国分市内にも生息していないかと、昭和五十四年、五十五年に食樹のハルニレが多く見られる口輪野地区の長谷川沿いを調査した。昭和五十四年にさなぎのぬけがらを発見、翌年には生きたさなぎを見つける

ことができた。その後は五〜六月に口輪野一帯で毎年蝶を見ることができた。

サツマシジミはその名のとおり鹿児島県を代表する蝶である。昭和二十六年（一九五一）に福田晴夫氏と志布志高校生物研究会の人々によって初めて卵、幼虫、さなぎという生活史が解明された。この幼虫は三〜五月はサンゴジュ、ガマズミのつぼみを食べて育ち、四〜五月はミズキ、五〜六月はサワフタギ、イヌツゲのつぼみ、七月はミミズバイ、九〜十月はバクチノキ、十一月はクロキのつぼみと季節によって食べ物を変えていることが分かった。国分市では山手で四月ごろガマズミのつぼみを食べている幼虫を見つけることができ、また五月ごろは運動公園、城山公園のサンゴジュのつぼみでも幼虫が見つかる。

ヤクシマルリシジミは川原で野生のノイバラから、庭先の栽培種のパラまで、いろいろのパラの花やつぼみで幼虫が見つかる。三〜十一月まで、四〜五回発生して、晩秋の十二月にも見られることがある。

ミズイロオナガシジミは、昭和四十三年（一九六八）に当時福山高校の橋元紘爾教諭が生物部の生徒たちと塚

脇の畜産試験場で多数採集している。クヌギ林が周りにかなり広く見られたようで、六〇七月で二〇頭ほど記録がある。その後は記録はなく、調査したが見つけれなかった。

ゴイシシジミはササにつくアブラムシと密接な関係にある。幼虫はアブラムシの幼虫を食べる肉食性で、親もアブラムシの出す蜜を吸っている。ササに白い粉をふいたようなアブラムシが増えると、ゴイシシジミがどこからともなく現れて数が増える。上之段の国道一〇号の脇で見られる。急に増えたかと思うと、また急にいなくなったりする蝶である。

ウラギンシジミの翅はオスの表が赤色でメスは白色であるが、裏はともに銀色なので飛んでいるときはピカピカに光っている。夏に地面に下りて水を吸っているのを見かける。幼虫はクズ（かんねんかずら）の葉を食べて育ち、この蝶も親で冬を越す。清水で、ネズミモチの葉の間にじっとしているのを見つけたことがある。

テングチョウは、頭の先がテングの鼻のように突き出した蝶である。親で冬を越して、五月ごろエノキの葉で幼虫が見られ、野坂の長谷川沿いでよく見られる。

アサギマダラはミカンの花が咲くころから発生して、夏山の頂上などでよく見かけられる。日本列島を南北に大移動することが知られている。北上の例として、昭和五十五年（一九八〇）五月三十一日に種子島で翅にマークをつけて放たれたアサギマダラが、七月十六日に一二〇〇歳離れた福島県で再捕獲されている。一方南下の例として、昭和六十三年（一九八八）十月二日に愛知県伊良湖岬でマークされた個体が、十一月六日に一〇〇〇歳離れた奄美大島で再捕獲された例などがある。今まで直線距離で五〇歳以上の離れたところでの再捕獲の記録として、北上三件、南下一五件が報告されている。国分市においても、ミカンの花が咲くころ現れて、秋のころ数根の長尾林道沿いでキジョランの葉で幼虫が見つかり、夏には田代（たしろ）の国有林で、谷間を飛んでいるのが見られたりする。

ツマグロヒョウモンはモンシロチョウの次によく見かける蝶である。幼虫がスミレの仲間で育つので、親の蝶も学校の花壇や人家の周りで見られる。学校の花壇でパンジーの葉に黒いトゲトゲの幼虫がいっぱいいるのが見られ、しばらくすると近くの壁などに黒っぽくて金模様

のあるさなぎがぶらさがっていたりする。

メスグロヒヨウモンは、オスはツماغロヒヨウモンと同じく茶色であるが、メスは黒っぽい紺色で翅の色が全く異なっている。鹿児島県でも個体数が減ってなかなか見られない蝶で、霧島町と接する郡田地区の高松で六月初ろ発生するが、数は少ないようである。

サカハチチョウは春型と夏型で翅の模様が違っている。山手の川沿いで見られ、国分では五月初ろから八月初ろ仁田原から本戸の長谷川沿いでよく見られる。

シートテハは鹿児島県ではめずらしい蝶である。一九八九年五月十四日に岩崎郁雄氏によって野坂地区の長谷川沿いのハルニレの木から三頭の幼虫が採集されている。鹿児島県下では初めてであった。その後調査に行ったが見つけることはできなかった。宮崎県下では低地から高地まで広く分布しているが、鹿児島県下では個体数は少ないようである。

コムラサキは、幼虫がヤナギの葉を食べて育ち、親もヤナギの木の周りを飛んでいた。クヌギの樹液を求めてカブトムシやクワガタムシが集まるようなところで、一緒に樹液を吸っている。敷根から上之段へ上がる途中

でよく見かける。一年に三、四回発生して、幼虫で冬を越し、ヤナギの幹の北側で樹皮の割れ目の間にひそんで春を待っている。

ルリタテハの幼虫はサルトリイバラ（かからん葉）を食べて育つ。真夏に山道を歩いていると道の真ん中に止まって縄張りを張っている。他の蝶やトンボなどが近くに飛んでくると激しく追いかける。またコムラサキと同じようにクヌギの樹液の出ているところで一緒に翅を開いたり、閉じたりして樹液を吸っている。

タテハモドキは、昭和五十五年（一九八〇）ごろまでは南方系の迷蝶で、国分市では夏から秋にかけて少し見られるくらいであったが、その後田んぼの減反により休耕田が増えるにつれて、春から多く見られるようになった。それは食草のスズメノトウガラシが休耕田で春先より生えるようになったためではないかと思われる。それまではスズメノトウガラシは秋の稲刈りが終わったあとに生えていた。翌年九月に清水の住宅地で、イワダレソウの中に九頭が発生して十月に羽化した。今日では普通に見られるようになった。

アオタテハモドキは南方系の迷蝶で、ときどき国分市

表1-21 国分地方の蝶類分布表地名

種名	地名	
	霧島山	国分市
ミヤマセセリ	●	●
ダイミヨウセセリ	●	●
キバネセセリ	●	●
アオバセセリ	●	●
ギンイチモンジセセリ	●	●
ヒメキマダラセセリ	●	●
コチャバネセセリ	●	●
ホソバセセリ	●	●
キマダラセセリ	●	●
オオチャバネセセリ	●	●
ミヤマチャバネセセリ	●	●
チャバネセセリ	●	●
イチモンジセセリ	●	●
クロセセリ	●	●
ジャコウアゲハ	●	●
ミカドアゲハ	●	●
アオスジアゲハ	●	●
キアゲハ	●	●
ナミアゲハ	●	●
モンキアゲハ	●	●
クロアゲハ	●	●
ナガサキアゲハ	●	●
オナガアゲハ	●	●
カラスアゲハ	●	●
ミヤマカラスアゲハ	●	●

種名	地名	
	霧島山	国分市
モンキチョウ	●	●
ウスキシロチョウ	○	●
キチョウ	●	●
ツマグロキチョウ	●	●
モンシロチョウ	●	●
スジグロシロチョウ	●	●
ツマキチョウ	●	●
ツマベニチョウ	●	○
ルーミスシジミ	●	●
ムラサキシジミ	●	●
ムラサキツバメ	●	●
アカシジミ	●	●
ミズイロオナガシジミ	●	●
ウスイロオナガシジミ	●	●
メスアカミドリシジミ	●	●
アイノミドリシジミ	●	●
ヒサマツミドリシジミ	●	●
キリシマミドリシジミ	●	●
フジミドリシジミ	●	●
ハヤシミドリシジミ	●	●
エゾミドリシジミ	●	●
トラフシジミ	●	●
カラスシジミ	●	●
コツバメ	●	●
ベニシジミ	●	●

種 名		地 名
ゴイシシジミ	●	霧島山 ▲
クロシジミ	●	
ウラナミシジミ	●	
ヤマトシジミ	●	
ルリシジミ	●	
スギタニルリシジミ	●	
サツマシジミ	●	
ヤクシマルリシジミ	●	
ツバメシジミ	●	
タイワンツバメシジミ	●	
ウラギンシジミ	●	
テングチヨウ	●	
アサギマダラ	●	
ウラギンスジヒヨウモン	●	
オオウラギンスジヒヨウモン	●	
ミドリヒヨウモン	●	
クモガタヒヨウモン	●	
メスグロヒヨウモン	●	
ウラギンヒヨウモン	●	
オオウラギンヒヨウモン	●	
ツマグロヒヨウモン	●	
イチモンジチヨウ	●	
コムシジ	●	
サカハチチヨウ	●	
キタテハ	●	
シータテハ	●	

種名				地名
				ヒオドシチヨウ
				ヒメアカタテハ
				アカタテハ
				ルリタテハ
				アオタテハモドキ
				タテハモドキ
				メスアカムラサキ
				イシガケチヨウ
				スミナガシ
				コムラサキ
				ゴマダラチヨウ
				ヒメウラナミジャノメ
				ウラナミジャノメ
				ジャノメチヨウ
				クロヒカゲ
				コジャノメ
				ヒメジャノメ
				ヤマキマダラヒカゲ
				サトキマダラヒカゲ
				ウスイロコノマチヨウ
				クロコノマチヨウ
合計	○	△	●	
93	2	0	91	▲
62	5	0	57	

でも見られる。幼虫はキツネノマゴを食べるので、メスが飛来して一時的に発生する可能性があり、以前に都城市で大発生したことがある。昭和六十二年（一九八七）九月三日に木原台地でオスを目撃し、九月八日に名波町の田んぼでもオスを見ることができた。

メスアカムラサキはスベリヒユ（ぶたくさ）を幼虫が食べて育つ。この蝶も南方系の迷蝶で、夏から秋にかけて見られる。指宿あたりでは、土着はしていないが毎年見られる。山の頂上でテリトリ（縄張り）を持っている。昭和五十七年（一九八二）十月三日に清水のソバ畑で蜜を吸っているのを観察した。

クロコノマは幼虫がジュズダマの葉で育ち、成虫は、秋に熟して落ちたカキの实の汁を吸っている。また、昼間は日陰を好み、夕方活発に飛び回る。

トンボ類

国分市におけるトンボ類の調査報告例は極めて少なく、わずかに数例の報告を見るに過ぎない。従って、現在日本国内で二〇八種（亜種を含む）、鹿児島県内で一一九種（亜種を含む）知られる中で国分市で記録されているのはわずか三二種である。

次にこれまでに国分市内で記録された種名及び産地、

記録年を列記する。

ヘイトトンボ科

コフキヒメイトトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、向花（同五十一年）、野口池（平成二年、同三年、同五年）

キイトトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、向花（同五十一年）、野口池（平成二年、同四年、同五年）

リュウキュウベニイトトンボ

野口池（平成元年、同二年、同四年）

アオモンイトトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、清水・向花（同五十一年）、野口池（平成元年～同五年）

アジアイトトンボ

野口池（平成二年、同四年）

クロイトトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、清水（昭和五十一年）、野口池（平成元年～同五年）

セスジイトトンボ

清水（昭和五十一年）

〈モノサシトンボ科〉

モノサシトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）

〈アオイトトンボ科〉

オオアオイトトンボ（大青糸トンボ）

野口池（平成四年）

〈カワトンボ科〉

ハグロトンボ

野口池（平成元年、同二年）

〈ヤンマ科〉

コシボソヤンマ

向花（昭和五十二年）

マルタンヤンマ

野口池（平成四年）

ギンヤンマ

野口池（平成元年～平成五年）

クロスジギンヤンマ

国分高校内（昭和五十七年）

〈エゾトンボ科〉

オオヤマトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、野口池（平成五年）

トラフトンボ

野口池（平成四年）

〈トンボ科〉

ハラビロトンボ

野口池（平成二年、平成三年～同五年）

オオハラビロトンボ

野口池（平成二年）

シオカラトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、野口池（平成元年

～同五年）

オオシオカラトンボ

野口池（平成元年、同二年、同五年）

ヨツボシトンボ

野口池（平成五年）

コフキトンボ

野口池（平成五年）

シヨウジヨウトンボ

野口池（平成元年～同五年）

マユタテアカネ

第1章 自然と風土

表1-22 国分地方のトンボ類分布表

科・種名(亜種名)	地名	霧島山	国分市
コフキヘイトトンボ		●	
モートンイトトンボ		●	
ホソミイトトンボ		●	
キイトトンボ		●	●
ベニイトトンボ		●	
アオモンイトトンボ		●	●
アジアイトトンボ		●	
クロイトトンボ		●	●
オオイトトンボ		●	
セスジイトトンボ		●	●
モノサシトンボ		●	
アオイトトンボ		●	
オオアオイトトンボ		●	
ホソミオツネイトトンボ		●	
トゲオトンボ			
アオハダトンボ			
ハグロトンボ		●	
ミヤマカワトンボ		●	
ニシカワトンボ		●	
オオカワトンボ		●	
ムカシトンボ		●	
ムカシヤンマ		●	
ミヤマサナエ		●	
ヤマサナエ		●	

科・種名(亜種名)	地名	霧島山	国分市
アオサナエ		●	
オナガサナエ		●	
フタスジサナエ		●	
タベサナエ		●	
ダビドサナエ		●	
クロサナエ		●	
ヒメクロサナエ			
オジロサナエ		●	
コオニヤンマ		●	
タイワンウチワヤンマ		●	
オニヤンマ		●	
サラサヤンマ		●	
コシボソヤンマ		●	●
ミルンヤンマ		●	
ヤブヤンマ		●	
オオルリボシヤンマ		●	
ギンヤンマ		●	
クロスジギンヤンマ		●	●
コヤマトンボ		●	
キイロヤマトンボ		●	
オオヤマトンボ		●	●
タカネトンボ		●	
トラフトンボ		●	●
ハラビロトンボ		●	

科・種名(亜種名)	地名	霧島山	国分市
オオハラビロトンボ		●	
シオカラトンボ		●	
ハラボソトンボ		●	●
シオヤトンボ		●	
オオシオカラトンボ		●	
ヨツボシトンボ			●
ハッチョウトンボ		●	
シヨウジヨウトンボ		●	
アキアカネ		●	
タイリクアカネ		●	
ナツアカネ		●	
マユタテアカネ		●	●
マイコアカネ		●	
ヒメアカネ		●	
ミヤマアカネ		●	●
ノシメトンボ		●	
コノシメトンボ		●	
リスアカネ		●	●
キトンボ		●	
ネキトンボ		●	
コシアキトンボ		●	●
チョウトンボ			●
ウスバキトンボ		●	

清水弟子丸池（昭和四十七年）、野口池（平成二年、同四年）

マイコアカネ

清水（昭和五十一年）、野口池（平成元年、同四年）

ミヤマアカネ

清水（昭和五十一年）

リスアカネ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、野口池（平成二年）

キトンボ

野口池（平成四年）

コシアキトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、野口池（平成三年、同五年）

チョウトンボ

清水弟子丸池（昭和四十七年）、野口池（平成元年、同二年、同四年、同五年）

ハネビロトンボ

野口池（平成二年）

ウスバキトンボ

野口池（平成元年、同五年）

記録されているトンボ類は止水性のものがほとんどで、河川等に見られる流水性のトンボ類はほとんど未調査の状態である。

記録種の中で、特記すべきものとしては、オオハラビロトンボ（九州本土では大分、宮崎、鹿児島各県及び沖縄本島以南の南西諸島に分布するが、産地は少ない）、ヨツボシトンボ（西南日本では産地が少ない）、ミヤマアカネ（県本土の主に山地に生息するが産地は少ない）などがあるが、追記録がなく、特にオオハラビロトンボはその後の調査でも発見できないことから偶産種の可能性が高い。

この他国分市には天降川及びその支流、検校川、高橋川など河川が多く、流水域のトンボ類も多いと思われるので早い時期に調査しておく必要がある。

四 水生生物

国分市は西に天降川を、ほぼ中央に検校川を持っている。そして南側は鹿児島湾に面し、かつてここには白砂青松の自然の砂浜が延々と発達していたが、今は防波堤がそれにとって変わっている。最近、治水工事に際して

「親水」というキーワードがよく使われているが、元来、私たちは意識せずにこの「親水」の姿勢を持って自然と接してきた。そして川や海、水田や用水、岩場や砂浜などで、水に依存して生活している生物（水生生物）とも親しんできた。

水生生物には、タガメやゲンゴロウなどの水生昆虫、アユやキビナグなどの魚類、テナガエビやサワガニなどのエビ・カニ類、マテガイやアサリなどの貝類、そして釣りの餌などに使われるゴカイ類などが含まれる。本項では、今までに報告されている資料と実地観察を基に、天降川、検校川、下井・敷根海岸の干潟に見られる水生生物について主に述べる。

天降川・検校川 天降川は、横川町山ヶ野国見岳に源の水生生物を発し、栗野・牧園・霧島・溝辺・

国分の各市町を貫いて流れ、隼人町内の新川となって鹿児島湾に注ぐ二級河川である。本流の総延長は約四二歳に達し、流域面積は約四一一平方歳ある。一方検校川は、国分市川原にその源を発し、市の中央を流れて鹿児島湾へと注ぐ。その総延長は約七歳である。これら二つの河川の魚類やエビ・カニ類に関する調査は、昭和三十

九年（一九六四）と昭和四十八年（一九七三）に行われてからは、平成五年（一九九三）までほとんど行われていない。従って、この二〇～三〇年間に水生生物の組成、特に淡水産生物の生息状況に変化が起きているかもしれない。

〈魚類〉

毎年六月一日になると、天降川にはアユを求めて多くの太公望が釣り糸を垂らす。天降川や検校川で真っ先に思い出されるのがこのアユである。アユは、県内各河川とも中流の優先種として、多数生息している。ご存じのように、川の下流／＼河口域で産卵・孵化し（本県では十一月中旬から十二月中旬）、仔魚は海へ流下し、しばらく海で成長してから再び川を遡上する、いわゆる淡水性両側回遊魚である。

天降川や検校川は、毎年数多くの天然稚魚が遡上する川として知られていて、県内でも有数の天然種苗の供給河川となっている。県水産振興課の資料によると、天降川水系の日当山天降川漁協と松永漁協および検校川漁協における過去四年間の稚アユ出荷実績は、それぞれ二七〇〇～三三〇〇歳、一四〇〇～一八〇〇歳、および五〇

〇〇一〇〇〇である。ただ出荷実績は、出荷先との契約によつて変動するため、必ずしも稚アユの遡上量を反映しているわけではない。したがつて、この出荷量だけで検校川のほうが天降川よりもその遡上量が少ないということはできない。

また、これらの河川ではアユ資源の維持と遊漁対象種としての両面から、毎年、天降川では二四万尾前後、検校川では五万七千尾の種苗（一尾の体重は約五^{グラム}）が放流されている。この種苗放流量と遡上量とを比較すると、放流量の二〜三倍のアユが、三〇年前と変わらず現在も遡上を繰り返していることが分かる。しかし近年は、アユの産卵場となる下流域の平瀬が、水害や河川改修工事などにより、直接・間接的に影響を受けているようである。恒久的なアユの資源維持のためにも平瀬の保存は大事であらう。

タカハヤは、地理的には広い分布域を持っているが、どの河川でもほぼ上流域に限つて生息しているようである。アブラメとも呼ばれるコイ科の魚類で、コイ科の魚類の中でも冷水域に棲み、平瀬がなくなり岩や岩盤が露出する溪流の様相を示す流域では、このタカハヤが優先

種となる。そのため、ヤマメやニジマスの放流適地の指標種としても利用され、天降川では昭和六十二年（過去一〇年間にこの年のみ）に五〇〇〇尾のヤマメ種苗（一尾の体重は約五^{グラム}）が放流され、上流の霧島川ではニジマスが放流された記録がある。しかし、その後これらの魚種が定着しているかは不明である。従来の日本各地の事例を考えるとほとんど期待はできないであらう。むしろ放流事業そのものが生態系に与える影響のほうが問題で、放流に関しては慎重すぎるほど慎重であつたほうがよいと考えられる。

カワムツは県内の多くの河川から知られていて、天降川妙見や泉帯橋付近でも見られ、比較的上流の平瀬に主に棲んでいる。そして、より上流域ではタカハヤと共存していて、中流域ではオイカワと共存している。オイカワは、ほとんどの河川の中流域の平瀬に最も普通に見られ、川幅が広く、瀬つきアユがいるところでは、オイカワもいると考えてよいであらう。カワムツの生息地よりも下流に主に棲んでいるようで、泉帯橋付近では見られるが妙見付近では見られない。

コイは、天降川や検校川のように漁業権の設定されて

いる河川では重要な増殖対象魚となっている。そのため天降川では最近三年間に体重二〇[㍉]の種苗が四万五〇〇〇〜六万一五〇〇尾放流され、検校川では過去三年間に毎年一万二五〇〇尾の種苗放流がされている。しかし、現在までのところ淵やよどみなどに生息しているのは確認されているが、大きな産卵場や自然繁殖の報告はない。

一方、県内で見られるフナはギンフナで、流れの緩やかなところやよどみなどに多く生息していて、県内の河川の中流・下流に分布する。天降川ではフナは増殖対象魚とされており、過去三年間に毎年一万六〇〇〇から二万尾の種苗（二尾の体重は約一〇[㍉]）が放流されている。県内多くの河川や湖沼で放流されているものの多くはヘラブナであるが、天降川ではまだヘラブナは確認されていないようである。

ナマズは、河川の中流やここに連なる水路などに棲んでいるが、天降川では野口橋付近でチョウチン網を使ってやっと採集できるぐらいに少なくなっている。一方、ウナギは、生息環境に対する耐性が強いうえに、養殖・増殖対象魚として積極的に種苗放流が行われているの

で、多くの河川でその生息を確認できる。ちなみに天降川では体重二[㍉]の種苗が過去三年間に毎年七万〜八万尾、検校川では一万尾放流されている。

ボラは、海産魚でありながら感潮域・汽水域の上限まで遡上する。天降川でもかなり中流のところで採集された記録がある。

カワアナゴは、形はドンコに似ているが、卵から孵化するとすぐに海に下り仔魚期の終わりになると遡上して底生性になる。これに対し、ドンコは孵化後はじめから底生性である。この習性の違いに関連して、カワアナゴは下流域に多く生息し、ドンコは中流の小川や水路に多く生息しているようである。ただ、生息場所は非常に似ていて、植物の多い泥底で流れの緩やかな物陰に潜んで単独生活を営んでいる。現在までのところ天降川・検校川で記録されているのはカワアナゴだけである。

チチブは、小型のハゼで下流域〜中流域に生息する魚種で、検校川でも記録されている。繁殖期になると河口の汽水域に下りてきて、そこで産卵する。

＜エビ・カニ類＞

県内に生息する淡水のエビ類には、テナガエビ類とヌ

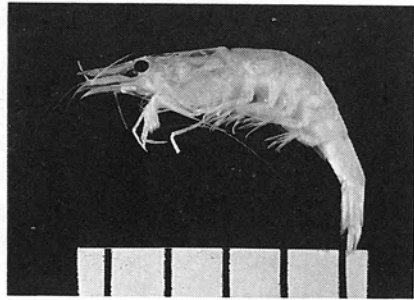


写真 1-42 ミゾレヌマエビ

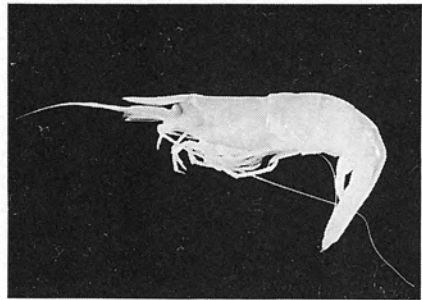


写真 1-43 ミナミヌマエビ

マエビ類があり、昭和四十七年（一九七二）の調査では天降川でもテナガエビがチョウチン網で採集された。しかし、平成五年（一九九三）の報告では、天降川と検校川にはテナガエビやミナミテナガエビなどのテナガエビ類や、最近県内の各所で確認されているアメリカザリガニなどは見られず、生息が確認されたのは二種のヌマエビ類だけであった。

ミゾレヌマエビは、日本と韓国にだけ分布し、県内に広く生息している（写真 1-42）。卵から孵化した子供（幼生）は塩分がないと生育できず、成長した幼生は稚

エビになるころに川を遡上する。このミゾレヌマエビは天降川や検校川では比較的下流域に生息している。一方、ミナミヌマエビは、日本固有のエビで、県内でも種子・屋久島などの島々には生息していない（写真 1-43）。数少ない純淡水産のエビで、卵から孵化した子供は淡水でないと生育できない。天降川でも、ミナミヌマエビはミゾレヌマエビよりも上流に生息している。

淡水産のカニ類として知られているのは、モクスガニとサワガニである。モクスガニは、ヤマタロウガニとかツガネとも呼ばれ、かなり山奥の渓流域でも見ることができ大変なじみのあるカニである。両方のハサミ脚の全面を覆うように長い毛が密に生えているのが特徴の一つである。秋になると河口へ下りていき、そこで産卵する。孵化した子供は海で生育し、メガロパに成長すると川を遡上する。北薩の川内川ではこのモクスガニは増殖対象種として毎年種苗放流されている。また、秋には食べるために漁獲されるが、天降川・検校川では食べられていないようである。

サワガニは、純淡水産のカニで、子供は塩分のある水

の中では生育できない。また、卵からは親と同じ形で孵化する。サワガニもモクズガニも肺吸虫の中間宿主として知られていて、食べるときには十分気をつける必要がある。また、猪もサワガニを好んで食べるようなので、しし肉を食べるときにもこの寄生虫には気をつけたほうがよいであろう。

＜その他の動物＞

貝類のカワニナは、河川の本流・支流、水路、水田を問わず、淡水域全域に広く生息している。なかでも水量の安定した、水田側溝などのような保護されたところに多く生息するようである。

ほとんどの巻き貝は右巻きであるが、サカマキガイは左巻きである。このサカマキガイが天降川妙見温泉上流の犬飼の滝の滝つぼ近くで生息するのがかつて確認されている。サカマキガイはヨーロッパ原産と考えられているが、今では北海道から九州各地へと広く分布している。

下井・敷根海岸の 城山公園のある高台（標高約二〇
干潟の水生生物 ○^び）から桜島・錦江湾を望む

と、かつては眼下に国分平野から続く、白砂のすばらし

い砂浜を見ることができた。その後、国分隼人干拓事業でその大部分は埋められてしまい、国分市に残る往時の砂浜は下井・敷根海岸だけとなってしまった。ところで、砂泥質の海岸のうち干潮時に露出するところを一般に「干潟」と呼んでいる。この干潟に生息する生物の種類数は、岩礁海岸に比べると少ないが、その生産力は大変高いことが知られている。また、干潟は物理的・生物の浄化機能を持つていることも知られている。

＜下井海岸＞

検校川河口の右岸、須戸川^{サド}までの約一・五歳の海岸は下井海岸と呼ばれ、沖合い五〇〇^びにも及ぶ遠浅の美しい海岸で、国分海水浴場として国分市民のみならず県民の憩いの海岸である。そして暖かい季節には海水浴はいうに及ばず、貝掘り、釣り、キャンプも行われ、現在では県のウォーターフロント整備事業の一環として、海岸周辺はきれいに整備されている。しかし、人工堤によって東西両側が仕切られているために泥の堆積が起こっているようで、冬季にはアオサ類が一面を覆う富栄養の干潟になっているようである。

この下井海岸は粒のそろった砂で占められているが、

シルト・クレイと呼ばれる、より粒の細かい泥や粘土質がその上に薄く推積している。そのため泥質の干潟に出現する種が多く見られる。最も優先している生物はギボシイソメというゴカイの仲間で、全長一五センチぐらいになる多毛類である(写真1-44)。下井海岸の干潟の低潮帯を歩くと、ほとんどの場所ですべての巣穴を観察することができる。日本全域に広く分布していて、砂質干潟の潮間帯下部より深いところで、かつ淡水や汽水の影響をあまり受けないところに好んで棲んでいる。また、比較的富栄養化の進んだ地域に多いようである。

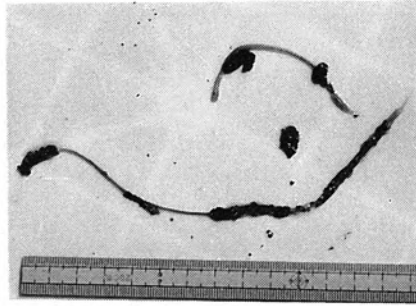


写真1-44 砂中から採集されたギボシイソメ



写真1-45 砂中から採集されたムギワラムシ



写真1-46 砂中から採集されたニホンスナモグリ

下井海岸を少し西側に移動したところには、ツバサゴカイの仲間のムギワラムシ(写真1-45)がその巣の一端を砂の上に出していて、まるで雨後のタケノコのように巣が林立しているのが見られる。このムギワラムシは体の後ろ半分は普通のゴカイと同じ形をしているが、前半分には翼状の付属物や吸盤体と呼ばれる特徴的な構造を持っている。そして、表面に砂粒をつけた膜質でU字型の棲管に棲んで、前述したように棲管の一端を砂の外に出している。このムギワラムシはギボシイソメよりも多少泥質の少ない、砂質干潟の潮間帯下部に生息してい



写真1-47 砂中から採集されたシオフキガイの生貝

る。

ギボシイソメやムギワラムシに混ざって、エビ・カニ類のニホンスナモグリも生息している（写真1-46）。このニホンスナモグリは体長約六センチになる比較的大型の種で、白色半透明の色彩をしている。初夏の四月から六月にかけて卵を生む。内湾域の砂泥質の潮間帯下部から浅海にかけて、数センチから十数センチの比較的深い巣穴をつくって棲んでいる。この穴掘りは頻繁に行われるので、干潟の深い層への酸素供給に役立ち、自浄作用の一助にもなっている。

ところで春三月中

旬に下井海岸を観察に行ったところ、いたるところでアサリ・ホトトギスガイ・シオフキガイなどの二枚貝の死殻が観察された。このとき採集できた生きた貝はシオフキガイだけで

あった。

アサリは殻の長さ三センチくらいになる貝で、食用にされる。この貝は日本全国の砂質干潟に最も普通に見られ、砂の中に深さ一〇センチくらいまで潜り込んで生活している。ホトトギスガイは貝殻の表面の色彩とその模様が、ホトトギスの羽を連想させるのでこう名づけられた。全国の内湾性で泥質の干潟に最も普通に見られる貝類の一つである。

シオフキガイは、殻の長さ三センチで、よく膨らんだ殻を持つている（写真1-47）。成長脈という同心円状の線がはつきりと観察でき、黄白色の殻の縁辺部が幅の広い薄紫色で縁取られている。アサリとともに砂質干潟に普通に分布し、同じように砂中に潜り込んでいる。今回のように干潟のかなり表面まで上がっていたり、完全に砂の外に出ていることはめったにない。砂中が棲みにくくなっているのであろうか。また、今回観察されたような大量斃死は、自然界ではよほどのことがないかぎり見られないことである。

潮間帯一面に生えたアオサの間には、軟体動物のアメフラシが産卵に集まっていた。アメフラシは最大全長四

○^チにもなる大型の軟体動物で、よく知られているようにその体に触れると紫色の汁を出す。冬から春にかけて海岸に現れ、アオサなどの海藻を食べ、三月から七月にかけて卵を生む。卵は黄色でゆでたそうめんのような感じで、「海そうめん」と呼ばれている。

またアオサの間の波間には、エビ・カニ類のフタバベニツケガニの死骸が散見された。フタバベニツケガニは広くインド・太平洋に分布し、日本では東京湾以南の潮間帯以深の浅海域に普通に見られるカニである。目と目の間の額が幅広い二葉に分かれているのが特徴である。

このカニが春先に大量に死亡するようなことはまだ報告されたことはない。このときだけの特別な状態なのであろうか。

以上のように検校川河口右岸の下井海岸には、泥質干潟に出現する種が多いようである。また、二枚貝やフタバベニツケガニなどの死亡個体が散見されたり、河口近くの干潟によく見られるスナガニ類のコメツキガニやチゴガニが全く見られないのは、防波堤設置による影響が少なからず考えられる。

〈敷根海岸〉



写真1-48 転石帯に生息するケフサイソガニ

ろう。春先の大潮の干潮時には多くの人々が「貝掘り」や「カニ取り」に来ていた。さらに、検校川の河口は野鳥の休息場にもなっているようである。また、河口近くには砂質干潟に混じって転石帯もある。

この転石帯には、イワガニ類のケフサイソガニやヒライソガニが石の下に隠れるように棲んでいる。ケフサイソガニは日本の干潟の転石帯ではかなり普通に見られるカニで、甲の幅は二五^ミ程度で、雄のハサミの付け根には房になった毛が生えている(写真1-48)。ヒライソガニも大きさはケフサイソガニとほぼ同じであるが、甲

検校川の左岸、若^{わか}尊^{みこのはな}鼻^なまでの海岸は敷根海岸と呼ばれ、下井海岸とは違って検校川とこの海岸を仕切る防波堤もなく、検校川からの淡水の影響を直接受けている。下井海岸よりも生物が豊富なのであ

らは極めて扁平で、雄のハサミ脚には毛は生えていない。また、甲らの色には個体によってかなり変異が見られ、特に小型の個体では白色が目立つ。やはり、転石帯や礫の多い砂質干潟に棲んでいる。

砂泥質の干潟で優先している種類は、下井海岸とは少し異なりゴカイやイトメで、その生息密度もかなり高いようである。ゴカイは全長一〇センチぐらいになり、イトメは大きくても二センチにしかならない。両種とも、日本各地の泥質干潟で河川の流入する海岸や、汽水域に普通に見られる多毛類である。このことから、敷根海岸が検校川の河川水の影響を受けていることが分かる。

干潟は、一見平らで緩やかに海へ向かって傾斜しているだけのように見えるが、そこには微妙な高低差がある。干潟に棲む生物は、この微妙な高低差を認識し、その分布を微妙に違えている。敷根海岸の干潟の中で、少し高くなった丘の部分（マウンド）には、下井海岸と同じく、ツバサゴカイの仲間のムギワラムシの棲管が観察され、その少し海側にはエビ・カニ類の二ホンスナモグリも生息している。

一方、検校川の本流の近くではスナガニ類の巣穴と砂

団子が見られる。この巣穴を掘ると、そこにはチゴガニ・コメツキガニ・ヤマトオサガニを見つけることができる。チゴガニは甲幅一センチほどの小型のカニで、本邦の干潟、特に泥質の干潟に最も普通に見られる種類である（写真1-49）。チゴガニが多数群生しているところでは、潮が引くとカニが巣穴から出てきて、みんなが白いハサミ脚をそろって上下に振り動かす、いわゆるダンスをする。それは見事な景観である。検校川の河口でも右岸の堤防に近いところでは、その見事な演技が見られる。

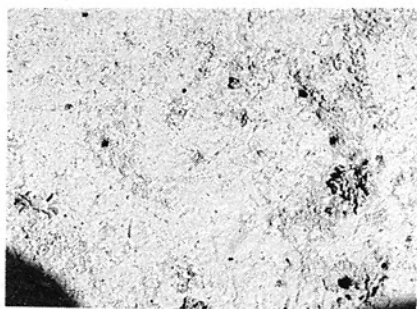


写真1-49 干潟で活動するチゴガニとその巣穴

コメツキガニは甲幅一センチぐらいのカニで、チゴガニよりも砂質のところを好み、その生息はチゴガニとよく似ている。チゴガニやコメツキガニの巣穴の周りに見られる砂団子はこれらのカニの食

事の後である。カニたちは砂粒の周りに着いている微小な珪藻や有機物を餌として食べ、一緒に口に入れた砂粒だけを吐き出す。吐き出すときに砂粒を丸めるので、それが団子のように見えるのである。この吐き出された砂粒には、再び珪藻やバクテリアやその他の有機物が付き、これらがまたカニの餌となる。これが本当のリサイクルといえるであろう。

ヤマトオサガニは甲幅四センチの少し大きなカニで、チゴガニと同じく泥の多い干潟に好んで棲む。

本流の少し上流には、アシハラガニやベンケイガニなどの巢穴が多数見られる。これらのベンケイガニ類は干潟よりも、その陸側の後背地の土手に巢穴をつくって棲んでいる。河川の「護岸のために」と土手をコンクリートで固めたり、自然石で石組みをつくるのは、これらベンケイガニ類にとってはその生息環境を奪われることになる。しかし、巢穴のために土手が決壊しては困るし、治水事業も大事なことであるから、自然保護と私たちの経済活動とをどのように協調させていくかが大切であろう。

話がちょっとそれてしまったが、本流から分岐した小



写真 1-50 春の干潟で採れるガザミ

では甲幅が一四センチにもなる。六月から八月に子供を産み、子供は九月ころに甲幅二センチぐらいに育つと干潟に集まってきて餌を漁る。

以上のように、敷根海岸には日本の内湾性の干潟に普通に見られる生物が、比較的多く生息している。下井海岸よりも環境の変化に富んでいて、イワガニ類やスナガニ類も多く生息していた。しかし、各種整備事業や護岸工事が自然環境に影響を与えていることも事実である。この影響は干潟海岸の生物に限らず、河川に生息する生物にも及んでいて、かつて国分市でもその生息が報告さ

さな流れがあるところには、アサリなどが棲んでいる。そして、春先にはガザミもやってくるようである（写真1-50）。ガザミは一番最後の脚が櫂かのような形をしていて、泳ぐことができる大型のカニである。大きなもの

れていた、ハクセンシオマネキ（干潟に生息）やテナガエビ類（河川に生息）がいなくなっているのが残念である。私たちは、今後、もっと自然との協調を考慮した経済活動を行っていくべきであろう。

〔注〕

- (1) 露木利貞「九州地方における温泉の地質学研究（第五報）——鹿児島地溝内の湧出する温泉、特に温泉貯留体について」『鹿大理学部紀要』（地学・生物）二、八五—一〇二頁、一九六九年。
 - (2) 海上保安庁、五万分之一海底地形図「鹿児島湾北部」、一九九〇年。
 - (3) 横山勝三「始良カルデラ入戸火砕流の流動・堆積機構」『東京教育大学地理学研究報告』Ⅺ、一二七—一六七頁、一九七二年。
 - (4) 森脇広・町田洋・初見祐一・松島義章「鹿児島湾北岸におけるマグマ水蒸気爆発のこれに影響を与えた縄文海進」『地学雑誌』九五、二四〇—四三頁、一九八六年。
 - (5) 荒牧重雄「始良カルデラと入戸火砕流」『月刊地球』五、八三—九二頁、一九八三年。
 - (6) 斎藤眞・佐藤喜男・横山勝三「末吉地域の地質」『地域地質研究報告』（五万分之一地質図幅）一一一—
- 頁、地質調査所、一九九四年。
- (7) 町田洋・新井房夫「火山灰アトラス」〔日本列島とその周辺〕二七六頁、東京大学出版会、一九九二年。
 - (8) Nagaoka, S. (1988) 'The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geog. Rept. Tokyo Metropol. Univ., 23 : 49-122
 - (9) 横山勝三「九州における大規模火砕流の噴火とその堆積物」『地形』八、二四九—二六七頁、一九八七年。
 - (10) 辻誠一郎・小杉正人「始良Tn火山灰（AT）噴火が生態系に及ぼした影響」『第四紀研究』三〇、四一九—四二六頁、一九九一年。
 - (11) 福山博之「桜島火山の地質」『地質学雑誌』八四、三〇九—三一六頁、一九七八年。
 - (12) 長谷義隆・山脇眞二・早坂康隆「鹿児島湾北西岸地域の第四系の再検討」『地団研専報』三三、二〇七—二二四頁、一九八七年。
 - (13) 鹿児島県「鹿児島県地質図」一九九〇年。
 - (14) 今村「震災予防調査会報告」九二、大正九年。
 - (15) 鹿児島県「平成五年度鹿児島豪雨災害の記録」平成七年。

- (16) 国分市『国分郷土誌』昭和四十八年。
- (17) 注(3)に同じ。
- (18) 鹿児島地方気象台『鹿児島県災異誌』昭和四十二年、鹿児島県『昭和四十二年度災害の記録』昭和四十二年。
- (19) 国分市「市報こくぶ」一九五、昭和四十四年。
- (20) 国分市「市報こくぶ」二八〇、昭和五十一年。
- (21) 鹿児島県土木部砂防課「霧島火山」『新砂防』四四—四、平成三年。
- (22) 小林「桜島火山の形成史と火砕流」『火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害』所収、昭和六十一年。
- (23) 国分市「市報こくぶ」号外(災害特集号)、平成五年。
- (24) 国分市『国分市地域防災計画』昭和六十三年。

第二章 人口と集落

第一節 人口と世帯数の変遷

人口の動態と年齢構成は、結婚・出産・死亡あるいは流入・流出、社会的事件といった動きによつて影響を受け変化する。このような一般的な問題のほかに、最近はいは具体的人口問題が日本の国内において、また世界全体について人々の大きな関心事になっている。日本国内においては、低年齢層の減少と高齢化およびこれに伴つて生じる高齢化社会の諸問題がある。

国外では、発展途上国における人口の激増と開発の遅滞があり、この問題の解決は二十一世紀にむけての人類最大の課題であるといわれている。

わが国の人口年齢構成は、終戦時の若者の激減、戦後のベビーブームなどにより、大きく変化した。その後昭

和三十年ごろからの生活安定と医療福祉の進歩等により高齢化が次第に進んできた。

昭和四十五年の国勢調査においては、六五歳以上の高齢者の割合が七・〇％を超えたことが明らかになり、このころから高齢者の増加の問題が人々の関心の的になり始めた。

国分町の昭和九年度の統計では、六〇歳以上の割合は三・七％であつたが、平成五年の住民基本台帳の統計によれば六五歳以上の高齢者の割合は一三・八％に増加している。

次に国分市の人口について、表2-1で見ると、昭和三十年の市制施行当時は、三万五四八〇人で、翌三十一年は自衛隊移駐により三万七八二〇人に増えたが、それをピークに毎年減少を続け、昭和四十四年には三万人を割り込んでしまった。減少が続いた人口も昭和四十七年

表2-1 人口の推移

区分 年次	世帯数	人 口			一世帯当たり の家族人員	世帯数増 加 指 数	人口増加 指 数
		総数	男	女			
昭和30	8,116戸	35,480人	17,382人	18,098人	4.4人	100.0%	100.0%
〃 35	8,674	34,256	16,655	17,601	3.9	106.7	96.6
〃 40	8,780	31,295	15,180	16,115	3.6	108.2	88.2
〃 45	9,452	29,729	14,308	15,421	3.1	116.4	83.8
〃 50	10,913	31,660	15,409	16,251	2.9	134.5	89.2
〃 55	12,792	35,433	17,130	18,303	2.8	157.6	99.9
〃 60	15,893	40,931	20,209	20,722	2.6	195.8	115.4
平成2	18,337	46,557	23,906	22,651	2.5	225.9	131.2
〃 7	19,991	50,048	25,335	24,713	2.5	246.3	141.0

(注) 平成7年は「国勢調査」の速報値による。

(資料) 国分市統計書

から増加に転じ、以降順調に伸びて昭和五十七年にはピーク時の人口を超えた。

人口が増加に転じた要因としては、第一に企業誘致の努力が実ったことをあげねばならない。また鹿児島空港が溝辺町に移転してきて交通の便が良くなったこと、文化施設・公園・道路などの環境整備が図られ、市外からの移住者が増加したことである。

平成二年の国勢調査結果によると、国分市の昼間人口は五万人を超え、平成七年の国勢調査では常住人口が五万人を超えた。また住民基本台帳の登録人口も平成八年四月十五日に五万人を突破した。

昭和三十年から平成二年の三五年間に人口は約一・三倍に伸びているが、世帯数は二・二倍とさらに大きく伸びている。一方わが国の世帯規模は昭和三十五年以降急速な収縮をみせており、国分市でも一世帯当たりの家族人員は、昭和三十年の四・四人から平成二年には、二・五人と半減している。

企業進出に伴って、国分市の産業構造・就業構造も大きく変わってきた。表2-2で年次別に各産業を三部門にまとめ、就業人口の推移を見ると、第一次産業の激

第2章 人口と集落

表2-2 年次別・産業別の就業人口

年次 区分	昭和30年		昭和40年		昭和50年		昭和60年		平成2年	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
第一次産業	12,638	72.9	8,572	57.3	4,406	30.6	2,858	14.9	1,966	9.5
第二次産業	1,437	8.3	1,404	9.4	3,425	23.8	7,474	39.0	8,339	40.2
第三次産業	3,261	18.8	4,979	33.3	6,526	45.4	8,814	46.1	10,420	50.3
分類不能の産業	0	0	5	0	26	0.2	10	0	11	0
総 計	17,336	100.0	14,960	100.0	14,383	100.0	19,160	100.0	20,736	100.0

(注) 各年とも「国勢調査」による。

表2-3 地域別人口

区分 地域	昭和30年		35年				40年				45年			
	世帯数	人口	世帯数	対比	人口	対比	世帯数	対比	人口	対比	世帯数	対比	人口	対比
東農山	戸 565	人 2,415	戸 566	% 100	人 2,187	% 91	戸 557	% 99	人 1,893	% 78	戸 559	% 99	人 1,680	% 70
清水	1,565	7,181	1,604	102	6,401	89	1,580	101	5,517	77	1,550	99	4,826	67
国分	2,385	9,977	2,717	114	10,365	104	2,827	119	9,801	98	3,325	139	10,208	102
東国分	2,103	9,284	2,797	133	11,455	123	2,845	135	10,667	115	3,037	144	9,961	107
敷根	1,498	6,623	992	66	3,798	57	981	65	3,417	52	981	65	3,054	45
総計	8,116	35,480	8,676	109	34,206	96	8,790	108	31,295	88	9,452	116	29,729	84

(注) 地域は合併前の旧町村。対比は対30年比。

(資料) 市統計書

減、第二次産業・第三次産業の大幅な伸びが注目される。

第二節 地域別人口

昭和三十年から昭和四十五年に至る人口減少の期間の人口変化を、地域別（合併前の旧町村）に見たのが表2-3である。

昭和四十七年から人口増加に転じているが、増加人口の多くは第二・第三次産業従事者とその家族である。

昭和五十年以降の急激な人口の伸びと就業構造の変化は、住環境ひいては集落構造にも大きく影響している。昭和五十年以降の地域別の人口動態については下巻の第六編第七章「人口増加と住宅問題」の項で後述する。

第三節 集落の推移

当国分市域に該当する江戸期の村々は、次のような変遷をたどって現在に至っている。

明治初期における郷および村に、どのような合併・分村・境界変更があったかを知る具体的な資料は乏しいが、「薩隅日地理纂考」により明治四年の村名を見ると、表2-4のとおりである。

なお、明治四年七月鹿児島県、十一月からは都城県に所属。明治六年都城県の廃止に伴い、鹿児島県に編入。

明治十二年の鹿児島県治一覧概表によると、襲山郷は東襲山郷（重久村・松永村・大窪村・川北村・田口村）と西襲山郷（東郷村・西光寺村・嘉例川村・朝日村）とに分かれている。以下、順次その推移を追ってみる。

・明治二十年 噓咄郡が東西に分かれ、西噓咄郡に所属。

・明治二十二年 市制町村制により、国分郷は国分村・東国分村・西国分村（現始良郡隼人町）の三村に分立（表2-5参照）。

表2-4 「明治四年村名調」

大隅国 噓咄郡				国および郡
国府郷	敷根郷	清水郷	襲山郷	郷
上小川村 上井村 川内村 下井村 小村 福島村 松木村 野口村 府中村 向花村 新町村 見次村 内村 内山田村 小田村 野久美田村 小浜村 真孝村 住吉村	敷根村 湊村 上之段村	弟子丸村 姫城村 郡田村 山之路村 川原村	田口村 大窪村 川北村 松永村 重久村 朝日村 東郷村 西光寺村	村名 人口戸数
17,144人 3,584戸	2,333人 472戸	3,839人 695戸	6,195人 4,117戸	

・明治二十九年には郡区画改正により、始良郡・西噓咄郡・桑原郡が合併して始良郡となり、西噓咄郡に属していた国分村・東国分村・敷根村・清水村・東襲山郷は始良郡に所属。

表2-5 大隅国西郷郡

新町村名	区 域 (旧町村名)
敷根村	麓村 下井村 上之段村 浜町
清水村	弟子丸村 川原村 姫城村 郡田村 山之路村
東襲山村	重久村 松永村 大窪村 川北村 田口村
国分村	上小川村 向花村 野口村 府中村 新町村 本町 唐仁町
西国分村	真孝村 住吉村 浜之市町 野久美田村 小浜村 小田村 内山田村 内村 見次村
東国分村	小村 福島村 松木村 上井村 湊村 川内村

・大正十五年 国分村に町制施行 (図2-1・表2-6 参照)。

・昭和十年 東襲山村を霧島村と改称。

・昭和二十二年 霧島村大字重久の一部を清水村に編入。

・昭和二十五年 霧島村大字重久・松永村の一部が分立し、東襲山村となる。また、大字松永の大部分と重久の一部は日当山村 (現隼人町) へ編入。

・昭和二十九年四月 シャウプ勧告に基づいて、前年⁽¹⁾

「町村合併促進法」が成立施行されたが、東襲山・清水村 (大字姫城の大半は除く) が国分町に合併し、清水村大字姫城の大半は隼人町に合併。五月、国分町に東国分村と敷根村を合併。

・昭和三十年 国分町に市制施行して国分市成立。

・昭和三十六年 国分市姫城の一部を隼人町に編入。

・昭和三十八年 国分市野口の一部と隼人町住吉の一部を境界変更。

第四節 大字・小字^{おおあざ こあざ}

わが国の町村は、明治の初めから幾多の変遷を経て明治二十年代を迎えたが、市町村制施行という画期的な地方行政制度の確立を機として、政府からの新しい要請に応じうる形態を整えることになった。市町村制施行を前にして、強力な町村を設けるために明治二十二年の町村大合併が行われたが、この合併は廃藩置県にも比すべき地方自治の大きな改革であった。

明治二十一年六月十三日、内務大臣訓令第三五二号第六条に「合併の町村には新たに其名称を選定すべし。旧



図2-1 昭和29年当時の国分町と隣接村

表2-6 昭和29年(合併直後)の5か町村の概要

旧町村名	戸数	人口	面積	田	畑	山林	有権者
	戸	人	平方キロ	町	町	町	人
国 分	2,322	10,641	10.42	356.5	128.6	203.0	5,482
清 水	1,600	7,339	44.54	350.9	269.9	2,666.0	3,779
東 襲 山	560	2,667	12.20	90.6	135.0	329.0	1,378
東 国 分	2,045	9,432	34.70	436.6	205.8	2,354.0	4,975
敷 根	1,549	7,112	22.78	244.3	216.4	1,229.0	3,528
合 計	8,076	37,191	124.64	1,487.9	955.7	6,781.0	19,142

(注) 近隣他町との人口比較 谷山町40,093 西之表町30,123 準人日当山町29,740
 顕娃町28,533 末吉町27,779 加治木町21,225。

第2章 人口と集落

表2-7 住居表示の実施状況

区分	実施期日	実施区域				
		新町名	旧町名	面積	世帯数	人口
第1次	昭和49.7.1	中央1丁目～ 四丁目、 名波町、山下町	清水、府中、向花、上 小川、松木、福島、上 井、湊の各一部	2.30	2,529	7,379
第2次	昭和59.5.1	広瀬一丁目～ 四丁目、 城山町	広瀬、湊、清水、上小 川、中央一丁目の各一 部	1.29	1,364	4,212
第3次	昭和59.12.1	福島一丁目～ 二丁目、 松木町、野口町	福島、松木、野口、広 瀬の各一部	1.44	994	3,821
第4次	昭和62.12.1	中央五～六丁目、福 島三丁目、松木東、 野口北、野口東、中 央三丁目に追加	上小川、野口、府中、 向花、松木、福島の各 一部	0.75	751	3,162
第5次	平元.1.17	府中町、向花町	府中、向花の各一部	0.52	885	2,102
第6次	平8.12.2	中央三丁目に追加 中央五丁目に追加	府中、向花の各一部 松木の一部	0.14	57	90

各町村の名称は大字として之を有することを得」とされて、合併前の町村名が大字として残った。小字は大字の中をさらに小さく区分したもので、土地の所在を表示する。

国土の開発と保全に資し、地積の明確化を図ることを目的として、昭和二十六年制定された国土調査法に基づき、国分市でも同四十七年から地籍調査が始められ、平成二年で調査が終了した。その結果正確な地籍図が出来上がり、その成果を利用して新しい字界調査図が作られたので、今回はこれを基に大字・小字について述べる。

また、地域経済の発展や都市化の伸展とともに、人々の生活圏は拡大し、社会の多様化のなかで水道・電気事業や救急活動・消防・防犯等の行政活動も盛んになってきた。国分市でも道路の新設、拡幅や宅地開発等による市街化が進むにつれて大字の境界や形、名前等が不明確になり、これらの改善が要望された。そこで、住居表示に関する法律（昭和三十七年法律第一九条）の規定に基づいて、分かりやすく住みやすい街を目指し

て、表2-7のように住居表示が実施された。

以上の地籍調査と住居表示により字界調査図(字図)も大幅な改訂を行い、字名についても新しい試みとして、地元の方々の協力を得て方言名を併記した。

また、住居表示された地域については、新町名が大字となり小字は使用されなくなった。

大字・重久

現在の国分市の大字・小字は次の通りである。

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 内園 うちのみ	うつぞん	13 西木場 にしきば	にしこば	25 志明寺 じみょうじ	じみよつし	37 堂免 どうめん	どめん
2 須川 すがわ	すがわ	14 崩平 くずれのへら	くえひら	26 山田平 やまだのへら	やまだびあ	38 白落 しろおとし	ひととし
3 アフセ	あふせ	15 木場 こば	こば	27 藤ヶ久保 ふじがくぼ	ふつがくぼ	39 仁連木 にれんぎ	にれんぎ
4 岩元 いわもと	いわもと	16 外戸前 けとどまえ	けどまえ	28 札久保 ふじがくぼ	ふだんくぼ	40 御子籠 みこごもり	みこごもり
5 須川原 すごばい	すごばい	17 重久迫 しげひさぎこ	しげひさぎこ	29 内野々 うちのの	うつのの	41 花牟礼 はなむれ	はなむれ
6 立山原 たちやまばい	たちじやまばい	18 星熊 ほしくまばい	ほしくまばい	30 大久保 おおくぼ	おおくぼ	42 道場口 みちのこうち	どじよくつ
7 折橋原 おりはしばい	おいはしばい	19 越口迫 こくちぎこ	こしぐつぎこ	31 有馬原 ありまばい	あいまばい	43 野間口 のまぐち	のまぐつ
8 桶口 ゆけぐち	ひぐつ	20 七開 ななけ	ひちかい	32 古外戸口 ふるけとどぐち	ふいけどぐつ	44 樋渡 ひわた	ひわたし
9 小原 こばい	こばい	21 桃ヶ迫 ももがき	ももがきこ	33 野首 のくび	のくつ	45 山王田 さんおうでん	さんおうだ
10 自徳原 じとくばい	じとつばい	22 新開込 しんかいごみ	しんかいごめ	34 吉水山 きすいせん	きつすいざん	46 中島 なかしま	なかしま
11 越口原 こくちばい	こしぐつばい	23 牧神迫 まかみ	まつがん	35 青餅田 あおもちだ	あおもつでん	47 末 すえ	すえ
12 田中原 たなかばい	たなかばい	24 篠ヶ迫 しのがき	しのがきこ	36 今城 いまじょう	いまじよ	48 岩田 いわた	いわた

第2章 人口と集落

小字名	方言名
1 畑井田 はたいだ	はてだ
2 九万田 くまんだ	くまんてん
3 鳥越 とりごえ	といごえ
4 梨子ケ迫 なしがき	なしだごこ
5 堤田 つみだ	つつんだ
6 トチメ田 とちめだ	とちめだ
7 寺田 てらだ	てらだ
8 本町 ほんまち	ともまつ
9 新田 にいだ	にた
10 羽坂 はざか	はざか
小字名	方言名
11 口町 くちまち	くつまつ
12 溜池 なめいけ	ためいけ
13 中宇都 なかうと	なかうと
14 森木田 もりきだ	いのつだ
15 藪山 やぶやま	やぼやま
16 大字都 おおと	おおと
17 トビケ尾 とびけお	とつが
18 ハナテ石 はなていし	はなていし
19 宮田 みやた	みやだ
20 桑ノ宇都 おうと	くわんうと
小字名	方言名
21 玄亀庵 げんきあん	げんきあん
22 平等 びやうどう	びやうどう
23 寺馬場 てらば	てらんば
24 牟田 むた	むた
25 内馬場 うちば	うつば
26 豊ノ口 とよのくち	てのくつ
27 外城 ほかじょう	ほかじょう
28 和田 わだ	わだ
29 坂ノ上 さかのうえ	さかんうえ
30 落水 おちす	うつみつ
小字名	方言名
31 六郷 ろくごう	ろつごう
32 平ノ前 ひらのまへ	ひらんまえ
33 堂免 どうめん	どうめん
34 冷沢津 ひやづつ	ひやすつ
35 永山口 ながやまぐち	ながやまぐつ
36 永山 ながやま	ながやま
37 茅ケ宇都 ちがうと	かやがうと
38 立神 たちがみ	たてがみ
39 通迫 とおりき	かいざこ

大字・清水

49 折戸 おりと	おいと
50 田中 たなか	たなか
51 山神 やまがみ	やまんかん
52 修理田 しゅうりだ	しゅうりだ
小字名	方言名
53 桑ケ丸 かうがまる	くわがまい
54 茅落 かやふし	かやおとし
55 関 せき	せき
56 高付 たかつき	たかつつ
小字名	方言名
57 桐畑 きりばた	きいばた
58 山路 やまじ	やまんじ
59 六興 むくろ	むくろ
60 阿子田 あこでん	あこだ
小字名	方言名
61 世田 せだ	せだ
62 島田 しまだ	しまだ
63 平松 ひらまつ	ひらまつ
64 本持 きもち	きもち

大字・姫城
ひめぎ

大字・郡田 おおひだ	大字・姫城 ひめぎ
小字名	方言名
1 崎園 さきぞの	さつぞん
2 上木ヶ森 かみこがもり	かんこがんもい
3 木ヶ森 こがもり	こがんもい
4 中水流 なかつる	なかずい
5 堤畑 つひはた	つつんだ
小字名	方言名
6 札立 ふだたて	ふだたて
7 大津川原 おおつかわはら	うずごあ
8 外古川 そとふるかわ	そとふいかあ
9 下川原 しもかわはら	しもんこあ
10 平下 ひらした	ひらした
小字名	方言名
11 平岡 ひらおか	ひらおか
12 阿多石 あたいし	あだいし
13 竹下 たけした	たけした
14 田辺 たなべ	たべ
15 砂子田口 すなこたぐち	すなこたぐち
小字名	方言名
16 砂子田 すなこた	すなこた
17 迫ノ前 さきのまえ	さこんまえ
18 下石原 しもいしはら	しもいしばい
19 上石原 かみいしはら	かんいしばい
20 城山 しろやま	しろやま

大字・郡田
おおひだ

大字・郡田 おおひだ	大字・姫城 ひめぎ
小字名	方言名
1 掛熊 かけぐま	かけくま
2 亀ノ甲 かめのかう	かめんく
3 後田 うしろだ	うしとだ
4 久保田 くぼた	くぼた
5 東ノ上 ひがしのうえ	ひがつのうえ
6 山元 やまもと	やまもと
7 山元川原 やまもとかわはら	やまもとごあ
8 鐘ヶ渚 かねがし	かねがふつ
9 辻 つじ	つじ
10 松尾口 まつおぐち	まつおぐち
小字名	方言名
11 松尾 まつお	まつお
12 堂ノ前 どうのまえ	どうのまえ
13 口町 くちまち	くつまつ
14 鐘突 かねづき	かねつつ
15 女竹 めたけ	めだけ
16 永田 ながた	ながた
17 地蔵ヶ宇都 じぞうがうと	じぞうがうと
18 山ノ口 やまのくち	やまにくつ
19 湯ノ谷 ゆのたに	ゆのたん
20 滝ヶ宇都 たきがうと	たつがうと
小字名	方言名
21 宇都良 うとら	うとら
22 仁多田 にただ	にただ
23 棚目 たなめ	たなめ
24 新ヶ迫 しんがきこ	しんがさこ
25 宮ノ前 みやのまえ	みやんまえ
26 野添 のぞえ	のぞえ
27 六反田 ろつたんだ	ろつたんだ
28 竹下 たけした	たけした
29 天神 てんじん	てんじん
30 柳井田 やないだ	やないだ
小字名	方言名
31 芋畑 おぼた	おぼた
32 片平 かたひら	かたひら
33 小城 こじよう	こじよう
34 水上原 みづかみはら	みつかんばい
35 倉嶽 くらたけ	くらたけ
36 南弓手原 みなみゆてばら	みなんゆてばい
37 北弓手原 きたゆてばら	きたゆてばい
38 赤松 あかまつ	あかまつ
39 猿喰 さるばん	さいばん
40 外戸前 けとんまえ	けとんまえ

第2章 人口と集落

59 高松原	58 溝田	57 城ヶ原	56 銭亀	55 池ヶ迫	54 中迫	53 浮石谷	52 登り大塚	51 平野大塚	50 梅ノ木	49 草薨ヶ迫	48 梨子ヶ迫	47 榑ヶ迫	46 善助原	45 外戸ノ口	44 八枚原	43 宇氣ノ口迫	42 宇氣ノ口	41 中原
たかまつばい	みぞんた	じよがばい	ぜんがめ	いけんさこ	なかんさこ	がいしだん	のほいおおつか	ひらのおおつか	うめのつ	とこおがさこ	なしがさこ	たつがさこ	ぜんすけばい	けどんくつ	はつめばい	うけんくつざこ	うけんくつ	なかはら
78 下木原	77 甚ヶ原	76 下り大塚	75 堀ノ下	74 木原	73 岩穴ノ上	72 阿摩谷	71 松八重	70 柿添	69 岩瀬戸	68 岩瀬戸口	67 中峯東平	66 平左工門田	65 田代	64 牛蠅ヶ谷	63 朴木谷	62 朴木原	61 高松	60 境ヶ尾
しもきわら	じんがばい	くだいおおつか	ほいのした	きわら	いわあなんうえ	あまだん	まつばえ	かつぞえ	いわんせど	いわんせどぐつ	なかなねひがつびら	へいざえもんだ	たしお	うしべがたん	ふのつだん	ふのつばい	たかまつ	さけがお
97 琵琶原	96 茅落	95 仁田原	94 弦掛	93 友ノ原	92 長迫	91 琵琶	90 部子員ヶ谷	89 上川内	88 下川内	87 下外戸	86 下平野	85 下藤川原	84 上藤川原	83 下一手矢	82 中平野	81 上一手矢	80 上平野	79 平戸崎
びわんはい	かやおとし	にたばい	げんかけ	ともんはい	ながさこ	びあ	ぶつぐがたん	かんこつ	しもんこつ	しもんけど	しもひあの	しもふつこら	かんふつこら	しもひとてや	なかひらの	かんひとてや	かんひらの	ひらとざつ
113 南田代	112 北田代	111 七曲迫	110 川上	109 前畑	108 軽石田	107 池田	106 菅ノ田	105 長山	104 永野	103 永野原	102 糞ヶ原	101 上伊良ヶ谷	100 松ヶ野	99 下伊良ヶ谷	98 梨子ヶ野			
みなんたしと	きたたしと	ななまがいさこ	かわかん	まえはた	がいしだ	いけだ	すげんた	ながやま	ながの	ながのんはい	こつがはい	かんいらがたん	まつがの	しもいらがたん	なつがの			

大字・台明寺

小字名	方言名
1 下村 しもむら	しもんむあ
2 高山 たかやま	こやま
3 北山 きたやま	きたやま
4 芭蕉田 ばしょうでん	ぼそだ
5 千足 せんそく	せんぞつ
6 不動堂 ふどうどう	ふづどう
7 太郎丸 たろうまる	たおまい
8 堂ノ尾越 どうのおえ	どのおこえ
小字名	方言名
9 堂ノ尾 どうのお	どのお
10 真滝川 まなきがわ	またつがあ
11 連堂 れんどう	はすつどお
12 壇徳 だんとく	だんどつ
13 中野 なかの	なかの
14 柿ヶ迫 かきがき	かつがさこ
15 前ノ園 まへのその	まえんそん
16 山下 やました	やました
小字名	方言名
17 後迫 うしろき	うしとぎこ
18 紙田 かみで	かんでん
19 横瀬平 よこせびら	よこせびあ
20 椋木ヶ平 むくぎがひら	むつのがひあ
21 辰喰 たけく	たつばん
22 永谷 ながたに	ながたん
23 藤川口 ふじがわぐち	ふつごぐつ
24 藤川 ふじがわ	ふつご
小字名	方言名
25 籠ヶ谷 かごがたに	えびらがたん
26 所ヶ迫 ところがき	とこおがさこ
27 井出ヶ山 いでがやま	いでがやま
28 矢筒木 やづき	やづつぎ
29 市来 いちき	いちつ
30 長谷口 ながたにぐち	ながたんぐつ
31 高崎 たかき	たかさつ

大字・川原

小字名	方言名
1 毛梨子野 けなしの	けなつの
2 毛梨子野迫 けなしのぎこ	けなつのぎこ
3 棚目 たなめ	たなめ
4 白蔵 しろくら	しとくあ
5 上芦谷 かみあしたに	かんあつだん
6 八越 やち	はつこし
7 藁塞 わらふさぎ	わらふさつ
小字名	方言名
8 下外戸 しもけと	しもんけど
9 小渡原 こわたはら	こわたいばい
10 鷹原 たかはら	たかんはい
11 馬乗坂 うまのりさか	うまのいざか
12 炭床平 すみとけひら	すんどこびら
13 芦谷 あしだに	あしだん
14 渡ノ上 わたりのうえ	わたいのうえ
小字名	方言名
15 中ノ田 なかのた	なかなた
16 岩坂 いわさか	いわざか
17 平石 ひらいし	ひらいし
18 馬立 うまたて	またて
19 駒替 こまがえ	こまがえ
20 花建 はなで	はなたて
21 井手元 いでもと	いでんもと
小字名	方言名
22 魚踊 うおどり	うおどい
23 土田 どでん	つちた
24 鍋ノ谷 なべのたに	なべんたん
25 炭山 はのやま	すんやま
26 蜂ノ巣 はちのす	はつのす
27 炭床 すみとけ	すんどこ
28 湯ノ谷 ゆのたに	ゆのたん

第2章 人口と集落

大字・上小川

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 牛渡 うしわたし	うしわたい	5 龍川 たきがわ	たつがあ	9 森ノ木 もりのき	もいのつ	13 中屋敷 なかつしき	なかやしつ
2 川跡 かわあと	かあと	6 中洲 なかつしづ	なかつ	10 島田 しまだ	しまだ	14 堀切 ほりきり	ほいきい
3 砂ヶ町 すながまち	すながまつ	7 鶴ノ前 つるのまえ	ついのまえ	11 上川原 かみかわはら	うえんこら	15 神田 かんだ	かんだ
4 船着 ふなづき	ふなつつ	8 有畑 あひばた	あひばた	12 水流 みづなが	つる	16 前田 まえだ	まえだ
29 宮ノ前 みやのまえ	みやんまえ	42 大谷 おおたに	うたん	55 瀬平 せびら	せびら	68 古川 ふるかわ	ふいかわ
30 下川原 しもかわはら	しもんかわばい	43 大谷山 おおたにやま	うたんやま	56 荒平 あらかひら	あらひあ	69 竹川内 たけかわうち	たけんこつ
31 中間脇 なかつまわき	なかつまわき	44 山坂 やまなか	やまさか	57 下口輪野 しもくちわの	しもくつわの	70 下竹川内 しもたけかわうち	しもたけんこつ
32 中間 なかつま	なかつま	45 大原 おおはら	うはい	58 口輪野 くちわの	くつわの	71 五色野 ごしきの	ごしきの
33 小土手 こどて	こどて	46 花房 はなぶさ	はなぶさ	59 坂下 さかした	さかした	72 平木葉 ひらこば	ひらこば
34 市野々 いちのの	いつのの	47 花房谷 はなぶさだに	はなぶさたん	60 下宇野 しもうの	しもうの	73 川原崎 かわらざき	かわらざき
35 内ノ丸 うちのも	うつのまい	48 本屋敷 ほんやうぢき	もとやしき	61 上宇野 かみうの	かんうの	74 池ノ迫 いけのしり	いけんさこ
36 立山 たちやま	たちやま	49 三方辻 さんほうつじ	さんぼつじ	62 荒川内 あらかうち	あらこつ	75 塩売 しおうち	しおうち
37 間庭 まにわ	まにわ	50 池ノ上 いけのうえ	いけんうえ	63 白鳥 しらどり	しらどい	76 広蔵 ひろぞう	ひろぞ
38 大尾ヶ崎 おおいがさき	うおざき	51 片枝 かたえだ	かたえだ	64 黒石 くろいし	くれし	77 秋之元 あきのもと	はつのもと
39 日影 ひかげ	ひかげ	52 開間多 かいまた	かいまた	65 星合原 ほしあいはら	ほつせわあ	78 中ノ脇 なかつまわき	なかつまわ
40 揚野 あげの	あげの	53 有村 ありむら	あいむら	66 夕岸 ゆきし	ゆぎし		
41 大谷口 おおたにぐち	うたんぐつ	54 上ノ園 うえのぞの	かんそん	67 永野 ながの	ながの		

第1編 国分の自然・人口

大字・野口のぐち

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
17 札建 ふだぞう	ふだたて	28 本池 もといけ	もといけ	39 立町原 たちまちがはら	たちよばい	50 大平 おおひら	うひあ
18 宮下 みやした	みやした	29 高田 たかだ	たかだ	40 愛宕山 あたごやま	あたごやま	51 薄迫 うすざき	うつぎこ
19 宮田 みやた	みやた	30 藺田 はなだ	そのだ	41 大竹山 おおたけやま	うだつやま	52 黒岡 くろおか	くろおか
20 薦尻 こもじり	こもじい	31 羽山 はやま	すやま	42 忍ノ尾 しのぶのお	しのつがお	53 小平原 こびらのへ	こびあばい
21 榎川原 えのくはら	えのつこら	32 拝田 おほい	おかんだ	43 新城 しんじょう	しんじよう	54 白小波谷 うすこなみだに	うすこなんだん
22 西堅馬場 にしけんば	にしたてばあ	33 鎮守 おごころ	ちんじゆ	44 鐘突畑 かねつきたばた	かねつばた	55 高田宇都 たかだうと	たかだうと
23 市之丸 いちのまる	いちのまい	34 鬼籠 おにこり	おんごもい	45 小陣 こじん	こじん	56 米迫 よねざき	よねざこ
24 西ノ丸 にしのみる	につのまい	35 五反田 ごたん	ごたんだ	46 柿木谷 かきぎのや	かつのつだん	57 南中牟田 みなななかむた	みなななかむた
25 池ノ上 いけのうえ	いけんうえ	36 下田 しもだ	げでん	47 茶臼ヶ城 ちやうすぎじょう	ちよつがじよ		
26 堀場 ほりば	ほいあげ	37 川添 かわぞえ	かあぞえ	48 梅ヶ谷 うめがたに	うめがたん		
27 大ノ丸 だいのまる	たいのまい	38 犬追馬場 いぬおひば	いけんばあ	49 下梅ヶ谷 しろうめがたに	しもうめがたん		
1 西高城 にしたかじょう	にしたかじよ	6 下桜 しもざくら	しもざくあ	11 高免 こうめん	こうめん	16 大津川原 おおつかわはら	おおつこあ
2 中高城 なかつかじょう	なかつかじよ	7 西桜 にしざくら	にしざくあ	12 榎田 えのきだ	えのつだ	17 八ツ割 やっわり	やつわい
3 荒野 あらの	あれの	8 桜馬場 さくらば	さくらばば	13 池田 いけだ	いけだ	18 小屋後 こやのあと	こやんあと
4 南畑 みなみはた	みなんばた	9 新畑 にいばた	にいばた	14 池袋 いけぶくろ	いけぶくろ	19 長春 ながはる	ながはい
5 東高城 ひがしたかじょう	ひがしばた	10 出口 でぐち	でぐち	15 龍喰 たつばん	たつばん	20 長春川原 ながはるかわけはら	ながはいこあ

大字・府中

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 横手ノ下 よこてのした	よこてんした	9 鼻面 はなづら	はなづら	17 大津古川 おおつふるかわ	おおつふいかあ	25 大津 おおつ	おおつ
2 内堀切 うちほりきり	うちほいきい	10 土器川原 どきがわら	どつがあ	18 気色ノ前 けしきのまえ	けしつのまえ	26 上大津 かみおおつ	かんおおつ
3 川原田 かわはらだ	かわらだ	11 天神坊 てんじんぼ	てんじんぼ	19 向安蛇水流 むこうあんだずい	むこうあんだずい	27 札立 さだち	ふだたて
4 黒田 くろだ	くろだ	12 松元水流 まつもとづい	まつもとづい	20 安蛇水流 あんだずい	あんだずい	28 西古川 さいこかわ	にしふいかわ
5 崎田 さきだ	さつだ	13 鶴川原 つるかわら	つうこあ	21 木屋ノ下 きやのした	こやんした	29 千足橋 せんそくばし	せんそくばし
6 樋ノ下 ひのした	といのした	14 上川原 かみかわら	かんこあ	22 丸池 まるけ	まいけ	30 菅ノ里 すがのさと	すげんさと
7 平田 ひらた	ひらた	15 東皆瀬 ひがしみなせ	ひがつかいぶつ	23 横手尻 よこてしり	よこてじい	31 八反畑 はつたんばた	はつたんばつけ
8 下川跡 しもかわと	しもんかあと	16 森ノ下 もりした	もいのした	24 中須 なかす	なかす	32 馬草田 まぐさだ	まぐさだ

21 下川原 しもかわはら	しもんこあ	28 大丸 だいまる	だいまる	35 江下 たけした	たけした	42 弥勒寺 みろくじ	みろつじ
22 加治木畑 かちきばた	かちつばた	29 後田 うしろだ	うしとだ	36 江後 えご	えご	43 松山 まつやま	まつやま
23 東荒野 ひがしあらの	ひがしあれの	30 東ノ下 ひがしのした	ひがつのした	37 東川原 ひがしかわはら	ひがつのこあ	44 西ノ妻 にしつま	につのつま
24 高見堂 たみみどう	たかみどう	31 後村 うしろむら	うしとむら	38 前田 まへだ	まえだ	45 西ノ上 にしの上	につのうえ
25 西前 にしまえ	にしのまえ	32 五反田 ごたんだ	ごたんだ	39 上川原 かみかわはら	かんこあ	46 野口川 のぐちかわ	のぐつかわ
26 東ノ上 ひがしのうえ	ひがつのうえ	33 四郎前 しろうまえ	しろうまえ	40 カイ廻 かいめぐり	かいめぐい	47 西ノ下 にしした	につのした
27 野田 のだ	のだ	34 島廻 しまめぐり	しまめぐい	41 木ノ下 きのした	きのした	48 駄竹 だちく	だちつ

大字・向花

小字名	方言名
1 七夕田 しやうた	たなばたでん
2 下香田 かみかうだ	しもこうだ
3 上香田 かみかうだ	かんこうでん
4 上筆 かみふで	かみふで
5 下筆 しもふで	しもふで

小字名	方言名
6 南田 みなだ	みなんだ
7 下中台 しもなかい	しもんなかだい
8 上中台 かみなかい	かんなかだい
9 山崎 やまざき	やまさつ
10 流合 りゆうごう	りゆうごう

小字名	方言名
11 後 うしろ	えご
12 天神坊 てんじんぼう	てんじんぼう
13 岡山下 おかやまし	おかやまのした
14 島森 しまもり	しまもい
15 下土器川原 しもどきがわら	しもどつがあら

小字名	方言名
16 土器川原 どきがわら	どつがあら
17 東馬場 ひがしば	ひがつばば
18 向江屋敷 むかえやしき	むかえやしき
19 久保前 くぼまへ	くぼまへ

大字・新町

小字名	方言名
1 三句田 さんくでん	みくでん
2 芝原 しばはら	しばはあ
3 玉丸 たままる	たままい
4 西丸 にしまる	につまい
5 高城畑 たかじょうばた	たかじょうばた
6 北山 きたやま	きたやま
7 上地蔵 かみじぞう	かんじぞう
8 永田 ながた	ながた
9 小城田 こじょうでん	こしろだ
10 一町田 いちちょうでん	いっちよだ

小字名	方言名
11 長見田 ながみだ	ながみだ
12 宮永 みやなが	みやなが
13 姫城田 ひめぎだ	ひめぎだ
14 石橋 いしばし	いしばし
15 古田 ふるた	ふるた
16 黒田 くろだ	くろだ
17 川畑 かわばた	かわばた
18 猪子田 いのこだ	いのこだ
19 早田尻 はやたじり	はやたじり
20 小脇田 こわだ	こわだ

小字名	方言名
21 中台 なかい	なかだい
22 丸田 まるた	まるた
23 山鹿町 やまがまち	やまがまち
24 下崎田 しもさきだ	しもさつだ
25 上崎田 かみさきだ	かんさつだ
26 鹿取 かとり	かとり
27 上柳田 かみやなぎだ	かんやなつだ
28 溝添 みぞぞえ	みぞぞえ
29 竹ノ下 たけのした	たけんした
30 油田 あぶらだ	あぶらだ

小字名	方言名
31 内ノ丸 うちのかまる	うつのまい
32 下川原 しもかわはら	しもんこら
33 上川原 かみかわはら	かんこら
34 高田 たかだ	たかだ
35 高田川原 たかだかわはら	たかだこら
36 島森 しまもり	しまもい
37 八反田 はつたんだ	はつたんだ
38 奈良田 ならだ	ならだ
39 蔵鶴 くらづる	くあずい

第2章 人口と集落

大字・松木 まつき

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 下八反田 しもはつたんだ		5 前川原 まへかわら	まえごあ	9 宮ノ後 みやのうしろ	みやんうしと	13 上八反田 かみはつたんだ	かんはつたんだ
2 松原 まつばら	まつばあ	6 向川原 むこうかわら	むかえごあ	10 西越倉 にしこえくら	にしこえくあ		
3 南前川原 みなまへかわはら	みなんまえごあ	7 加治木畑 かじきばた	かちつばた	11 役田 やくで	やつだ		
4 生道 いけう	いっど	8 宮畑 みやばたけ	みやばたけ	12 鶴園 つるぞの	つるぞん		

大字・福島 ふくしま

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 宮前 みやまえ	みやんまえ	5 広瀬川原 ひろせがわら	ひろせごあ	9 古川 ふるかわ	ふいかあ	13 樋ノ本 といのもと	といのもと
2 横枕 よこまくら	よこまくあ	6 フヤシ付場 ふやしつけば	おやしつけば	10 曾小川 そこがわ	そこがあ	14 新田 しんでん	しんでん
3 山下 やました	やました	7 丸池 まるいけ	まるいけ	11 中川原 なかがわら	なかごあ		
4 塩入川原 しおいりかわら	しおいりこあ	8 有下 ありした	あいした	12 本川 もとかわ	もとかあ		

大字・広瀬 ひろせ

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 垂口 たれくち	たれんくつ	4 塩入 しおいり	しおいり	7 川添 かわそえ	かわそえ	10 中島 なかしま	なかしま
2 南塩入 みなみしおいり	みなんしおいり	5 町ノ後 まちのうしろ	まつのうしと	8 大迫 おおさき	おおさこ	11 上広瀬 かみひろせ	かんひろせ
3 北塩入 きたしおいり	きたしおいり	6 高岸 たかぎし	たかぎし	9 大鳥池 おおとりいけ	うどいいけ	12 川原 かわはら	こあ

第1編 国分の自然・人口

大字・湊

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 宝社田 ほうしやたん	ほうしやでん	9 鎮田 ちんてん	ちんでん	17 新田 しんでん	しんでん	25 西塩入 にしおいら	にししおい
2 豊地 とよち	とよち	10 大前 だいこまえ	おおくつまえ	18 沖田森 おきたもり	おつたもい	26 満沙 みんさ	みつしお
3 油田 あぶらだ	あぶらでん	11 本船手 もとふなで	もとふなで	19 前田 まえだ	まえだ	27 宝浜 たからば	たからはま
4 春田 はるた	はいた	12 砂ヶ町 すなごまち	すながまつ	20 入船 いりふね	いいふね	28 竿富 さおどめ	さおどめ
5 長田 ながた	ながた	13 十二割 じゅうにわり	じゅうにわい	21 湊口 みなとぐち	みなとぐつ	29 馬肥 ばひ	ばひ
6 迫田 さだ	さこた	14 国丸 くにまる	くにまる	22 浜田 はまだ	はまだ	30 廣瀬川原 ひろせかわら	ひろせかわら
7 新地 しんち	しんち	15 末広 すえひろ	すえひろ	23 水戸口 みづとぐち	すどぐつ		
8 源ヶ島 げんがしま	げんがしま	16 羽白 はじろ	はじろ	24 西田 にしだ	にしだ		

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
13 山下 やました	やました	20 東西山のいち うらほ	ひがつにしやまのいち	27 宮前 みやまえ	みやんまえ	34 山口前 やまぐちまえ	やまぐちまえ
14 羽子田 はねだ	はねだ	21 内浜 うちはま	うつはま	28 山之口下 やまのくちした	やまぐつした	35 宮前五割目 みやまごわいめ	みやんまごわいめ
15 南京塚 みなみやうづか	みなみやうづか	22 東浜 ひがしはま	ひがつはま	29 西山下 にしやました	にしやまんした	36 山ノ口沖 やまのくちまき	やまぐつおき
16 今村 いまむら	いまむら	23 東山 ひがしやま	ひがつやま	30 小波止一番 こばといちばん	こばといちばん	37 小波止沖 こばとおき	こばとおき
17 飯平畑 ひがひらた	ひがつひらはた	24 飯屋村下 いひやむらした	かいやむらした	31 山之口下二割目 やまのくちしたにわりめ	たにわいめ	38 小波止 こばと	こばと
18 東一本松 ひがしいっほんまつ	ひがしいっほんまつ	25 昆沙門前 びしやもんまえ	びしやもんまえ	32 昆沙門下三割目 びしやもんしたさんわりめ	さんわいめ	39 西山ノ下 にしやまのした	にしやまんした
19 西山ノ一 にしやまのいち	にしやまのいち	26 会所ノ下 かいしよんした	かいしよんした	33 会所沖 かいしよおき	かいしよおき		

第2章 人口と集落

大字・上井
うわい

大字・川内 かわうち	大字・川内 かわうち	大字・川内 かわうち	大字・川内 かわうち
1 水ノ下 みずのした みつのした 2 一條 いちじょう いちじゆ 3 出水田 いずみだ いずんだ 4 耳土 みみち あまつち 5 平栢 ひらがき ひらかこい 6 四反田 よんだ したんだ 7 高柳 たかやなぎ たかやなつ 8 桑原 くわはら くわばあ 9 引田 ひきた ひつた 10 溝添 みぞぞえ みぞぞえ 11 榎脇 えのわき ひわつ 12 恋ノ隈 こいのくま こいのくま 13 美ノ前 みのまえ みのまえ	14 柞木田 はしぎきだ はしのきだ 15 段ノ上 だんのうえ だんのうえ 16 高宇都 たかうと たこた 17 内門 うちかど うつかど 18 前田 まへだ まえだ 19 中島 なかしま なかしま 20 川原 かわはら こあ 21 向川原 むかうがはら むかえごあ 22 月木 つぎ ちつのき 23 岩崎 いわさき いわさつ 24 井手ノ神 いでんかみ いでんかん 25 芦谷川 あしだにがわ あしだんこあ 26 井手川原 いでんかわら いでんこあ	27 三月田 みかつぎだ さんがつでん 28 二月田 ふたつきだ にがつでん 29 芝越 しばごえ しばごえ 30 小丸 こまる こまい 31 島回 しまわい しまめぐい 32 楠ケ宇都 くすがうと くすがうと 33 牛堀 うしほり うしほい 34 松笠 まつがさ まつかさ 35 星隈 ほしき ほしくま 36 大丸 だいまる だいまる 37 鳴瀬戸 なるせと ないせど 38 穴畑 あなばた あなばつけ 39 中牟田 なかつた なかむた	40 黒石川 くろいしがわ くえしがあ 41 葛蒲ケ迫 しよがたん しよがたん 42 宮田 みやた みやた 43 永迫 ながさこ ながさこ 44 緑山 みどりやま みどいやま 45 豆打 まめうち まめうつ 46 宮ノ前 みやのまえ みやんまえ 47 廣見 ひろみ ひろん 48 宮ノ谷 みやのたに みやんたん 49 勢田谷 せただに せたんたん 50 川内 かわうち こつ 51 瀬戸 せと せど 52 大平 おほひら うひや
1 八島 やしま やつしま 2 鉢久保 はちくぼ はちくぼ	3 里馬渡 さとまわし さとんまわし 4 上川原 かみかわら かんこあ	5 古川 ふるかわ ふいかあ 6 高日山 たかひやま こひつやま	7 山崎 やまざき やまさつ 8 一町田 いちまちだ いつちよだ

小字名	方言名
9 新田 しんでん	しんでん
10 村前 むらんまえ	むらんまえ
11 芦原 あしはら	あしはら
12 三反田 さんたんだ	さんたんだ
13 御祭田 おまついでん	おまついでん
14 宇都口 うとぐつ	うとぐつ
15 立石 たていし	たていし
16 見埴 みえり	みえり
17 見埴村崎 みえりむらさき	みえりむらさつ
18 見埴前 みえりまへ	みえりのまえ
19 石坂 いしがき	いっさか
20 鎮守尾 ちんじゅお	ちんのお
21 鍋迫 なべこ	なべさこ
22 鎌磨 かまこぎ	かまとつ
23 西原 にしはら	にしはい
24 堂ケ尾 どうがお	どうがお
25 十文字 じゅうもんじ	じゅうもし
26 田吹 たぶき	たぶつ
27 駒迫 こまごし	こまざこ
28 東原 ひがしはら	ひがっぱい
小字名	方言名
29 面ノ下 めんノした	めんノした
30 仕明田 しあけだ	しあけだ
31 廣田 ひろた	ひろた
32 後川内 うしろかわうち	うしとごつ
33 川間 かわま	かあま
34 五郎田 ごろうだ	ごおだ
35 中野 なかの	なかの
36 見次田 みつだ	みつだ
37 土田 つちだ	つつだ
38 岩穴口 いわあなぐち	いわあなぐつ
39 道添 みつぞえ	みつぞえ
40 高尾 たかお	たかお
41 野平 のひら	のびあ
42 宮田 みやた	みやた
43 街道口 けどうち	けどぐつ
44 立坂 たちさか	たつさか
45 船ケ山 ふねがやま	ふねがやま
46 牛堀 うしほり	うしほり
47 芝ケ尾 しばがお	しばがあ
48 水流 みづなが	みづなが
小字名	方言名
49 志米ノ元 しめのもとの	しめんもと
50 螢道 ほたるみち	ほたいみつ
51 掛橋 かけはし	かけはし
52 口輪野 くちわの	くつばの
53 千本松 せんぼんまつ	せんぼんまつ
54 駒ケ谷 こまのや	こまんたん
55 野坂谷 のさかのや	のさかたん
56 陣ノ口 じんのかち	じんのくつ
57 子落面 こおとしめん	こおとしめん
58 大迫 おおさこ	おおさこ
59 平山原 ひらやまばい	ひらやまばい
60 渡瀬原 わたせばい	わたせばい
61 内野々原 うちののばい	うつののばい
62 坂下 さかした	さかした
63 前谷 まへだに	まえんたん
64 山神ノ下 やまがみのした	やまかんのした
65 内野々 うちのの	うつのの
66 間伏谷 まふしたに	まふしたん
67 黒石ケ谷 くろしがに	くえしがたん
68 籠山 かごやま	かごやま
小字名	方言名
69 銅山ノ下 どうざんのした	どうざんのした
70 片茂 かたしげ	かたしげ
71 前坂 まえさか	まえさか
72 宮ノ元 みやのもとの	みやもと
73 高田川原 たかだかわはら	たかだこあ
74 渡瀬 わたせ	わたせ
75 下川原 しもかわはら	しもんこあ
76 寺ケ字都 てらがうと	てらがうと
77 平山 ひらやま	ひらやま
78 廣見 ひろみ	ひろみ
79 阿摩里 あまべり	あまべり
80 赤弁当 あかべんとう	あかべんと
81 汲川内 くみかわうち	くみかあつ
82 岩下 いわした	いわした
83 柳田 やなぎだ	やなぎだ
84 中牟田 なかむた	なかむた
85 中子落 なかこおとし	なかこおとし
86 村下 むらした	むらんした
87 子落 こおとし	こおとし
88 富松 とみまつ	とみまつ

第2章 人口と集落

大字・敷根

小字名	方言名
1 西ノ口	にしのかつ
2 塩入	しおいり
3 松崎	まつさき
4 島田	しまだ
5 剣菌	つるつぞん
6 郷ノ丸	ごうのまい
7 剣崎	つるつざき
8 剣平	つるつびら
小字名	方言名
9 大儀庵	たいぎあん
10 赤川	あかがあ
11 大坪	おおつぼ
12 堀場	ほいば
13 御法道	ごふど
14 西上	にしあげ
15 上前	あげまえ
16 節句田	せつくでん
小字名	方言名
17 島前	しまんまえ
18 忍田	しのんだ
19 大王坂	でござか
20 鞍掛	くらがけ
21 平田	ひらた
22 中重	なかしげ
23 駒方	こまがた
24 鷹取	たかとい
小字名	方言名
25 瀧ノ下	たつのした
26 湯田	ゆだ
27 大丸	だいまる
28 門倉	かどくら
29 小城	こじよう
30 川内	かわうち
31 彦田	ひこだ
32 川原田	かわはらだ

89 野坂	のさか
90 牛道	うつみつ
91 流合	ながいえ
92 吉野元	よつのもと
93 柳元	やなつのもと
94 牛ノ糞	うしのくそ
95 葛蒲之元	しょうぶのもと
96 龍亭屋敷	りゆうていやしつ
97 仁田原	にたばい
小字名	方言名
98 五戸口	ごとくつ
99 猿ノ木場	さいのこば
100 養掛	みのかけ
101 荒田	ああた
102 後迫	うしとぎこ
103 松下	まつした
104 宇都	うと
105 東芋ヶ迫	ひがしいもがさこ
106 城ヶ尾	じようがお
小字名	方言名
107 瀬戸下	せどした
108 西芋ヶ迫	にしいもがさこ
109 荒谷	あらたん
110 駒返	こまげえい
111 後見帰	うしとみけい
112 真谷	またん
113 栗平	くいびあ
114 板川内	いたんこつ
115 山神前	やまんかんまえ
小字名	方言名
116 小松原	こまつばあ
117 本戸	ほんど
118 芝原	しばあ
119 本谷口	ほんたんぐつ
120 松合谷	まつばえだん
121 七湊	なみなと

第1編 国分の自然・人口

大字・下井

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
1 大丸 だいまる	だいまる	13 上井下 うわいした	おえんした	25 拾六 じゅうろく	じゅうろつ	37 松山 まつやま	まつやま
2 園田 うゑだ	そのだ	14 常見 じょうけん	つねみ	26 長春迎 ながはるべ	ながはるべ	38 前川原 まへがはら	まえんこあ
3 鳴子田 なるこだ	なるこだ	15 東八坂 ひがしやしか	ひがつやさか	27 会田 かいだ	かいだ	39 名越川 なこしがわ	なこしがわ
4 神楽作 かぐらさつ	かぐらさつ	16 田中 たなか	たなか	28 柳田 やなぎだ	やなつだ	40 東前川原 ひがしまえがはら	ひがつまえんこあ
5 塚丸 つかまる	つかまい	17 田中前 たなかまえ	たなかまえ	29 萩原 はぎはら	はぎはら	41 下川原 しもかわはら	しもんこあ
6 八坂 やしか	やさか	18 節句田 せつくでん	せつくでん	30 六ノ坪 ろくのつぼ	ろつのつぼ	42 外川原 そとかわはら	そとんこあ
7 東春田 ひがしはるた	ひがしはつだ	19 内ノ丸 うちのみる	うつのまい	31 権現水流 ごんげんすい	ごんげんすい	43 東川原 ひがしかはら	ひがつこあ
8 西春田 にしはるた	にしはつだ	20 権現園 ごんげんぐ	ごんげんえん	32 片山 かたやま	かたやま	44 川原田 かわはらだ	こあだ
9 源ヶ島 げんがしま	げんがしま	21 迫田 おとだ	さこだ	33 鞆ヶ瀬戸 たづがせと	さやがせど	45 川跡 かわあと	かあと
10 出水田 いずみだ	いずんだ	22 二反田 ふたんだ	にたんだ	34 中川 なかがわ	なかがわ	46 古川 ふるかわ	ふいかわ
11 銅田 どうた	どうた	23 辯入 べんにゅう	べんにゆ	35 花園 はなぞん	はなぞん	47 前平 まえへい	まえんひあ
12 上出水田 うえいずみだ	うえいずんだ	24 石橋 いしばし	いしばし	36 前川原塩入 まへがはらしおいいり	まえんこあしおいい	48 鶴崎 つるさき	ついがさつ
33 東牟田 ひがしむた	ひがしむた	37 柵木山 くすもぎやま	くぬつやま	41 大迫 おおさこ	おおさこ	45 前田 まえだ	まえだ
34 下小牧 しもこまつ	しもこまつ	38 馬道 まみち	まみち	42 宇都 うと	うと	46 浜田 はまだ	はまだ
35 上小牧 かみこまつ	かんこまつ	39 羽堂山 はとうやま	はどやま	43 磯平 いそひら	いそびあ		
36 向ヶ平 むかいがひら	むこうがひら	40 垂水 たみづ	たいみつ	44 迫田 おとだ	さこだ		

大字・上之段うえのだん

133

小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名	小字名	方言名
21 尻勝目 しりかつめ	しがつめ	35 大丸 だいまる	おおまい	49 耳取 みみとり	みんない	63 鬼山段 きやまだん	きやまだん
22 猫瀬 ねこせ	ねこせ	36 松ヶ迫 まつがせき	まつがさこ	50 石塚 いしづか	いつつか	64 都越 みやこえ	みやこえ
23 松坂 まつさか	まつさか	37 西ノ口 にしのかぐち	につのくつ	51 イラヶ谷 いらがたに	いらがたん	65 惣陣 そうじん	すじん
24 東原 ひがしはら	ひがつばい	38 御手洗水 ごてあらいみず	おてあらいみつ	52 マブシ谷 まぶしだに	まぶしだん	66 段中 だんちゆう	だんちゆう
25 西原 にしはら	につばい	39 折口 おりぐち	おいぐつ	53 白尾谷 しろおに	しらおだん	67 鎮田原 ちんでんばら	ちんでんばい
26 中原 なかつはら	なかんはい	40 木場 きば	こば	54 赤松 あかまつ	あかまつ	68 椎木迫 しいぎせき	しのつぎこ
27 水ヶ迫 みずがせき	みつがさこ	41 豆付 まめつき	まめつけ	55 棕櫚段 しゅろだん	しゅろんだん	69 葎ヶ渡 つげわたし	つげわたし
28 坂面 さかめん	さかんめん	42 集り あつまり	あつまい	56 珍田 ちんた	ちんでん	70 萩山 はぎやま	はつやま
29 琵琶甲 びわこう	びわんく	43 丸尾 まるお	まるお	57 柳ノ谷 やなぎのたに	やなつだん	71 片城 かたしろ	かたしと
30 堂ヶ尾 どうがお	どがお	44 永山 ながやま	ながやま	58 塚脇 つかわき	つかわき	72 小松原 こまつばら	こまつばい
31 胡摩迫 こまごせき	ごまがさこ	45 水堀 みづほり	みつほい	59 井戸ノ下 いどのした	いどんした	73 秋之助 あきのすけ	あつのつけ
32 藤ヶ尾 ふじがお	ふつのお	46 札ヶ迫 さたがせき	ふだがさこ	60 篠ヶ原 しのがはら	しのがはい	74 谷尻 たにじり	たんじい
33 後川内 うしろかわうち	うしとこつ	47 倉ヶ宇都 くらがうと	くあがうと	61 堂田 どうでん	どでん		
34 岩ヶ崎 いわがさき	いわがさつ	48 入佐 いりさ	いつさ	62 竹渡 たけわた	たけわたい		

住居表示地域の土地の地番の表示は、大字が新しい町名となり、小字は無くなり、地番は元のまま使用し、

(例)

大字

小字

番地

住所表示前

府中

下川跡

四七八

住所表示後

中央三丁目

四七八

のようになる。

住居表示地域については、住居表示前的大字・小字名の一覧表を以降に掲載するとともに、小字等を図示す

る。

〈住所表示改正後〉
名波町 (図2-2)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 北山元 きたやましと	きたやんもと	6 鐘突畑 かねつきた	かねちつばた	11 東戸崎 ひがしとぎ	ひがつとぎつ	16 一丁田 いちちやうでん	いつちようでん
2 北大坪 きたおおつぼ	きたおつぼ	7 大平 うひや	うひや	12 城ノ下 そのした	そのした	17 鍋田 なべた	なべた
3 南大坪 みなみおおつぼ	みなんおつぼ	8 薄迫 うすさこ	うつざこ	13 塚丸 つかまる	つかんまい	18 砂走 すなばしり	すなばしい
4 北島 きたしま	きたじま	9 北六番 きたろくばん	きたろつばん	14 柳田 やなだ	やなつでん		
5 柏木 かしわぎ	かつわつ	10 南六番 みなみろくばん	みなんろつばん	15 小坂本 こさかもと	こさかもと		

山下町 (図2-2)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 平前 ひらまえ	ひらまえ	6 羽山 はやま	すやま	11 五反田 ごたんだ	ごたんだ	16 六反田 ろくたんだ	ろつたんだ
2 八反田 はつたんだ	はつたんだ	7 拜田 おみだ	おかんだ	12 米迫 よねざこ	よねざこ	17 大國前 おおくにまえ	おおくにまえ
3 七夕田 なつた	たなばただ	8 山下 かみざ	やました	13 高田宇都 たかだうと	たかだうと	18 水之下 みずのした	みつのした
4 鬼籠 おにこもり	おにごもい	9 川添 かわぞえ	かあぞえ	14 九ノ坪 くのつぼ	くつのつぼ		
5 鎮守 ちんじゆ	ちんじゆ	10 下田 しもじめ	げでん	15 鮎坪 あゆつぼ	あいつぼ		

中央一丁目 (図2-2)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 九万田 くまんた	くまんでん	7 小路 こみち	こみつ	13 小丸 こまる	こまい	19 立町原 たちまちばら	たつちよばい
2 鳥越 とろこ	といごえ	8 西馬場 にしば	につばあ	14 堅馬場 かたば	たてばあ	20 梨子ヶ迫 なしがき	なつがざこ
3 三日月 みかづき	みかちつ	9 中川原 ななかわら	なかごら	15 蛭田 ひるた	ひるた	21 下川跡 しもかわあと	しもかあと
4 山崎 やまざき	やまさつ	10 鍛冶屋馬場 かじやば	かんじやばあ	16 東馬場 ひがしば	ひがつばば		
5 平玉 ひらたま	ひらたま	11 久保前 くぼまえ	くぼまえ	17 上車田 かみくらだ	うえくいまだ		
6 西之馬場 にしのば	につのばあ	12 西堅馬場 にしだてば	にしたてばあ	18 愛宕山 あたごやま	あたごやま		

中央二丁目 (図2-2)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 愛宕山 あたごやま	あたごやま	4 鐘突畑 かねつぎはた	かねちつばた	7 古屋敷 ふるやしき	ふるやしつ	10 西戸崎 にしとぎ	にしとぎつ
2 御内 おきと	おさと	5 上車田 かみくらだ	うえくいまだ	8 古柳 ふるやなぎ	ふるやなつ	11 北龍王 きたりゅうおう	きたづお
3 犬追馬場 いぬおいはば	いけんばあ	6 東馬場 ひがしば	ひがつばば	9 妻山元 つまやまもと	つまやまもと	12 北山元 きたやまもと	きたやんもと

中央三丁目 (図2-2・2-4・2-8)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 下川跡 しもかわあと	しもかあと	3 小丸 こまる	こまる	5 道場下 どうじょうした	どじよしした	7 若宮田 わかみやた	わかみやだ
2 四反田 したんた	したんだ	4 蛭田 ひるた	ひるた	6 川跡 かわあと	かあと	8 中島 なかしま	なかしま

中央四丁目 (図2-2)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
9 西中島 にしなかしま	にしなかじま	15 東豎馬場 ひがしうてば	ひがつたてばあ	21 豎馬場 たてばあ	たてばあ	27 東郷飯屋 とうごうかりや	とうごうかりや
10 清水 しみず	しみず	16 町ノ下 ましのした	まつのした	22 中川原 なかがわら	なかごあ	28 土器川原 どきがわら	どきがわら
11 向川原 むこうがわら	むこうごあ	17 本町口 ほんまちぐち	ほつまつぐつ	23 小路 こみち	こみつ	29 鼻面 はなづら	はなづら
12 西中川原 にしなかがわら	にしなかごあ	18 西町 にしまち	につまつ	24 東馬場 ひがしば	ひがつばば	30 島森 しまもり	しまもり
13 久保前 くぼまへ	くぼんまえ	19 納屋下 なやした	なやんした	25 江後 えご	えご	31 天神坊 てんじんぼう	てんじんぼう
14 西豎馬場 にしなかしま	につたてばあ	20 中町 なかつまち	なかつ	26 椅土手 いどて	よいどて	32 宮ノ後 みやのうしろ	みやんうしろ
1 中馬場 なかつば	なかつばあ	8 東唐人町 ひがしとうじんまち	ひがしとうじんまつ	15 北伊勢 きたいせ	きたいせ	22 川添 かわぞえ	かあぞえ
2 後馬場 うしろば	うしとばあ	9 前武元 まへたけもと	まえたけもと	16 南大坪 みなみおおつば	みなんおおつば	23 北島 きたじま	きたじま
3 蛸田 たかづだ	めめつた	10 北龍王 きたりゅうおう	きだづおお	17 東ノ妻 ひがしのつま	ひがつのつま	24 九ノ坪 くのつば	くのつば
4 武元 たけもと	たけもと	11 中龍王 なかりゅうおう	なかつおお	18 迫田 さきだ	さきだ	25 古柳 ふるやなぎ	ふるやなぎ
5 中車田 なかつくるま	なかくいまだ	12 南龍王 みなみりゅうおう	みなんづおお	19 瀬戸口 せとぐち	せとぐつ	26 北大坪 きたおおつば	きたおおつば
6 西唐人町 にしとうじんまち	にしとうじんまつ	13 北山元 きたやまもと	きたんやまもと	20 本池 もとけ	もといけ	27 納屋下 なやした	なやんした
7 中唐人町 なかつとうじんまち	なかつとうじんまつ	14 南山元 みなみやまもと	みなんやまもと	21 松木田 まつきだ	まつきだ	28 南島 みなみしま	みなんしま

中央五丁目(図2-4)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 中川原 なかがわら	なかごあ	5 向川原 むかうがわら	むかえごあ	9 宮畑 みやはた	みやばたけ
2 西中川原 にしなかがわら	につなかごあ	6 松木川原 まつきがわら	まつごあ	10 宮ノ後 みやのうしろ	みやうしと
3 納屋ノ下 なやのした	なやんした	7 加治木畑 かじきばた	かちつばた	11 清水 しみず	しみつ
4 鍋屋下 なべやした	なべやんした	8 加治木町 かじきまち	かちつまつ	12 西中島 にしなかじま	にしなかじま
				13 江後 えご	えご
				14 橋土手 はしどて	よいどて

中央六丁目(図2-4)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 本池 もとけ	もといけ	5 中唐仁町 なかつとうじんまち	なかつとうじんまつ	9 下栗原 しもくりはら	しもくいはあ
2 瀬戸口 せとぐち	せとぐち	6 西唐仁町 にしとうじんまち	にしとうじんまつ	10 東堅馬場 ひがしたくまば	ひがつたてばあ
3 迫田 きこだ	さこだ	7 町ノ下 まちのした	まつのした	11 西ノ丸 にしのもる	につのまい
4 東唐仁町 ひがしとうじんまち	ひがしとうじんまつ	8 上栗原 かみくりはら	かんくいはあ	12 市之丸 いちのまる	いちのまい
				13 屋敷形 やしがた	やしつがた
				14 常盤 とこわ	ときわ
				15 納屋ノ下 なやのした	なやんした
				16 中川原 なかがわら	なかごあ

野口町(図2-5)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 加治木畑 かじきばた	かちつばた	5 西前 にしまえ	にしのまえ	9 大丸 だいまる	だいまる
2 東荒野 ひがしあらの	ひがしあれの	6 東前 ひがしまえ	ひがしまえ	10 西ノ妻 にしつま	につつま
3 野口畑 のくちばた	のくつばた	7 東ノ上 ひがしのうえ	ひがつのうえ	11 西ノ上 にしの上	につのうえ
4 前畑 まえばた	まえんばた	8 野田 のだ	のだ	12 野口川原 のくちがわら	のくつかわら
				13 前田 まへだ	まへだ

野口東 (図2-4)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 後田 うしろだ ひがしのした	うしとだ ひがつのした	3 後村 うしろむら しまめぐり	うしとむら しまめぐい	5 江後 えご ひがしかわはら	えご ひがつのこあ	7 竹下 たけした ゆいどて	たけんした よいどて
2 東ノ下		4 島廻		6 東川原		8 橋土手	

野口北 (図2-4)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 大丸 だいまる むこうがわ	だいまる	3 松山 まつやま むこう妻	まつやま むこうのつま	5 野口川原 のぐちがわら むこうあんたづる	のぐつかわら むこうあんたづい	7 安蛇水流 あんだづる ふいかわ	あんだづい ふいかわ
2 向川原		4 西ノ妻		6 向安蛇水流		8 古川	

城山町 (図2-6)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 中央一丁目 ちゅうおういつちうめ いっちゅうおうめ	いっちゅうおうめ	2 愛宕山 あたごやま	あたごやま	3 大竹山 おおたけやま	うだつやま	4 上モス尾 かみもすお	かんもすお
2 愛宕山							

松木町 (図2-5)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 境畑 さかいばた ひがしたかみどう	さかいばた	3 藪ノ下 やぶのした べつぷむえ	やぶした べつぷむこ	5 土取窪 つちとりくぼ やっぱら	つつといくぼ やつぱい	7 高見堂 たかみどう きいればた	たかんど きいればた
2 東高見堂		4 別府向		6 八ツ原		8 喜入畑	

旧小字名	方言名
9 鶴ノ前 つるのまえ	つるんまえ
旧小字名	方言名
10 前田 まえだ	まえだ

松木東 (図2-4)

旧小字名	方言名
1 西越倉 にしえくら	にしこえくあ
旧小字名	方言名
2 越倉 こえくら	こえくあ

福島一丁目 (図2-5)

旧小字名	方言名
1 宮の前 みやのまえ	みやんまえ
2 北屋敷添 きたやしつけえ	きたやしつぞえ
3 土取窪 つちとりくぼ	つつといくぼ
旧小字名	方言名
4 上土取窪 かみつちとりくぼ	かんつつといくぼ
5 道北 みちきた	みつきた
6 中棚辺 なかたなべ	なかたなべ
旧小字名	方言名
7 五社堀 ごしゃぼり	ごしやほい
8 京塚 きやうづか	きようづか
9 上村 かみむら	うえむあ
旧小字名	方言名
10 下村 しもむら	しもむあ
11 敷ノ下 敷のした	やぼした
12 八ツ原 はつはら	やつつばい

福島二丁目 (図2-5)

旧小字名	方言名
1 横枕 よこまくら	よこまくあ
2 西山下 にしやまた	につやまんした
3 道北 みちきた	みつきた
旧小字名	方言名
4 海老原野 えびはらの	えつばあの
5 中棚辺 なかたなべ	なかたなべ
6 二丁堀 にちようぼり	にちようぼい
旧小字名	方言名
7 一丁堀 いちちようぼり	いちちようぼい
8 雷迫 かみなりぞこ	かんないざこ
9 南屋敷添 みなやつけえ	みなんやしつぞえ
旧小字名	方言名
10 上村 かみむら	かんむあ
11 下村 しもむら	しもむあ
12 西正寿庵 にししょうじゅあん	にししょうじゅあん

広瀬一丁目 (図2-3)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 北大野原 きたおおのほら	きたうのばい	4 東一本松 ひがしいつぽんまつ	ひがつついっぽんまつ	7 西七代堀 にしなだいぼり	につひつちよばい	10 西山 にしやま	につやま
2 南大野原 みなみおおのほら	みななんうのばい	5 西一本松 にしいつぽんまつ	についっぽんまつ	8 高橋畑 たかはしはた	たかはしはた		
3 西平畑 にしひらはた	につひらばた	6 東七代堀 ひがしなだいぼり	ひがつつちよばい	9 東西山 ひがしにしやま	ひがつにしやま		

福島三丁目 (図2-4)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 福瀬川原 ふせがわら	ふつせこあ	5 川跡 かわと	かあと	9 有畑 ありはた	あいはた	13 向川原 むかうがわら	むこんこあ
2 木下 きした	きした	6 本川 もとかわ	もとかあ	10 生道 いくどう	いっど	14 古屋敷 ふるやしき	ふいやしつ
3 有下 あした	あいした	7 樋ノ本 ひのほん	といのもと	11 前川原 まかかわら	まえこあ	15 下川跡 しもかわと	しもかあと
4 西古川尻 にしふるかわじり	につふいかあじい	8 西川跡 にしかわと	につかあと	12 大道之下 おおみちのした	うみつのした		
13 白駄泉 はくだせん	はくだせん	16 北大野原 きたおおのぼる	きたうのばい	19 西平畑 にしひらはた	にしひらばた	22 西七代堀 にしちだいぼり	につひつちよばい
14 狐迫 きつせま	きつせま	17 南大野原 みなみおおのぼる	みななんうのばい	20 西一本松 にしいつぽんまつ	にしいつぽんまつ		
15 植木 うえき	うえき	18 竹山 たけやま	たけやま	21 東七代堀 ひがしなだいぼり	ひがつつちよばい		

広瀬二丁目(函2-3)

1 山下 やました	やました
2 羽子田 はねだ	はねだ
3 桂松 かつらまつ	かつらまつ
4 南京塚 みなんきようづか	みなんきようづか
5 今村 いまむら	いまむら
6 東平畑 ひがしひらばた	ひがしひらばた
7 竹山 たけやま	たけやま
8 東一本松 ひがしいつぽんまつ	ひがしいつぽんまつ
9 国丸 くにまる	くにまる
10 東南原 ひがつみなんはい	ひがつみなんはい
11 西南原 にっみなんはい	にっみなんはい
12 堀内 ほりうち	ほりうち
13 北京塚 きたきようづか	きたきようづか
14 尾立 おだて	おだて
15 府木 たふき	たつのつ
16 東正寿庵 ひがししょうじゅあん	ひがししょうじゅあん

広瀬三丁目(函2-3)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 桂松 かづらまつ	かつらまつ	5 高橋畑 たかはしばた	たかはしばた	9 寺後 てらうしろ	てらうしと
2 南京塚 みなみやうづか	みなみやうづか	6 東西山 ひがしにやま	ひがしにやま	10 山蔵後 やまぐらうしろ	やまぐらうしと
3 今村 いまむら	いまむら	7 後町通 うしろまちどおり	うしろまちどおり	11 宮ノ後 みやのうしろ	みやんうしと
4 東一本松 ひがしいっぽんまつ	ひがしいっぽんまつ	8 西本通 にしほんどおり	にしほんどおり	12 山ノ後 やまのうしろ	やまんうしと
				13 山之口 やまのくち	やまにくつ
				14 会所元 かいしよもと	かいしよもと

広瀬四丁目(図2-3)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 垂口 うしろまちどおり	たれんくつ	4 内浜 うちなはま	うつはま	7 東本通 ひがしほんどおり	ひがつほんどおい	10 飯屋村 かひやむら	かいやむら
2 後町通 うしろまちどおり	うしとまつどおい	5 蔵ノ後 くらのはしろ	くらんうしと	8 中本通 なかほんどおり	なかほんどおい	11 西田 にしだ	につだ
3 西本通 にしほんどおり	につぽんどおい	6 蔵馬場 くらば	くらばば	9 下町通 しもまちどおり	したまつどおい		

向花町 (図2-17)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 平田 ひらた	ひらた	3 東馬場 ひがしばば	ひがつばあ	5 大坪 おおつば	おおつば
2 山崎 やまざき	やまさつ	4 茶屋上通 ちやうじやうと	ちやんうえどおい	6 西馬場 にしばば	につばば
				7 八反畑 はつたんぱたけ	はつたんぱつけ
				8 下川跡 しもかわあと	しもかあと

府中町 (図2-17)

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 亀ノ里 かめののり	かめんさと	6 鶴ノ羽 つるのうは	ついのは	11 内古川 うちふるかわ	うつふいかあ
2 鶴ノ里 つるののり	ついのさと	7 森ノ下 もりのかした	もいのした	12 月ノ木 つきぎ	つきのき
3 鶴ノ前 つるのまえ	ついのまえ	8 東皆瀬 ひがしけいせ	ひがつかいふつ	13 鼻面 はなづら	はなづら
4 塚脇 つかわき	つかわつ	9 松元水流 まつもとづる	まつもとづい	14 亀ノ甲 かめのこう	かめんこ
5 石園 いしぞの	いっぞん	10 土器川原 どきがわはら	どきがわら	15 菅ノ里 すがののり	すげんさと
				16 千足橋 せんそくばし	せんそくばし
				17 鶴川原 つるかわはら	ついでら
				18 岡山下 おかやました	おかやまにした
				19 西馬場 にしばば	につばば

剣之宇都町

旧小字名	方言名	旧小字名	方言名	旧小字名	方言名
1 初起田 はつきでん	ほつきでん	3 中ノ迫 なかのしど	なかんさこ	5 万膳田 まんぜんだ	まんぜんだ
2 カネツキ	かねつつ	4 剣之宇都 けんのおと	けんのうと		

土地台帳の字名は、明治の地租改正に当たって、字の統廃合や新名称の付与などの作業が行われたので、漢字の字名とその読み方について矛盾するものもいくらかある。現在わかっている範囲内で、それらを次の掲げたがさらに今後の調査が必要と思われる。

大字	〔現台帳〕 漢字	フリガナ	正しいと 思われる 字名
重久	桶口	ヒグチ	樋口
〃	本持	キモチ	木持
郡田	草薨ヶ迫	トコロガサコ	草薨ヶ迫
台明寺	蓮堂	ハスドウ	蓮堂
川原	平木葉	ヒラコバ	平木場
上小川	羽山	スヤマ	須山
広瀬	府木	タブノキ	榊木
〃	柱松	カツラマツ	桂松
上井	耳土	アマツチ	(余リツチ)
上之段	マブシ谷	マブシダニ	間伏谷

補説

(1) 昭和二十四年(一九四九)米国コロンビア大学教授
シャウプらの日本税制調査団が出した勧告。これをも
とに大戦後の日本の税制改革がされた。

第2章 人口と集落



図2-2 昭和49年7月1日付 住居表示地域の子調査図
(中央一〜四丁目・名波町・山下町)

《住居表示案内図》

(広瀬・湊の各一部)

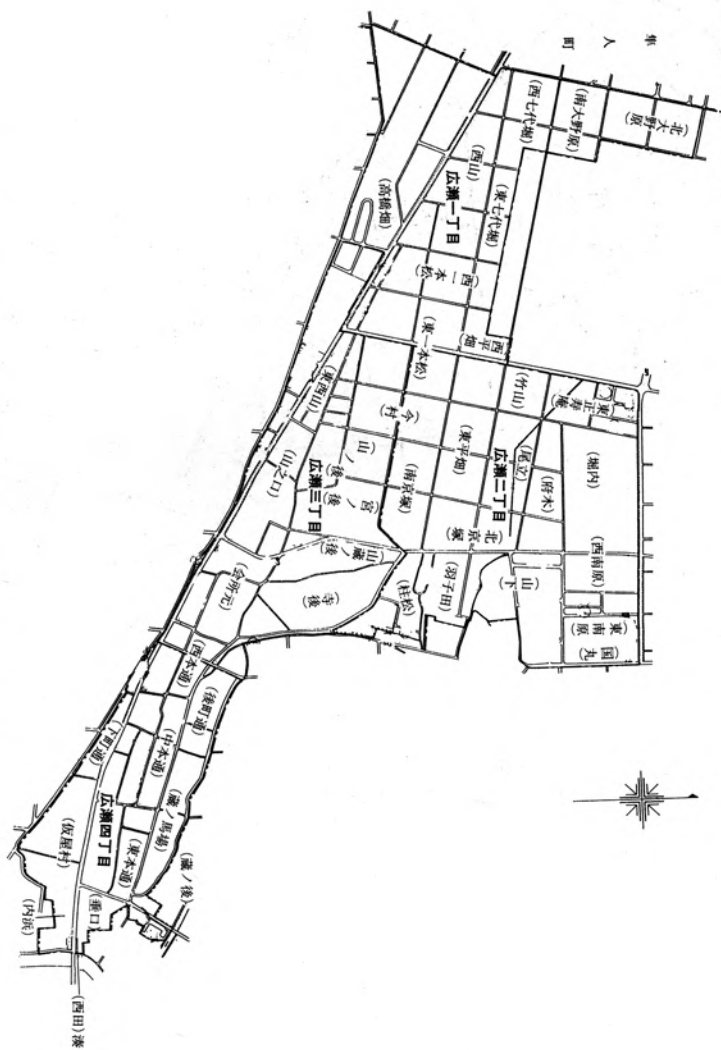
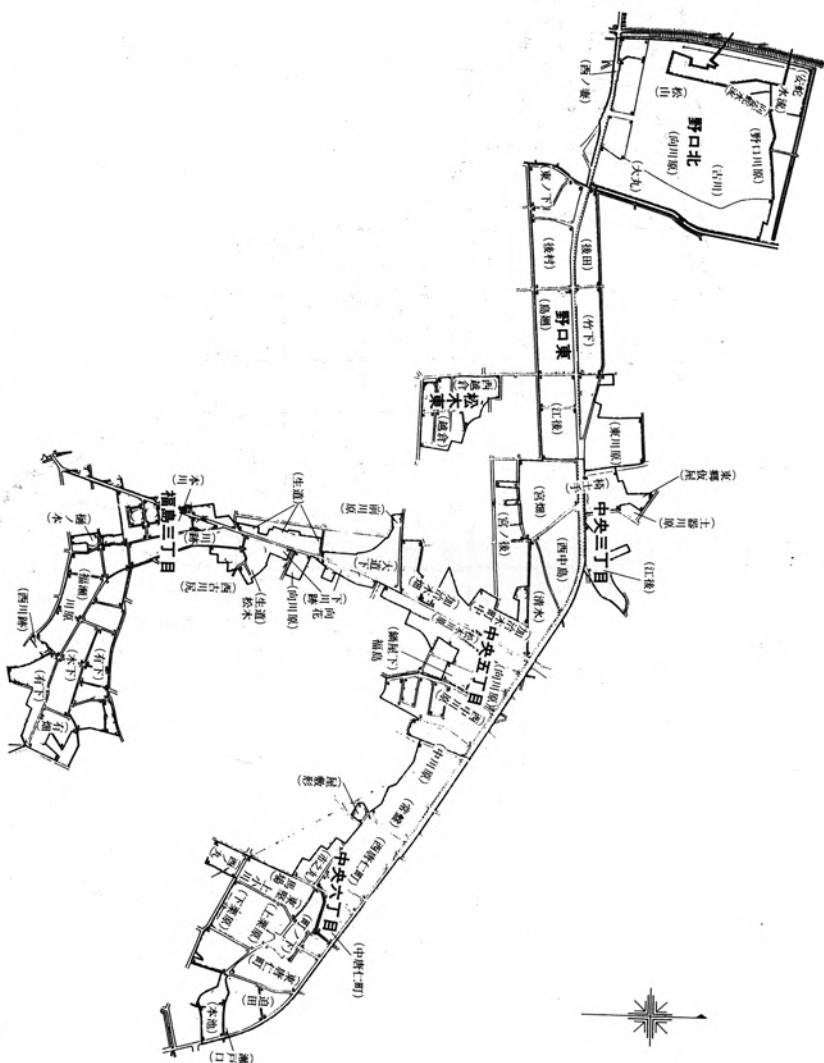


図2-3 昭和59年5月1日付 住居表示地域の字調査図（広瀬一～四丁目）

昭和62年12月1日付 住居表示地域の字調査図(中央五〜六丁目・福島三丁目・松木東・野口北・野口東・中央三丁目の追加)



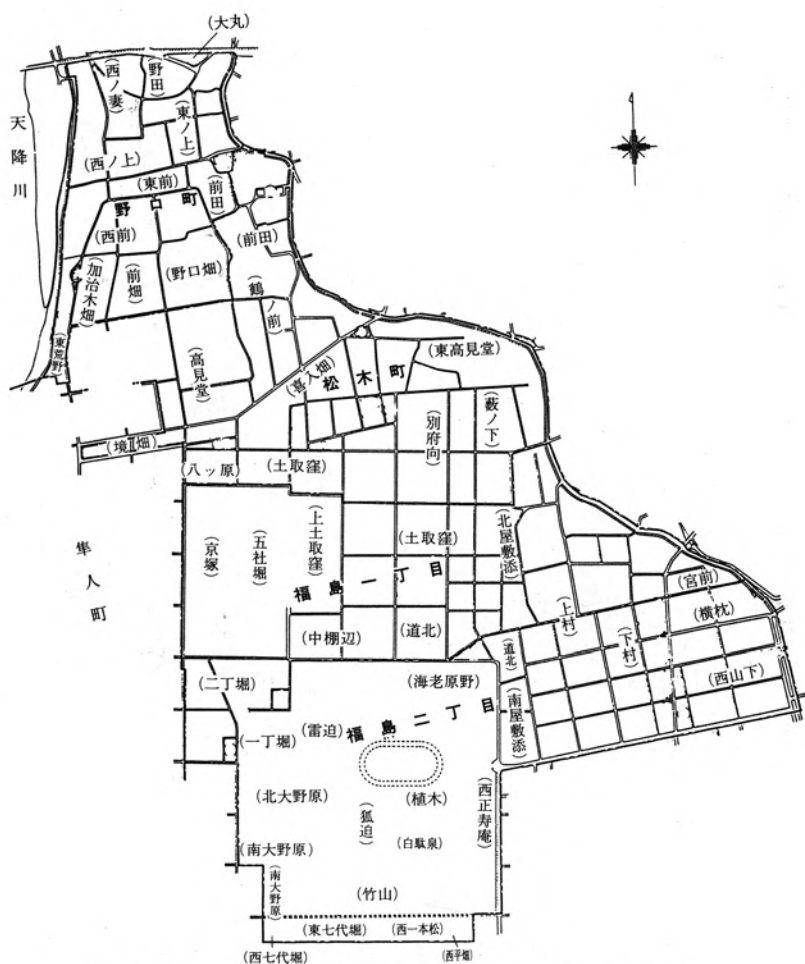


図2-5 昭和59年12月1日付 住居表示地域の字調査図
(福島一～二丁目・松木町・野口町)

第2章 人口と集落

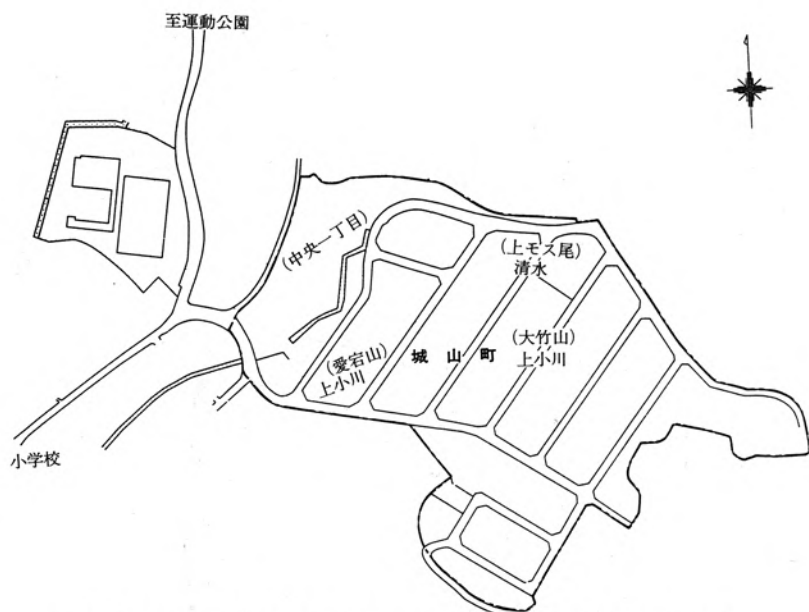


図2-6 昭和59年5月1日付 住居表示地域の字調査図(城山町)

(府中・向花の各一部)

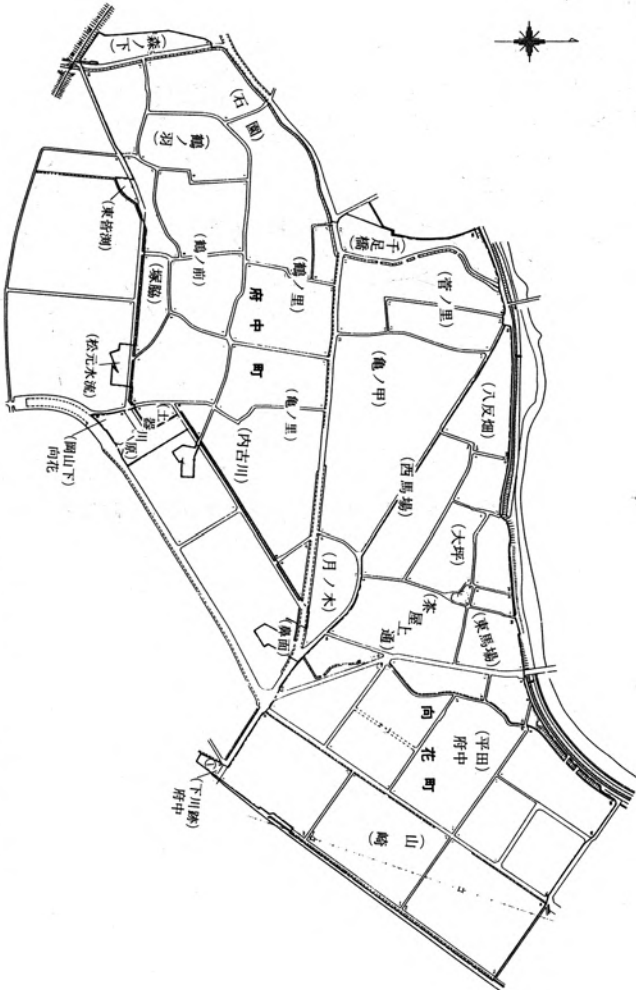
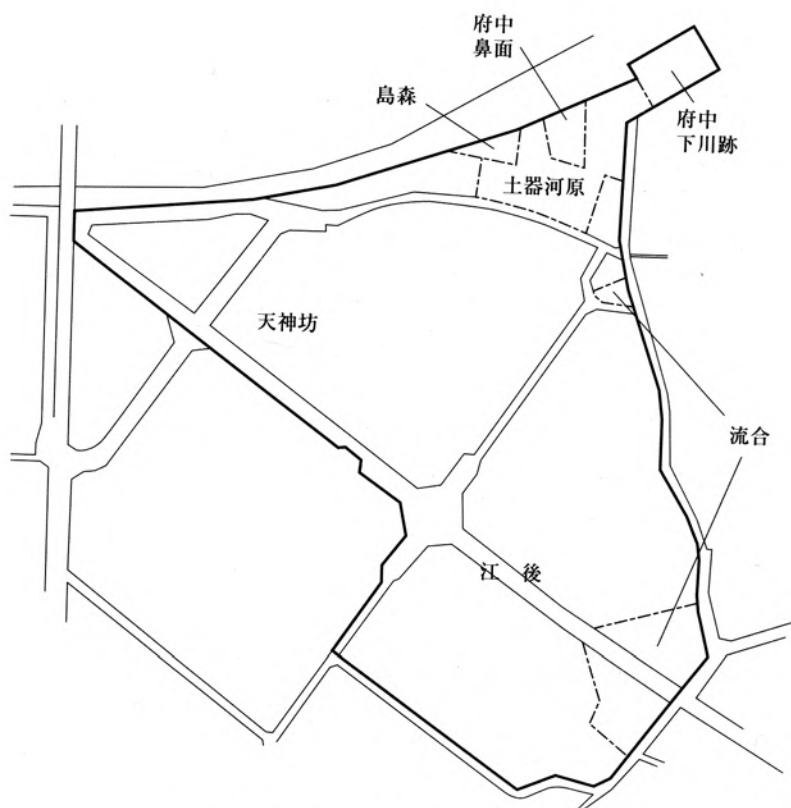


図2-7 平成元年1月17日付 住居表示地域の字調査図 (府中町・向花町)



2-8 平成8年12月2日住居表示実施
(中央三丁目追加地区の字調査図)